

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (2)

— Śakracyavana, Mahendrasena, Pretikā の説話 —

岡 野 潔

南アジア古典学 第6号 別刷

South Asian Classical Studies, No. 6, pp. 165–266

Kyushu University, Fukuoka, JAPAN

2011年7月 発行

Kalpalatā と Avadānamālā の研究 (2) — Śakracyavana, Mahendrasena, Pretikā の説話 —

九州大学 岡野 潔

略号

Avś = Avadānaśataka

Kalpalatā = Bodhisattvāvadānakalpalatā

RAM = Ratnāvadānamālā

R15 = the chapter 15 of the Ratnāvadānamālā

S30 = the chapter 30 of the Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

SMRAM = Subhāṣitamahāratnāvadānamālā

本論文は中世インド・ネパールの韻文仏教説話集成の研究として、第一部で、前号に引き続き11世紀カシュミールの詩人 Kṣemendra の Bodhisattvāvadānakalpalatā (『菩薩のアヴァダーナの如意鬘』) の二つの章、第78章 Śakracyavanāvadāna (シャクラの死没のアヴァダーナ) と第79章 Mahendrasenāvadāna (マヘーンドラセーナ王のアヴァダーナ) の校訂と翻訳を行う⁽¹⁾。

第二部では、中世ネパールのアヴァダーナ・マラー文献に属する、餓鬼女 (pretikā) についての二つの話 (アヴァダーナ) を校定し、和訳する。二つの話とは Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (『善説・偉大な宝珠アヴァダーナ集成』) の第30章 Jātyandhapretikāvadāna (生盲餓鬼女アヴァダーナ) ならびに Ratnāvadānamālā (『宝珠アヴァダーナ集成』) 第15章 Pretikāvadāna (餓鬼女アヴァダーナ) であり、どちらも Avadānaśataka (梵文『撰集百縁経』) からの韻文再話文献である。それぞれ Avadānaśataka 第47章と第44章に基づいているので、それらの章の内容との比較も行いたい。

第一部

Avadānakalpalatā 第78章 Śakracyavana と第79章 Mahendrasena

(1) マールブルクの Michael HAHN 教授と出本充代博士は、第一部の Kalpalatā 第78章と第79章ならびに第二部の SMRAM 第30章の原稿を入念にチェックをして下さり、多数の修正意見を下さった。今年は特に状況が困難であったにもかかわらず貴重な時間を割いて下さったお二人の御親切に心から御礼申し上げる。

第1節 第78章 Śakracyavanāvadāna 「シャクラの死没のアヴァダーナ」

この第78章のアヴァダーナは阿含・ニカーヤ聖典から派生した説話であり、並行話として次のものがある⁽²⁾：

(1) パーリ長部『帝釈の問いの経』、[DN No. 21] Sakkapañha-suttanta, DN, II, 263-289.

(2) 大正 No. 1 長阿含経卷十、(14) 釈提桓因問経、T1 62b-66a.

(3) 大正 No. 15 帝釈所問経、宋法賢訳、T1 246c-250c.

(4) 大正 No. 26 中阿含卷三十二、(134) 釈問経 T1 632c-638c.

(5) 大正 No. 125 増一阿含卷二十四（善聚品第三十二）、(6)経、T2 677b-679a

(6) 大正 No. 203 雜宝蔵経卷六、(73) 帝釈問事縁、T4 476a-478b.

(7) 大正 No. 2087 大唐西域記卷九、T51, 925a.

(8) 梵文の阿含経 Śakrapraśnasūtra の中央アジア写本断片：E. WALDSCHMIDT (1932): *Bruchstücke buddhistischer Sūtras aus dem zentralasiatischen Sanskritkanon*, Kleinere Sanskrit-Texte Heft IV, Leipzig, 1932, S. 58-113 (Śakrapraśnasūtra); E. WALDSCHMIDT et al., *Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*, I 409, 581; V 1151+VI 1415R2-5, V 1421,1422; VII 1687B.

Kalpalatā の本説話の内容は、阿含・ニカーヤ聖典の『帝釈の問いの経』と密接に関連するが、しかし Kṣemendra が本説話の作成に際し、どこかの部派のその阿含・ニカーヤの経典を直接見て作成したとは思えない。むしろ聖典の註釈的説明の伝統に由来する未知の説話を Kṣemendra は利用したのであろう。つまり本説話の源泉資料は、聖典の『帝釈の問いの経』というよりも、聖典から派生して後代に作られた或る説話であったと思われる。

Kalpalatā の本説話と『帝釈の問いの経』の間には多くの共通する要素がある。洞窟中で火界定に入られている釈尊をインドラ神が訪ねたこと、釈尊に来訪を告げる前にインドラ神の要請でガンダルヴァの子パンチャシカがヴィーナ（琵琶）を演奏しながら歌ったこと、また経の最後でインドラがお礼としてパンチャシカをガンダルヴァの娘と結婚させたこと、またインドラが釈尊の教えを聴聞して法眼を生じ、釈尊に帰依したこと、などである。

Kalpalatā の本説話と大きく違っている点もある。聖典の中核部分はインドラとの哲学的な対話にあるといつてよいが、その部分が本説話では全く省かれている。また本説

(2) このインドラの説話に関連する欧文論文の書誌情報は次を参照：Leslie GREY (1994): *A Concordance of Buddhist Birth Stories*, second edition, Oxford, pp. 115-116 (s.v. Indra).

話では、インドラが死没の兆候たる五衰を感じて、己の天界からの死没が間近であることを知って苦悩し、それを免れるために釈尊に救いを求めて来る。インドラのこの苦悩と救済の願いこそが、本説話が物語として成立するための最重要な要素なのであるが、聖典の『帝釈の問いの経』にはこの死没の苦悩の問題が明確に表現されていない。聖典ではインドラに、釈尊に会わんとする「熱意が生じた」(ussukkaṃ udapādi)と語るだけで、釈尊訪問の特別な動機が説明されていない。聖典が成立した時期にはその動機がまだ明確な形を取っていなかったのであろう。本説話にあるような、死の前兆を見て間近に迫った死没への恐怖がインドラを聴聞に駆り立てた、という説明は、むしろ聖典に対する解釈の伝統において、生じたものであろう。実際にパーリの『帝釈の問いの経』に対するアッタカターでは、インドラが釈尊を訪問した直接の動機が、五つの前兆(pañca pubbanimittāni)を見たことによる死への恐怖であったことが説明されている(*Sumaṅgalavilāsini*, PTS 版 697-698; ビルマ版 II, 290; この註釈の箇所和訳は片山一良(2004):『長部 大篇 II』、大蔵出版、353頁)。アッタカターにおけるこの、五衰を見たから、という注目すべき説明は、パーリ上座部の註釈の伝統に限られるものではなく、インドの別の部派伝承にもあったことが、Kalpalatāの本説話から私たちは確認出来るのである。Kṣemendraに説話の原話を提供したと思われる西北インドの小乗部派の伝承でも、パーリ上座部のアッタカターと同様に、『帝釈の問いの経』に関連してインドラの五衰の苦悩が来訪の動機として説明されていたのであろう。その解釈の伝承に基づいて、本説話が成立した。本説話はパーリのアッタカターとインドの部派の伝承との間でどこかの時代に交流があったことの証拠となるものである。

インドラが五衰に苦悩するという説明が註釈文献で出てきたのは、聖典の『帝釈の問いの経』のテキスト内容と全く無関係なわけではなく、恐らく聖典の終わり近くにある一連の韻文の内容がヒントになってその延長上に、インドラの五衰と死没の恐怖、そこからの救済の物語が作られたのではないと思われる。それは、パーリ長部の経では、世尊の説法を聞いた後に六つの事由(果報)を得て感激したインドラが、六つの事由を六詩節として述べる箇所である(DN, II, 285-287)。その六つの事由は、要約すれば、ここでインドラ神として生存している自分が今や再び別の生を得たこと(第一の事由)、このインドラ神の生を捨てて神々の世界から死没して人間の母胎に入ること(第二の事由)、人間として仏の教えに親近して正覚を得ること(第三と第四の事由)、後にその人間の生を捨てて神々の世界に戻り神々の長インドラになること(第五の事由)、また最終的にはインドラの生存よりも高い有頂天に行くこと(第六の事由)である。

(ただし第四の事由でインドラが人間になって修行し正覚を得るなら、再びインドラに戻る必要がなくなるので、最後の第五と第六の事由は、もしも人間界に下って僧になっても解脱が得られなかった場合のことを述べている、とこの詩を解釈することも出来る。正覚 sambodhi の解釈が問題となる。) 聖典の六詩節はやや曖昧な内容であることから、後代にはその詩の解

釈・説明が必要となり、インドラが神の生を捨てて死没して、人間に生まれ変わって出家し悟りを得た後に、また再び神の世界に戻ってインドラになり、最後にはさらに上の世界に行く、といった内容のストーリーが解釈として出来て、その詩の解釈から更に、人間に生まれ変わって僧として修行することが省かれて、インドラは死没して再びインドラに生まれるという本説話のような形に話が若干変わったのではないだろうか。

またこのインドラの五衰とその救済に関するストーリーの成立については、別の阿含經典との関係も考慮しておく必要がある。増一阿含卷二十四（善聚品第三十二）にある一經（T2 677b-679a）は——パーリ聖典にはそれに相当する経を欠いているが——三十三天の或る神が味わう五衰の苦悩から話が始まる。その苦悩する神はインドラに相談し、インドラはその神に対して仏法僧に帰依するように勧める。その神は死ぬ前に三宝に帰依し、人間に生まれ変わって釈尊のもとで修行する誓いを立て、それから死んで人間界に下生して、インドラの導きにより舍利弗のもとで出家し、阿羅漢となる。増一阿含のその経に見られる、五衰の苦悩から始まる話の展開は、インドラ本人という設定ではないものの、間接的には、『帝釈の問いの経』におけるインドラの釈尊訪問の理由の伝承と関連してくるのではないかと思われる。増一阿含のその経でインドラが担う助言者としての役割は、Kalpalatāの本説話ではインドラの妃シャチャーが担うことになる。

インドラの釈尊訪問の理由は死への恐怖であったという註釈の解釈に関して、もう一つ、注目すべき伝承がある。かつてインドラが他の沙門・婆羅門を訪れて質問したことがあったという段落の箇所、漢訳長阿含の釈提桓因経には次の文がある：「世尊、我復於後時、見諸大神天自恣五欲已、漸各命終。時我、世尊、懷大恐怖、衣毛爲豎。」（T1 65a27-29）。この文では、偉大な神々が欲望を恣にしつつ、やがてそれぞれが死んでゆくのをインドラは見て、その時大恐怖に襲われ、身の毛もよだつほどであった、という過去の体験が、インドラの口から語られる。この聖典の文から、今回のインドラの釈尊訪問の動機も、実はその時に引き起こされた死への恐怖によるものであったという解釈が出てくる可能性は大いにあると思う。この長阿含（法蔵部伝承）の文は、パーリ長部の『帝釈の問いの経』には相応文が無い文なのであるが、それと同様な文は中阿含（有部伝承）の釈問経にも見出せる：「大仙人、我等放逸、行放逸已。大威徳天子於極妙處即便命終。大仙人、我見大威徳天子於極妙處即命終時、便生極厭、身毛皆豎。莫令我於此處速命終。」（T1 637b6-10）。また雑宝蔵経にも相当する文が存在する：「諸大威徳天福盡命終。我時恐怖。」（T4 477c21）。宋の法賢訳の帝釈所問経にも相当文が有る（T1 249c1-3）。これらの伝承においては、インドラの死への恐怖は他の神々が死んでゆくを見て引き起こされたものであり、本説話のようにインドラ自身に出現した五衰によって引き起こされたものではない点が違っている。このように北伝の阿含の伝承では、インドラの周囲の神々が死んだことを見て引き起こされた死への恐怖がインドラの他の沙門婆羅門訪問の動機であったことを説く文が、聖典のテキスト

ト内に存在していたことに注意する必要がある。その、かつてインドラが感じた死への恐怖を語る文が、今回のインドラの釈尊訪問の動機をも説明するものとして聖典解釈学で解釈されていったとしても、それは北伝の伝統ではごく自然な流れであったろう。

このように聖典解釈学における、インドラの釈尊訪問の具体的動機が死没への恐怖であったという説明が、パーリ上座部の聖典内では上記の「六つの事由」の詩節の解釈から派生したとしか説明できないのに対して、北方の阿含ではそれに加えて、同じ聖典の別の箇所にも、その「死没への恐怖から」という解釈を生じさせる根拠となる文が存在することになる。そのため、パーリのアッタカターの「五衰を見たから」という説明は、実は北方の阿含伝承から生まれた解釈がパーリ上座部に輸入されたものではないか、と疑うことも無理ではない。

本説話の最後に置かれたインドラの前生の話（第28～29詩節）は、昔ショーバーヴァティーという都のショーバという名の王が、クラクチャンダ仏の塔を作らせたため、その福德と誓願の力により次の生でインドラになったことを説明する。このインドラの過去世の因縁譚は、仏塔建立の福田信仰と誓願（*praṇidhāna*）の思想から生じたことは明白であり、この話が比較的新しい時代に成立したことを証拠立てると思われる。少なくとも阿含・ニカーヤ聖典にその前生話の典拠を得ることは出来ない⁽³⁾。

Kalpalatā の本説話はわずかに29詩節から成るが、以上のように、本説話を作り上げた背後の伝承を考察する出発点として見る時、興味が尽きない。では、以下に梵文と蔵訳の校定テキストを挙げる⁽⁴⁾。蔵訳テキストで、ネパール伝承の梵文と相違する注意すべき箇所は太字にした。

78 Śakracyavanāvadāna

D: Khe 173a1-175b4 Q: Ge 287b7-289a4 N: Ge 257b3-258b6

G: Ge 363a2-364b4 T: 484a1-486a4

Skt. Mss.: A *311b2-*313a3; E 77b5-79a1; B 92b1-93a10

(3) 初期仏教聖典における、インドラが前生でなした福德行為の記述は、パーリ聖典の相応部のサッカ相応の中の経（SN, I, 229 [Devā (2)]；雑阿含経卷四十、1106 経、T2 290c-291a）に見られる。そこでは前世に様々な物を施した功德と七誓戒によってインドラに生まれ変わったと説く。

(4) 使用した略号は前号通り STRAUBE (2006) に従う：D = Derge; Q = Peking; N = Narthang; G = Ganden (or Golden Tanjur); T = ダライ・ラマ 5 世木版印刷版（梵蔵併記版）；β = GNQ; δ = DT; Ed. = editio princeps of Dās & Vidyābhūṣaṇa; de JONG = J. W. de JONG (1979) など。ただし全部の版 GNQDT を意味する大文字のオメガの記号は私の作業環境では使えないので、単純に β δ と記した。β と δ を足せば全部の版になるからである。

(In Ms. B, lines 1a-4c are omitted. The space they would have covered is left blank.)

uttuṅgaśṛṅgam adhirohati kautukasya

teṣāṃ prabhāvamahimā mahatāṃ mahārhaḥ /

ye pātayanty aśivasamśamanapragalbhāṃ

dr̥ṣṭim dayāpraṇayinīm tridaśeśvare 'pi // 78.1 //

1c aśivasamśamana°] AET, confirmed by Tib. zhi ba min pa zhi byed (= Skt. *aśi-vasamśamana): aśirasam śamana° Ed. Cf. de JONG.

/ {D173a1, T484a1} uttuṅ ga śṛṅ ga ma pi ro ha ti ko tu ka sya te ṣāṃ pra bhā ba ma hi mā ma ha (taṃ D: tāṃ T) ma hā rhaḥ / ye pā ta yaṃ tya śi ba śaṃ pa ma na pra ga lbhyaṃ ṭṣṭim da yā pra ṇi (yaṃ D: yi T) nīm tri da śe śva re pi /

三界の主宰神（神々の王インドラ）に対してすら、憐れみと愛情に溢れて、[彼の]不幸を鎮めることに熱意ある視線を落として下さる偉大な方々（仏）がもつ、甚だ尊敬に値する威力の偉大さは、驚異の高い頂点に昇る。

/ gang *gis skabs gsum dbang phyug la yang brtse ba dang ldan pa'i // mig ni zhi ba min pa zhi byed la dpa' ltung byed pa /

/ chen po de dag mams kyi mthu ni cher 'os chen po nyid // dge mtshan *gyi ni rtse mo shin tu mtho ba dag tu 'dzegs /

1a gang *gis] ex con: gang gi β δ || dbang phyug] δ: om. β || brtse] δ: rtse β.
1d *gyi ni] ex con: gyis ni β δ || 'dzegs] δ: mdzes β.

sabhāsīnaḥ purā śakras tridivacyutilakṣaṇaiḥ /

spr̥ṣṭaḥ siṃhāsanotsaṅge na ratim pratyapadyata // 78.2 //

2a śakras] AET: śakraḥ Ed.

/ sa bhā sī naḥ pu rā śa krasti di ba cyu ti lakṣa ṇaiḥ / spraṣṭa siṃ hā sa notsaṃ ge na ra ti pra tya pa dya ta /

かつて [神々の] 集会場に坐るシャクラ（インドラ神）は、天界からの死没の様々な特徴（前兆）に会い、王座の懷の中に居ても、楽しまなかった。

Note 2b] 神の死没の時に現れる五つの前兆（いわゆる天人五衰）については、パーリ聖典では Itivuttaka 83経（Cavamāna）の記述があり、漢訳阿含では増一阿含卷二十四（T2 677b-c）と卷二十六（T2 693c）と卷四十九（T2 814c）の記述がある。

/ brgya byin mdun sar 'khod pa sngon // mtho ris nas lhung mtshan nyid kyi /

/ reg cing seng ge'i gdan steng du // dga' ba rab tu thob ma gyur /

2a mdun] δ: 'dun β.

suvarṇarucirā tasya maulau mandāramālikā /
apuṇyotsannatāruṇyaśrīr iva mlānatām yayau // 78.3 //

3c tāruṇyaśrīr] T: tāruṇyā śrīr AE (also possible).

/ su barṇa ru ci rā ta sya mau lau manda ra mā li kā / u pu ṇyotsanna tā ru ṇya śrī ri ba mlā na
tām ya yau /

彼の頭頂に置かれた黄金に輝くマンダラーの花輪は〔死没の前兆として〕まるで不徳
により若さが減損したシュリー（繁栄の女神）のように萎れてきた。

/ de yi mgo la *mandā ra'i // phreng ba gser ldan mdzes pa ni /

/ bsod nams ma yin bsgribs pa yi // lang tsho'i dpal bzhin nyams par gyur /

3a *mandā] ex conī: manda ḍ : mandha β . 3c ma yin] ḍ : min pas β || pa yi] β : pa yis ḍ .
3d tsho'i] ḍ : mtsho'i β .

yaśaḥśubhre vilopāya tilake tasya cakrire /
apavādā iva navāḥ padaṃ svedodabindavaḥ // 78.4 //

/ ya śaḥ śundhe bi lo pā ya ti la ka ta sya, cakri be / a pa {D173b} bā dā i ba na baḥ pa daṃ sve
dau da binda baḥ /

まるで〔名声を穢す〕悪声のように、彼の名声に輝く〔額上の〕ティラカを消失させる
ために、新しい汗の滴りが出るようになった。

/ de yi thig le grags pa ltar // dkar la nyams par bya ba'i slad /

/ rngul gyi chu thigs gsar pa yis // ngan smras bzhin du gnas dag byas /

4c rngul] ḍ : dngul β .

āsannapatanasyātha cintāsaṃsaktacetasaḥ /
īrṣyāruṣṭeva prayayau tasya dūratarāṃ dhṛtiḥ // 78.5 //

/ ā sanne pa ta na syā tha {T484b} cinta saṃ sakta ce ta saḥ / irṣya ru ṣe ba pra ya yau tasyā dū
ra ta raṃ dhṛ tiḥ /

近づく〔天界からの〕落下を心配すること（cintā）から心が離れない彼から、まるで
〔それに〕嫉妬した怒った女のように、心の堅固さが遠くへ去った。

/ *da ni sems ni bsams pa la // chags shing ltung la nye gyur pa /

/ de yi brtan pa phrag dog gis // khros bzhin rab tu ring bar song /

5a *da] ex conī: de β ḍ || ni sems] ḍ : yi sems β || bsams] ḍ : bas β . 5b ltung]
β T: lung D (also possible). 5c brtan] β : bstan ḍ .

śucaḥ paricitāṃ dṛṣṭvā tam ūce cakitā śacī /
āsanne 'smin nipatane cintyatām avalambanam // 78.6 //

/ śu caḥ pa ri ci taṃ dṛṣṭva ta mū ce ca ki tā śa cī / ā panne smi (nne D: nni T) pa ta ne cintya tā
ma ba lamba naṃ /

悲悩にみちた彼を見て、不安をいだいたシャチーは言った。「この落下（死没）が近いなら、頼りになるものをお考え下さい。」

/ mya ngan yongs 'dris de mthong nas // 'jigs pa'i bde sogs kyis smras pa /
/ ltung ba dag la nye ba 'dir // rten ni rab tu bsam par mdzod /
6b bde] β: sde ḍ . **6c** nye ba] ḍ : nye bar β .

alaṅghyaṃ nāsti lokeṣu vipadām iti niścayaḥ /
tavāpi jagatām patyur yad imāḥ kleśavipluṣaḥ // 78.7 //

/ a laṃ ghya nāsti lo ke ṣu na pa dā mi ti niśca yaḥ / ta bā pi ja ga tāṃ pa tyu rya di mā kle śa
bi plu ṣaḥ /

「もし（yad）世界の主であるあなた様であっても、これら微量の煩惱を有しますなら、定めて、世の中の諸々の不幸から免れていることはないのです。」

/ 'jig rten rnam la rgud pa *yi // bgom bya min pa med ces nges /
/ gang zhig nyon mongs thigs pa 'di // 'gro ba'i bdag po khyod la yang /
7a *yi] ex con: yis β ḍ . **7b** bgom] D: bsgom β T.

sarvathā khalu vaimukhyād anviṣyānviṣya yatnataḥ /
mahadbhiḥ saṅgam icchanti guṇalubdhā ivāpadaḥ // 78.8 //

8a khalu] T, confirmed by Tib. nges par: khal[u] A: khala BE (= Ed.). **8d** lubdhā] AT (= Ed.): labdhā BE.

/ sarbba thā kha lu bai mu khyāḥ darthi śyārthi ṣyi yatna taḥ / ma hadbhiḥ saṃ ga micchanti gu
ṇa lubdhā i bā pa daḥ /

「実にもろもろの不幸は、嫌悪（顔を背けた状態）から [振り向き]、懸命に（sarvathā）努力して探し求めつつ、まるで徳（guṇa）を欲するかのよう、偉大な人々との交際を求めます。」

/ nges par rnam kun phyir phyogs pas // 'bad pa yis ni btsal btsal nas /
/ ltung ba yon tan la sred *bzhin // chen po rnam dang 'grogs par 'dod /
8b pa yis] ḍ : pa yi β . **8c** *bzhin] ex con: (cf. Skt. iva): cing β ḍ . [Sugg. HAHN]
8d 'dod] ḍ : mdzod β .

avatīrya svayaṃ tāvaj jambudvīpaṃ tvayā vibho /
mr̥g yatām śramaṇaḥ kaścīd vyaśane rakṣaṇakṣamaḥ // 78.9 //

9b jambu] T (= Ed.): jambū A: jambū BE. **9c** vibho] BT (= Ed.): vibhoḥ A: vimo E.

/ a ba tīrya sva yaṃ tā bata jaṃ bu dvī paṃ tva yā bi bho / mṛ gya tāṃ śra ma ṇaḥ kaścīdbā sa
na rakṣa ṇa kṣa maḥ /

「主よ、まずはあなた様は自ら閻浮堤に降下して、苦難から護る力のある沙門をお探しになって下さい。」

Note 9d vyasane] この vyasane を vyasana- と、複合語として読んだ方が意味的によい。しかし pāda の第2音と第3音が短の連続になるという韻律上の欠点により vyasane のまま読む。

/ khyab bdag rang nyid 'dzam gling du // re zhig bobs la khyod kyis ni /
/ rgud pa bsrung bar bzod pa yi // dge sbyong 'ga' zhig btsal bar mdzod /

9a khyab] δ : khyod β . 9c bsrung] δ : srung β (also possible). 9d sbyong] δ :
slong β || btsal] β : btsal δ .

prabhāvavipulotkarṣāḥ śrūyante śramaṇāḥ kila /
yujyante kuśalair eva yeṣāṃ kuśalagāmināḥ // 78.10 //

10b śramaṇāḥ] A(post corr.)E: śravaṇāḥ A(ante corr.): śravaṇā B

/ pra bhā ba bi pu lotkarṣāḥ śru yenta {D174a} śra ma ṇāḥ ki la / yu ṣyanta ku śa lai re ba ye
sāṃ ku śa la gā mi naḥ /

「沙門たちは、すごく卓越した神力をもつことで聞こえているそうです。彼らのもとでは、幸せに進まんとする者たちが、幸せを持つに至っています。」

/ gang dag dge bas bgrod byed cing // dge ba nyid kyis sbyor byed pa /
/ dge sbyong mthu ni rgya che zhing // khyad par 'phags pa grags pa thos /

10a bgrod] δ : 'gro β . 10c sbyong] δ : slong β . 10d pa] δ : par β .

iti priyāvacaḥ śrutvā tathety uktvā marutpatih /
kṣitim abhyetya papraccha śramaṇān kleśasaṃkṣayam // 78.11 //

/ i ti pri yā ba caḥ śru tvā ta the tyuktvā ma rudpa ti / kṣi ta ma bhye tya pa praccha śra ma ṇā
kle śa saṃ kṣa yaṃ /

以上の愛しい女の言葉を聞いて、「そのようにしよう」と答えたインドラ神は、地上に赴き、沙門たちに〔彼の〕苦悩の消滅を質問した。

/ zhes pa dga' ma'i tshig thos nas // de bzhin zhes smras lha yi bdag /
/ sa la mngon phyogs nyon mongs ni // 'jil ba dge slong rnams la dris /

11b smras] β : smra δ .

śakrapraṇayamātreṇa te prabhāvābhimāninaḥ /
babhūvur añjalivyagrās tatpraṇāmanatānanāḥ // 78.12 //

/ śa kra pra ṇa yaṃ mā tre ṇa te pra bhā bā bhi mā (naṃ D: ni T) niḥ / ba bhū bu {T485a} ruñ-
ja li bya grāstatpra ṇā ma na tā na nāḥ /

彼らは神力を自慢に思っているものの、シャクラに親愛を表するためだけに、彼に頭
を下げて拝礼し、一心に合掌した。

/ brgya byin gyis ni dris tsam gyis // mthu yis mngon khengs de dag gis /
/ thal mo sbyar byas de nyid la // phyag 'tshal bzhin ras btud par gyur /

12a dris] ḍ : dri β . 12d 'tshal] β : btsal ḍ .

te kurvanti katham rakṣāṃ mām eva praṇamanti ye /
patir dhyātveti marutāṃ bhagnāśaḥ svapadaṃ yayau // 78.13 //

13d bhagnāśaḥ] AT: magnāśaḥ B: magnāthaḥ E.

/ te kurbanti ka thaṃ rakṣā mā me ba pra ṇa manti ye / pa (tirdhyā D: tirdhyā T) tve ti ma ru
tā ma bhagnā śaḥ sva pa daṃ ya yau /

「私にむかって平伏する彼らが、どうして私を護れようか」と、マルト神群の主（イ
ンドラ）は考えて、失望して、自分の住まいに戻った。

Note 13a-d] この第11～13詩節の出来事に相当すると思われる記事が長部経典『帝釈の問いの
経』（*Sakkapañha-suttanta*, DN, II, 284）にある。インドラが釈尊を訪ねて質問する遙か以前に、
他の沙門・バラモンたちの所に行つて質問した事があった。その際、インドラが彼らの弟子にな
ることはなく、逆に彼らがインドラの弟子になってしまったという思い出が、インドラの口から
釈尊に報告される。この出来事が少し違った形で変形して、本説話の第11～13詩節で語られる出
来事になったと思われる。

/ gang zhig bdag nyid la 'dud pa // de *yis ji ltar srung byed 'gyur /
/ zhes bsams lha yi bdag po ni // re ba nyams pas rang gnas song /

13b *yis] ex con: yi β ḍ || 'gyur] ḍ : gyur β . 13c zhes bsams] ḍ : ces bsam β .

tataḥ sa sugataṃ jñātvā saṃprāptaparamāmṛtam /
pratyāsanne nipatane paritrāṇam amanyata // 78.14 //

14c nipatane] T: nipatine A(post corr.): nipati.. A(ante corr.): nipatite B (= Ed.): ni-
patitve E. Cf. de JONG.

/ ta taḥ sa su ga taṃ jñā tvā saṃ prāpta pa ra mā mṛ tam / pra tyā sanne ni pa ta ne pa ri trā ṇa
ma ma tya ta /

その後彼は、善逝が至高の不死 [の境地] を得ていることを知り、近づく落下（天界
からの死没）における救いであると [彼を] 見なした。

/ de nas de *yis bde gshegs ni // mchog gi bdud rtsi thob shes nas /
/ ltung ba rab tu nye ba *na // yongs su skyob pa dag tu bsams /

14a de *yis] ex conī: de yi β δ . 14c ltung ba] δ : ltung la β || *na] ex conī: ni β δ .

indramālaguhāgarbhasthitam so 'tha tathāgatam /
tejodhātusamāpannam yayau draṣṭum saḥānugaiḥ // 78.15 //

/ indra mā la gu hā garbha sthi tam po tha ta thā ga tam / te jo dhā tu sa mā pannaṃ ya yau
traṣṭum sa hā nu gaiḥ /

インドラマラー洞窟の内奥に居られる、火界定に入られている如来に会うため、彼は供を連れて [そこに] 赴いた。

Note 15a indramālaguhā] この洞窟の名は、パーリ聖典の伝承では王舎城の東方の Ambasaṇḍā という婆羅門村、その北の Vedyaka 山にある Indasāla-guhā として伝わる (*Sakkapañña-suttanta*, DN, II, 263)。また中央アジア・トゥルフアン写本断片では、Indraśailaguhā と記されている (SHT, Teil 5, Nr. 1151)。これは有部聖典の伝承であろう。古聖典の Indasāla / indraśaila の伝承から、Kalpalatā の伝えるこの Indramāla という伝承は外れているように思われるので、sāla → māla と、あるいは saila → saila → māla と、字が変わった可能性がある。ただし Kalpalatā の藏訳は梵文の māla の読みを支持する (dbang po'i phreng ba = indramāla)。

/ de nas de ni rjes 'brang bcas // dbang po'i phreng ba'i phug nang na /
/ de bzhin gshegs pa me khams la // snyoms zhugs gnas pa lta ru song /

15b phreng] β D: 'phreng T. 15d snyoms zhugs gnas pa] δ : snyoms gnas zhugs pa
NQ: snyoms gnas pa G.

guhāntikam athāsādyā saḥāyāḥ śacīpatiḥ /
ūce pañcaśikhaṃ nāma gandharvasutam ādarāt // 78.16 //

/ gu hānti ka ma thā sā hyā pa ha śacī pa {D174b} tisti taḥ / ū ce pañca (śī D: śī T) khaṃ nā
ma gandha (rbha D: rbba T) su ta mā da rā ha /

インドラ神は供を連れて洞窟に到着すると、パンチャシカという名のガンダルヴァの子に鄭重に語った。

/ de nas bde sogs bdag po des // 'phral la phug dang nye bar phyin /
/ zur phud lnga pa zhes pa yi // dri za'i bu la gus pas smras /

16d smras] β : smra δ .

Note 16ab des // 'phral la] 梵文 saḥāyāḥ 「供をつれて」の語が藏訳と一致せず、藏訳は saḥāyāḥ の語を des 'phral la (= Skt. *sa sahasā) と読んだ可能性がある。また梵藏併記版の藏字梵文の pāda b は pa ha śa cī pa tis ti taḥ と伝承され、ネパール写本梵文の pāda b とうまく合わない。元のチベット伝承の梵文の読みが乱れていたのではないか。

tejodhātusamāpannam bhagavantam tathāgatam /

svakalākauśalena tvam̐ prabodhayitum arhasi // 78.17 //

/ te jo dhā tu sa mā pannaṃ bha ga bantaṃ ta thā ga taṃ / sva ka lā kau śa le na tvāṃ pra bo
dha yi tu marha si /

「火界定にお入りになっている如来を、君は技芸における熟練 [のわざ] で [瞑想よ
り] 覚醒させてください。」

/ de bzhin gshegs pa bcom ldan 'das // me yi khams la snyoms zhugs pa /

/ khyod ni rang gi sgyu rtsal la // mkhas pas rtogs par bya bar 'os /

17d rtogs par] β : rtogs pa ḍ .

upasarpaty akāle yaḥ praviśaty aniveditaḥ /

anāśayajñāḥ sa satām avamānasya bhājanam // 78.18 //

18b praviśaty] E (= Ed.), confirmed by Tib. nang 'jug: pratiśaty A: pra bhi pa ty T:
pravisaty B.

/ u paryyaryya tya kā le yaḥ pra bhi pa tya ni be di taḥ / a nā śa ya jñāḥ sa pa tā ma ba mā na
sya bhā ja naṃ /

「知らせずに、適切でない時にやって来て、 [ずかずか] 入り込む、 [人の] 気持ち
を察しない者は、気高い者たちからの軽蔑の器となります。」

/ gang zhig dus min nyer bgrod dang // ma brjod par ni nang 'jug dang /

/ bsam pa shes pa min pa de // dam pa rnam *kyi smad pa'i gnas /

18a bgrod] ḍ : 'grod β (also possible). 18b par ni] ḍ : par mi NQ: par min G. 18d
*kyi] ex con: kyis β ḍ . [Sugg. HAHN]

ity uktaḥ surarājena dhīmān gandharvadārakaḥ /

vaiḍūryadaṇḍām akarod vīṇāṃ susvarasāraṇām // 78.19 //

/ i tyuktaḥ su ra rā je na dhī (mārggandharbha D: māngandharbba T) dā ra kaḥ / bai ḍūrya
daṇḍā ma ka raḥ dbī ṇāṃ su sva ra pāra ṇāṃ /

と、このように神々の王が語ったので、賢いガンダルヴァの子は、瑠璃製の撥をもつ
ヴィーナー（琵琶）から、美しい音色を響かせた。

/ zhes brjod lha yi rgyal po yis // blo gros ldan pa dri za'i bu /

/ bai ḍūrya yi dbyug pa can // rgyud mang sgra snyan len du bcug /

19c ḍūrya yi] ḍ : ḍūrya'i β . 19d mang] ḍ : mangs β (also possible).

svabhāvamadhurodāraramyābhiḥ stutigītibhiḥ /

sa vibodhya jinaṃ cakre darśanāvasaram̐ hareḥ // 78.20 //

20b ramyābhiḥ] T: rammyābhi B: ramyābhi AE.

/ sva bhā ba ma dhu ro dha {T485b} ra ra myā bhiḥ stu ti gī ti bhiḥ / sa bi bo dhya ji naṃ cakre
darśa nā ba pa raṃ ha reḥ /

本性として甘く美しく快い [性質の] 讃と歌によって、彼は勝者を目覚めさせ、イン
ドラに会う機会を作った。

/ rang bzhin gyis snyan yid du 'ong // bstod dbyangs dga' ba dang bcas pas /
/ de yis rgyal ba sad byas te // 'phrog byed lta ba'i go skabs *byas /

20c de yis] ḍ : de yi β . 20d *byas] ex conī (cf. Skt. cakre): phyē β ḍ . [Sugg. HAHN]

tataḥ praviśya sugataṃ devaiḥ saha śatakratuḥ /
dadarśa harṣajananam varṣantaṃ praśamāmṛtam // 78.21 //

21d varṣantaṃ] A: varṣanaṃ B: varṣaṃnaṃ E.

/ ta taḥ pra bi śya su ga taṃ de bai sa ha śa ta kra tuḥ / da darśa harṣa ja nana barṣantaṃ pra śa
mā mṛ taṃ /

それから神々を伴ってインドラは中に入り、歓喜を起こさせる寂靜の甘露を雨ふらせて
いる善逝に会った。

/ de nas lha dang bcas pa yi // mchod sbyin brgya pa rab zhugs te /
/ rab zhi'i bdud rtsi'i char 'bebs pa // dga' ba skyed byed bde gshegs bltas /

21c zhi'i] ḍ : zhi β . 21d bltas] ḍ : lhas β .

sa praṇāmānataḥ śāstur nakhadarpaṇamārjanam /
cakāra maulimandāramakarandena pādayoḥ // 78.22 //

22ab śāstur na°] ex conī (Ed.): śāstu nna° ABET.

/ sa pra nā maḥ śāstu na kha darppa ṇa mārjā naṃ / ca kā ra mau li mandā ra ma ka rande na
{D175a} pā da yoḥ /

彼は頭を下げて頂礼したが、[それは] 頭冠のマンダラー樹 (天界の木) の花汁に
よって、師の両足の鏡の如き爪を拭き浄め [るかのようであつ] た。

/ phyag 'tshal rab tu btud pa des // mgo yi *mandā ra ba'i ros /
/ ston pa'i zhabs kyi sen mo yi // me long dag ni rab tu phyis /

22a des] ḍ : de β . 22b *mandā] ex conī: manda ḍ : mandha β || ros] β : gos ḍ .

tatas tasya praviṣṭasya prasādam vidadhe jinaḥ /
*satyasya darśanād yena dharmacakṣur babhūva saḥ // 78.23 //

23c *satyasya darśanād] ex conī: satyadarśanād AT (metre!): tatsatyadarśanā BE:
satyasamdarśanād Ed.

/ ta tasta sya pra biṣṭa sya pra pā daṃ bi da dhe ji naḥ / sa tya darśa nāḍye na dharmma na cakṣurba bhū ba paḥ /

そして [中に] 入ってきた彼に、勝者 (仏) は恩恵を授けた。それにより (yena) 彼は真理を見たゆえ、法の眼となった。

Note 23c *satyasya darśanād] ネパールの貝葉写本 A ならびにチベットに伝わった梵語写本の蔵字音写 T には、どちらも satyadarśanād と 1 音が欠けていた。その 1 音の欠損を修復する試みとしてネパールの新しい紙写本 B と E は tat- を付け足した tatsatyadarśanā という読みを伝えている。Dās 本がそれらのネパール写本の読みを採用せずに、sam- を挟んで satyasamdarśanād としているのは恐らく conjecture としての読みであろう (特に注記をしてない)。しかし私は 1 音を補うなら *satyasya darśanād と読む。tya と sya の字が似ているために起こった haplography であろう。

Note 23d] Kalpalatā の「法の眼となった」という表現に相当するのが、パーリ長部『帝釈の問いの経』(DN, II, 288) の、「サッカに無塵にして無垢の法眼が生じた」(sakkassa devānam indassa virajaṃ vītamalaṃ dhammacakkhuṃ udapādi.) という表現である。また中央アジア出土梵文写本でもほぼ同じ文が見られる: śakrasya devendrasya virajo vigatamalaṃ dharmeṣu dharmacakṣur utpannaṃ [...] (WALDSCHMIDT (1932), S. 111).

/ de nas rab zhugs de la ni // gang gis bden pa mthong ba *las /

/ chos kyi mig ni 'byung gyur pa'i // bka' drin rgyal ba de yis mdzad /

23b *las] ex con: la β δ. 23c gyur pa'i] δ : 'gyur ba'i β. 23d rgyal ba] β : rgyas pa δ || de yis] δ : de yi β.

paricyutaḥ sa sahasā svam evāsanam āptavān /

tena puṇyaprabhāveṇa praśāntacyutilakṣaṇaḥ // 78.24 //

24d praśāntacyutilakṣaṇaḥ] T: praśāntaś cyutilakṣaṇaḥ ABE (= Ed.) [Sugg. HAHN]

/ pa ri cyu taḥ sa sa ha sā sva ya be bā sa na māpta (bāna D: bān_ T) / te na pu ṇya pra bhā be na pra śānta cyu ti lakṣa ṇaḥ /

ただちに [天界から] 死没した彼は、自分の [インドラの] 座を得た。彼の [得た] 福德の力により、死の兆候は消えた。

Note 24a sahasā] 出本充代博士のご教示によれば、仏の教説を聞いて預流を得るなどをして、次生にもっと善い生存状態に生まれ変わるための強い業因を得ると、その者はすぐに死没して、今の悪い生存状態を速やかに脱することがある (特に Avadānaśataka などの文献)。

/ yongs ltung de *yis 'phral la ni // rang gi stan nyid thob par gyur /

/ bsod nams mthu ni de dag gis // ltung ba'i mtshan nyid rab tu zhi /

24a *yis] ex con: yi β δ.

yāvajjīvaṃ sa sugataṃ śaraṇyaṃ śaraṇaṃ gataḥ /
atikrānto 'ham ity uktvā tam āmantrya yayau divam // 78.25 //

25d yayau] BET: samāyayau A (metre!).

/ ya bājī baṃ sa su ga taṃ śa ra ṇyaṃ śa ra ṇaṃ gataḥ / a ti krānto ha mi tyuktvā ta mā maṃ
ttrya ya yau di baṃ /

帰依に値する方である善逝のもとで、彼は生が続く限りの帰依 [の誓い] をした。
「私は [苦難を] 免れました」と告げて、別れの挨拶をして、天界に去った。

/ ji srid 'tsho bar bde bar gshegs // skyabs 'os de la skyabs su song /
/ bdag ni rab thar ces brjod nas // de la zhus nas mtho ris song /

25b skyabs] ḍ : skyab β.

Note 25b de la] この訳語 de la は梵語の *tam を推測させるが、梵文の pāda a を見ると *tam では
なく sa となっており、格が合致しない。この sa が求める訳語は de *yis である。

lalitāṃ tumburusutāṃ dadau pañcaśikhāya saḥ /
ṇavat kurute cintāṃ upakāraṇaḥ satām // 78.26 //

26c cintāṃ] A (= Ed.): cimtāṃm BE. 26d satām] A (= Ed.): sṛtām BE.

/ la li tāṃ tumbu ru su tāṃ da dau pañca śi khā ya paḥ / ri ṇa batku ru te cintā mu pa kāra ka ṇa
pa tāṃ /

彼はパンチャシカに、[ガンダルヴァの] トウンブルの美しい娘を与えた。善人たち
においては、ささやかな親切を得た時、まるで負債のように、それは [人を] 世話する
ことを引き起こすものだ。

/ tum bu ru yi bu mo mdzes // zur phud lnga pa la des byin /
/ dam pa rnams ni phan pa'i cha // bu lon bzhin du sems par byed /

26a bu ru] NQ: bu ra ḍ : bu rub G.

śakrasya kuśalāvāptyā pratyagrodbhūtavismayaḥ /
bhikṣubhir bhagavān pṛṣṭaḥ sarvajñas tān abhāṣata // 78.27 //

27b pratyagrodbhūta] T (pra tya groddhu ta), confirmed by Tib. gsar du 'khrungs pas
(= Skt. *pratyagrodbhūta): pratyayodbhūta ABE (= Ed.). Cf. de JONG.

/ śakra sya ku śa la bāpsyā pra tya groddhu ta bisma yayiḥ / bhikṣu birbha ga bānpṛṣṭaḥ sarbba
jña stā na bhā {T486a} ṣa ta /

インドラ神が幸せを得たことにあらためて驚きを生じた比丘たちに質問されて、世
尊・一切智は彼らに答えた。

/ dge ba thob pas brgya byin ni // gsar du 'khrungs pas ya mtshan pa /
/ dge slong gis dris bcom ldan 'das // thams cad mkhyen pas der gsungs pa /

śobhāvatyām puri purā śobhākhyah pṛthivīpatiḥ /
krakucchandasya śārīraṃ stūpaṃ śāstur akārayat // 78.28 //

28c krakucchandasya] ABET: krakutsandasya Ed. Cf. de JONG.

/ śo bhā ba tyām pu rā śo bhā khyah pṛ thi bī pa tiḥ / kra kucchanda sya śā ri rastū paṃ śāstu
ra kā {D175b} ra yata /

昔ショーバーヴァティという都で、ショーバという名の王が、[人天の] 師・クラ
クチャンダ仏の遺骨（舍利）の塔を作らせた。

/ grong khyer mdzes ldan dag tu sngon // sa yi bdag po bskal bzang gis /

/ ston pa log par dang sel gyi // sku yi mchod rten rab tu byas /

28c gyi] ḍ : gyis β.

Note 28b bskal bzang gis] 梵文の śobhākhyah とその訳語 bskal bzang gis が合致しないが、蔵訳者
は梵文を *saubhāgyah と読んだ可能性が高い。[Sugg. HAHN]

tatpūrṇapūṇyapraṇidhānayogāt

prāptaḥ sa rājā tridaśeśvaratvam /

dharmānubaddhāṃ bhagavān vibhūtim

uktveti vāṇīm anayat praśāntim // 78.29 //

29cd vibhūtim uktveti] A: vibhūtibhuktveti B: vibhūtibhukteti E.

/ tatpū rṇa pu nya pra ṇi dhā na yo gā prāptaḥ sa rā jā ti di be śva ra tvam / dharmma nu bad-
dham bha ga banbi bhū ti mu ktve ti bā ṇi ma na yatpra śāntim /

彼の満ちた福德と誓願の力によって、かの王は神々の王たるを得た。——と、このよ
うに世尊は、繁栄が法 [の行い] と結びついていることを語られて、お話を終えられ
た。

/ de yi bsod nams smon lam rdzogs ldan pas // rgyal po des ni lha yi dbang nyid
thob /

/ 'byor pa chos kyis bcings zhes gsungs nas ni // bcom ldan gsung ni rab tu zhi
bar gyur /

29b po des] ḍ : pos de β. 29c 'byor pa] β : 'byor pa'i D: 'byor pas T || chos kyis] D:
chos kyi] β T.

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyāṃ śakracya-
vanāvadānam aṣṭasaptatitamahā pallavaḥ //

/ i ti kṣe mendra bi ra ci tā yām bo dhi satvā ba dā na kalpa la tā yām śakre cyā ba nā ba dā na
maṣṭa sapta ti ta mahā palla vaḥ //

以上、クシェーメンドラ作『菩薩のアヴァダーナの祈願成就の蔓草』における「[神々の王] シャクラの死没のアヴァダーナ」という第78の小枝(章)。

/ zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri shing las brgya byin ltung ba'i rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste bdun cu rtsa brgyad pa'o //

(Colophon:) zhes pa] D: ces pa β T || ltung] β T: lhung D (also possible).

第78章の非重要な異読の報告

1. チベット訳の諸版の正字法上の異読

以下、]の記号より前にある語形が、校訂テキストの語形であり、その記号の後ろにある語が、或る版の正字法上の異読を示す。

14d yongs su] yongsu G. **25b** skyabs su] skyabsu G.

2. チベット訳の諸版の特殊な異読 (Sonderlesungen)

以下、]の記号より前にある語形が、校訂テキストの語形(正しい語形)であり、その記号の後ろにある語が、或る一つの版の特殊な異読を示す。例えば、**1d** mtho] mthong G. という記述は **1d** mtho] DNQT: mthong G と表現するのと全く同じであり、それは STRAUBE (2006), S. 245 の記述の仕方なら mthong st. mtho G と表現される。

1d mtho] mthong G. **8b** btsal nas] bcal nas D. **9a** 'dzam] mdzam Q. **14d** bsams] bsam G. **16d** za'i] ze'i Q. **19a** lha yi] kha G. **19b** za'i] ze'i Q. **22c** ston] bston G.

3. 梵文写本における特殊な異読 (Sonderlesungen)

以下、]の記号より前にある語形が、私の校訂テキストにある語形(正しい語形)であり、その記号の後ろにある語形が特殊な異読を示す。これは写本の中に沢山ある無意味な書き誤り等の異読をすべて本文の異読注として挙げると、真に重要な異読がそれらの無視してよい異読の中に埋もれてしまい、見えづらくなってしまうので、そうならないようにする配慮として、本文の異読注とは別に記するものである。本文の異読注には重要な異読のみを挙げた。

2a sabhāsīnaḥ] samāsīnaḥ E. **3b** mālikā] bhālikā E. **5c** īrṣyāruṣṭeva] irṣyāruṣṭeva B. **6a** śucaḥ] śuciḥ E. **7a** alaṅghyaṃ] alaṅghya B. **7c** patyur] patyu B. **7d** kleśa] klaśa E. **10b** śrūyante] śrūyanta B || kila] kilāḥ B : kiluḥ E. **11c** papraccha] prapraccha E. **12b** prabhāvā°] pramāvā° E. **14a** sugataṃ] sugatāṃ B. **14b** paramāṃṛtaṃ] paramāṃṛtaṃ B. **18d** avamānasya] avabhānasya E. **19c** vaidūrya] vaidurya B. **20c** vibodhya] viyodhya E || jinam] jina A. **22a** ānataḥ] °ānataḥ E. **22b** mārjanam] bhājanam E. **24a** paricyutaḥ] pariścyutaḥ

A. 27c bhagavān] manavān E. 28a śobhāvatyāṃ] somāvatyāṃ E. 28b śobhākhyāḥ] śobhāsyāḥ E. 29b tridaśe] vidaśe B. 29d praśāntim] praśānti B.

第2節 第79章 Mahendrasenāvadāna 「マヘンドラセーナ王アヴァダーナ」

Mahendrasena とは聞き慣れない王の名前であるが、ここで過去話として語られる施しを好む王 — 漢訳經典で一切施王、薩婆達多王、薩和達王、薩縛達多王もしくは波耶王と名が伝えられる — の説話は、北伝仏教の圏内では人気があり、代表的な漢訳の説話集に出る本生話である⁽⁵⁾。並行話としては次のものがある。

- (1) 大正 No. 152 六度集經、(11)波耶王經、T3 6a-c.
- (2) 大正 No. 153 菩薩本緣經、一切施品第二 T3 55a-57c.
- (3) 大正 No. 201 大莊嚴論經卷十五、(70)、T4 339b-340a.
- (4) 大正 No. 207 雜譬喻經道略集、(34)、T4 530a-c.
- (5) 大正 No. 1509 大智度論卷十二、T25 146b6-11 (薩婆達王) ; 卷三十三、T25 304c28-29 (薩婆達多王)
- (6) 大正 No. 2121、經律異相卷二十六、薩和達王布施讓國後還為王三 T53 141b-142b.
- (7) 大正 No. 2087 大唐西域記卷三、T51 883a1-6.

以上の並行資料が語るのは布施好きの王が登場する過去話だけである。Kalpalatā の本説話に現在話として有る、浮気な若妻に悩まされる老いた婆羅門の話は、以上の並行資料には付いていない。菩薩自身の過去世の話 (jātaka) には基本的に現在話は必要ないが、本来ジャータカであった話がアヴァダーナ化される中で、このような現在話の付加が形式上必要になったのであろう。この現在話がどこから来たのかは、不明であるが、Jātaka 402 に浮気妻が老婆羅門を旅に出すモチーフがある。また賢愚經卷十一 (53) T4 427c-429 には、妻や七人の娘たちに悩まされ家庭に絶望した婆羅門が、釈尊の導きで出家し、たちまち阿羅漢に成った現在話があるが、その現在話に多少似ている。

布施好きの王が登場する過去話について、Kalpalatā の本説話と、上記の漢訳の並行話を比べてみると、戦争をしない王を見限った大臣たちの裏切りや、絶望した婆羅門が縄で首をくくって死のうとしたという記述は、Kalpalatā の本説話だけにしか見られない

(5) 大乘經典 Rāṣṭrapālapariṣcchā ではこの該当話の王の名は Arthasiddhi である。Louis FINOT (1902): *Rāṣṭrapālapariṣcchā*, Bibliotheca Buddhica II, St. Petersburg, p. 25. 和訳: 長尾雅人・桜部建 (1974): 『大乘仏典 9 宝積部經典』、中央公論社、166頁。

特殊な記述であることがわかる。上記の漢訳の並行話を比べて見ると、六度集経のように王が自殺する不幸な結末を有する変わった系統のものもあるが、大部分の伝承（上記の(2)~(7)の文献）は王が死なないで幸福な結末を迎える系統に属しており、Kalpalatāの本説話も後者に属している。

以下に梵文と蔵訳の校定テキストを挙げる。蔵訳テキストでネパール伝承の梵文と相違する、注意すべき箇所は太字にした。

79 Mahendrasenāvadāna

D: Khe 175b3-181a2 Q: Ge 289a4-292a1 N: Ge 258b63-261a7

G: Ge 364b5-368b3 T: 486a3-490b4

Skt. Mss.: A *313a3-*316b2; B 93a10-95b9 ; E 79a1-82a2

strībhir vimohitamater matirākṣasībhir

vittapravṛttamanasaḥ sukhavāñchayaiva /

kleśāḥ patanti paruṣāḥ puruṣasya dehe

gacchanti nāma na vinā praśamaṃ śamaṃ ye // 79.1 //

1a matirākṣasībhir] T (ma ti rākṣa sī bhir), confirmed by Tib. blo yi srin mo nmams kyis (= Skt. *mati-rākṣasībhir): grharākṣasībhir ABE (= Ed.). **1b** vāñchayaiva] T, confirmed by Tib. 'dod pa nyid kyis: vāñchayeva A: vāñcha eva B: vāñchayeva E. **1c** paruṣāḥ E (= Ed.): paruṣā AB: sahasā T, confirmed by Tib. 'phral la (= Skt. *sahasā). Cf. de JONG.

/ {D175b3, T486a3} strī bhirbi mo hi ta ma termma ti rākṣa sī bhirbatta pra bṛtta ma na saḥ su kha bāñca yai ba / kle śaḥ pa tanta sa ha sā pu ru ṣa sya te te gacchanti nā ma pa bi nā pra śa maṃ śa maṃ ye /

心中の羅刹である女たちによって惑乱された思考をもち、快樂を望むが故に蓄財に没頭した心をもつ男たちには、肉体に激しい諸煩惱が起こる。[それらを]鎮めることなしに、それら[煩惱]は(ye)実に消滅に至ることはない。

Note **1a** mater matirākṣasībhir] チベットの梵蔵併記版の蔵字の梵文転写は ma termma ti rākṣa sī (<*mater mati-rākṣāsī) と伝承されており、その読みは蔵訳 (blo yi srin mo nmams kyis blo gros) から確認できるので、チベットにはネパール伝承の梵文 mater grha-rākṣasībhir とは異なる、mater mati-rākṣasībhir と読む伝承があったことが知られる。mater mati- の読みの方が、故意に mat- の音の回復を意図した言葉遊びであると理解されるから、より良い読みである。「心の羅刹」→「家庭の羅刹」と意味を変えて、mati- の代わりに grha- と読む伝承は、この alliteration を理解しない写経

生により、別の安易な読み差し替えられて生じたと思われる。同様の現象は次の pāda c の paruṣāḥ でも起こる。

Note 1c paruṣāḥ] ネパール伝承の paruṣāḥ 「激しい」の代わりに sahasā 「たちまち」と読む伝承がチベットにあったことが、梵蔵併記版の蔵字の梵文転写 (sa ha sā) ならびに蔵訳 'phral la から知られる。問題はどちらの読みが良いかであるが、de JONG はチベット伝承の sahasā の方が、より良い読みであると見なす (p. 171)。しかし M. HAHN の意見は逆であり、ネパール伝承の読みの方が alliteration として p- の頭音の連続を意図した遊びとして、より良い読みとみなしうる。

/ bud med **blo yi** srin mo rnams kyis blo gros rmongs byas shing // bde ba 'dod pa nyid kyis yid ni nor la zhugs gyur pa /

/ skyes bu gang zhig rab zhi dang bral zhi bar mi bgrod pa // **de de** nges par 'phral la nyon mongs dag tu ltung bar 'gyur /

1a rnams kyis] δ : rnams kyi β .

Note 1d de de] 蔵訳者は梵文の dehe 「肉体に」の箇所を *te *te 「彼ら彼ら」と読んだので de de と訳したらしい。そのことはチベット梵蔵併記版の蔵字梵文が dehe ではなく、te te と伝わっていることから推測できる。蔵訳の pāda d を和訳すると「彼らは確かにたちまち煩惱に落ちる」となり、煩惱 (kleṣa) を、落ちるという動詞の目的語として理解したようだ。

śrāvastyāṃ brāhmaṇaḥ pūrvam jīvaśarmābhidho 'bhavat /
vayasa *'rdhe śrūtādhyāyī brahmacaryaṃ cacāra yaḥ // 79.2 //

2c *'rdhe] ex conī: rdhi A: rdha B (= Ed.): rdham E. 2d yaḥ] ABET, confirmed by Tib. gang gis na: saḥ Ed.

/ śrā bastyāṃ brāhma ṇaḥ pūrbba jī ba śarmmā bhi dho bata / ba ya sorddha śru tā dhyā yī brahma caryaṃ cā ra yaḥ /

昔、舎衛城にジーヴァシャルマンという婆羅門がいた。若い時に彼は聖なる学問を学んで、純潔な生活を行った。

/ gang gis na tshod phyed dag ni // thos pa brjod cing tshangs spyod spyad /
/ bram ze 'tsho ba bde zhes pa // mnyan yod du ni sngon byung gyur /

2a gis] δ : zhig β // phyed] G: byed δ NQ.

sa jarāśabalaśmaśruḥ snehād bandhubhir arthitaḥ /
dharmamārgānurodhena vidadhe dārasaṃgraham // 79.3 //

3c °nurodhena] AT (= Ed.): °nurādhena BE.

/ sa ja rā śa ba laśca śruḥ sne hādhanbhu bhi ra nvi taḥ / dharmma mārga {T486b} nu ro dhe na {D176a} bi da dhe dā ra saṃ gra haṃ /

彼は年老いて、髭がごま塩になった時、愛情の思いから [心配した] 親族たちに請われて、法の道を遵守するため、妻を娶った。

/ mdza' bas gnyen gyis gsol btab pa'i // rgan po sma ra khra bo de /

/ chos kyi lam gyi ngo dag tu // bud med rab tu bzung bar byas /

Note 3b rgan po] 蔵訳の諸版はどれも rgan po 「老いた者」の読みを伝えるが、梵文 jarā- に合わせて、*rgas pas (あるいは *rgas kas) 「老いによって」と訂正すべきか。[Sugg. HAHN]

patnī taralikā nāma taruṇī taralekṣaṇā /

navasaṃbhogalubdhasya tasyātidayitābhavat // 79.4 //

4c navasaṃbhoga] AET, confirmed by Tib. longs spyod gsar pa la (= Skt. *navasaṃbhoga): navasaṃmīga B: naiva saṃbhoga Ed. Cf. de JONG.

/ patnī ta ra li kā nā ma ta ru ṇī ta ra lakṣe ṇā / na ba saṃ bho ga lubdha sya ta syā ti da yi tā bha bata /

妻は、落ち着かぬ (多情な) 眼差しをもったタラリカーという若い女であったが、新たな享楽を欲した彼にとって、とてもいとしい女となった。

/ longs spyod gsar pa la chags de'i // chung ma g.yo ldan ma zhes pa /

/ dar la bab cing mig g.yo ma // shin tu yid 'ong nyid du gyur /

tasyā jvaropame tasminn aruciḥ sutarām abhūt /

abhaktaraktāḥ saṃsaktaviraktā eva yoṣitaḥ // 79.5 //

5a jvaropame tasminn] AB: jvaropame yasminn E: jvaro 'yam etasminn Ed. Cf. de JONG.

/ ta syā jva ro pa me tasminna ru ciḥ su ta rā ma bhūta / a bhakta rakta saṃ sakta bi raktā e ba yo ṣi taḥ /

彼女はまるで熱病のように彼をひどく毛嫌いした。女たちというものは、つれない男に愛着し、[自分に] 夢中な男には無関心なものだ。

/ de ni de la *rims bzhin du // shin tu sred pa min par gyur /

/ bud med mi gus la chags shing // yang dag chags la chags bral nyid /

5a *rims] ex conī: rim β δ. 5b sred pa] δ : sred par β. 5d nyid] δ : zhing β.

sācintayad anarho 'yaṃ jarāsāraśiroruhāḥ /

mama yauvanadarpe 'sminn apuṇyopanataḥ patih // 79.6 //

6b śāra] T: sāra ABE (= Ed.).

/ sā cinta ya da raryo yaṃ ja rā śā ra śi ro ru haḥ / ma ma yo ba na darppe sminna pu ṇyo pa naḥ pa tiḥ /

彼女は考えた。「老いのためにごま塩の頭髪をもつ、[自分に] 相応しくないこの夫は、私の若さの誇りに、禍として来たものだ。」

/ des bsams kun tu mi 'phrogs pa'i // rga bas skra dkar ldan pa'i khyo /

/ bdag gi lang tsho'i dregs 'di la // bsod nams min pas nye bar gnas /

6a des] *ḍ*: de *β*.

Note 6a kun tu mi 'phrogs pa'i] 蔵訳の mi 'phrogs pa'i は *a-hārya と還梵されるが、kun tu (= Skt. ā-) がその前についているから *an-āhārya と還梵できる。蔵訳者は梵文の anarhoyam を *anāhārya と誤読したために kun tu mi 'phrogs pa'i と訳したと思われる。なぜなら ho のネワーリー文字は、o の母音を表記するために基字 ha の前と後に棒を付けるが、前の棒を誤読すると先行する ana を anā と読むことになり、しかも上付きの r はしばしば見落とされるので、anarho を anāhā と誤読したのであろう。また後続の yam においてアヌスヴァーラ ṃ を r と間違えると、yam は rya と読むことになり、その結果 *anāhārya となる。蔵訳者は「奪い去ることが出来ない老年 (*anāhārya-jarā) によって白髪を有する夫」と解釈したのであろう。

vṛddhasya taruṇībhogaḥ śarīrakṣayasūcakaḥ /

keśagraheṇa jarayā vātsalyeneva vāryate // 79.7 //

7d vāryate] AT (= Ed.): dāryate BE.

/ (vṛddha D: bṛddha T) sya ta ru ṇī bho gaḥ śa rī rakṣa ya sū ca kaḥ / ke śa gra he ṇa ja ra yā
bātsa lye ne ba bārya te /

老人による若い女の享受は、身体の衰えを教えてくれる。あたかも老いが、親切心によって髪を毛をつかんで [引き止めるかの] ように、享受は阻止される。

/ rgan pos gzhon nu ma spyod pa // lus ni nyams pa go byed dag /

/ rga bas skra nas bzung byas te // mnyes gshin gyis ni zlog pa bzhin /

7a pos] *ḍ*: po *β*. 7d mnyes] D: mnyen *β* T.

kiṃcit samkocakuṭīlaḥ prayāti sthaviraḥ śanaiḥ /

hāritaṃ yauvanamaṇiṃ vīkṣamāṇa ivāvanau // 79.8 //

/ kiṃ citsaṃ ko ca ku ṭī laḥ pra yā tistha bi ra śa naiḥ / hā ri taṃ yau ba na ma ṇiṃ bīkṣya mā
ṇa i bā ba nau /

少し縮んで腰が曲がった老人は、ゆっくり進む。まるで大地の上で、奪われた若さという宝を探しつづける人のように。

/ rgan po dal gyis cung zad ni // 'khums shing sgu bor rab gyur pa /

/ sa la lang tsho'i nor bu ni // stor ba 'tshol bar byed pa bzhin /

8a gyis] *ḍ*: gyi *β*. 8b sgu] *ḍ*: dgu *β*. 8d 'tshol] *ḍ*: tshol *β*.

Note 8b sgu bor rab gyur pa] ここで蔵訳者は kuṭiḷaḥ prayāti をあたかも *kuṭilatām prayāti と読んだかのように訳している。

vṛddhena paralokārtham ānītā *yad adhīmatā
parabhogaṇayinī tat tad eva karomy aham // 79.9 //

9ab *lokārtham ānītā yad adhīmatā] ex conī (de JONG): lokārtham[mā]nītā yad adhīmatā A: lokārthammanīto yadi dhīmatā B: lokārthamśānīto yadi dhīmatā E: lo kārtha jña yā nī tā da dhī ma tā T: lokārtham ānītā yadi dhīmatā Ed. Cf. de JONG.

/ bṛddhe na pa ra lo kārtha jña yā nī tā da dhī ma tā / pa ra bho ga pra ṇa yi ṇī tatta de ba ka ro mya haṃ /

愚かな老人によって私は他の人々 (paraloka) を益するように導かれるから (yad)、それゆえ他の男との享楽 (parabhoga) を愛する私は、まさにそのこと (同じこと) をします。

Note 9b ānītā yad adhīmatā] 最も信頼できる A 写本に従って読むと、de JONG が提案する ānītā yad adhīmatā という読みになるが、その yad の語の読みが正しいことの確信は蔵訳から得られない。この箇所ではネパールの A 写本の伝承とチベットの梵蔵併記版の伝承が少し異なるため、私はネパールの伝承としては pāda ab を vṛddhena paralokārtham ānītā yad adhīmatā と読む一方、チベットの別伝承としては vṛddhena paralokārtha-*jñenānītā *hy adhīmatā と読んで、ある程度互いに独立した伝承として扱うのがよいと考える。どちらも誤りであるとはいえない。しかしこの二つの伝承をうまく一つに統合する道はないであろうか。梵蔵併記版の読み ā nī tā da dhī ma tā における da の字を私は *hya の字の間違いと見なし、ānītā *hy adhīmatā と読んだが、ネパールの伝承のように ānītā の前に *jñen- の音が無いのなら、韻律上一音が足りなくなり、どこかで一音を補う必要が出てくる。そこで M. HAHN 博士は梵蔵併記版の読み ā nī tā da dhī ma tā の da の文字を *ha の字の間違いと見なした上でさらに後ろに ma の一音を補った *ānītāham adhīmatā と読むことを提案する (「愚かな [老人] によって導かれた私は (aham) 」という意味)。この統合案によれば、pāda ab は vṛddhena paralokārtham *ānītāham adhīmatā となる。

Note 9c parabhoga-] 老いた夫が勧める「他の人々への益」 paralokārtha として、妻が「他の男との享楽」 parabhoga を実践しているという、皮肉な機知をきかせた言葉遊びである。ただし蔵訳者は paraloka を 'jig rten pha rol と訳しており、「他の人々」の意味よりも「あの世」の意味に理解したらしい。老いた夫が他界への利益に若い妻を導こうとするが、この世で他の男たちと享楽することを好む妻は、別の意味で「同じ事」 de nyid (つまり他への利益) をする、という理解の仕方を蔵訳者はしたのであろう。

/ rgan po blo ldan ma yin pa // 'jig rten pha rol don shes pas /

/ gzhan gyi longs spyod la sbyar gang // de nyid bdag gis rab tu bya /

Note 9b [jig rten pha rol don shes pas] 蔵訳を直訳すれば「あちら側の世界 (paraloka) の利益を知る者により」となり、蔵訳の shes pas 「知る者により」の語がネパール伝承の梵文と合わないが、チベット梵蔵併記版の蔵字に転写された梵文はこの箇所を pa ra lo kārtha jñā yā nī tā と伝える。この jñā ya nī tā と音写された語を蔵訳者は shes pas と訳す。もし jñā ya を *jñenā- 「知る者によって」と修正して読めば、蔵訳者が基づいた梵文は paralokārtha-*jñenānītā となる。また梵蔵併記版の後続する da dhī ma tā の字を *hy adhīmatā と読むことができる (da の字に近いのは *hya の字)。以上の読みの推測をまとめると vṛddhena paralokārtha-*jñenānītā *hy adhīmatā 「他の人々の利益を知る愚かな老人によって導かれるから」という句になるが、このチベットの梵文伝承はネパール伝承の梵文と異なるものの、悪くない。

Note 9cd gang // de nyid] ここで蔵訳者が tat tad eva をあたかも *yat tad eva のように訳していることは注意される。

antargr̥hagate tv asminn aśakyam caurakāmibhiḥ /
premanirdayasambhoganirargalasukhaṃ mayā // 79.10 //

/ {D176b} anta (rgra D: gr̥ T) ha ma te tvasminna śakyam corya kā mi bhiḥ / pre ma nirda ya
saṃ bho ga ni rarga la su khamma yā /

この [夫] が房室にいると、私はひそかに忍び込む愛人たちとの、愛の容赦のない享楽による、はめを外した快楽 [に耽ること] が出来ない。

/'di ni khyim nang gnas pa'i tshe // rkun po'i 'dod ldan dang mdza' bas /
/ brtse med longs spyod ma bsdams pa // bde ba bdag gis spyod mi nus /
10a nang] β : na δ . 10c brtse] δ : rtse β .

iti saṃcintya sābhyetya śanaiḥ patim abhāṣata /
lajjamāneva vinayād ābhijātyānukāriṇī // 79.11 //

11a sābhyetya] A: sāmyetya B: sāmye | tyā E.

/ i ti saṃ (cintyā D: cintya T) pa bhe tyā śa naiḥ pa ti mā bhā {T487a} ṣata / lajja mā ne ba bi
na yā dā bhi jā tyā nu kā ri ṇām /

このように女は考えて、高貴な家柄を装って、羞じらうが如くに、礼儀正しく近づいて、おもむろに語った。

/ zhes bsams rigs bzang rjes mthun zhing // ngo tsha ldan pa bzhin du des /
/ dul ba yis ni mngon phyogs te // dal gyis bdag po la smras pa /

gr̥hasaktena bhavatā nirvyāpārasukhaiṣiṇā /
hastenākṛṣya dāridryam ānītaṃ bata duḥsaham // 79.12 //

/ gr̥ ha pa kte na bha ba tā nirbā pā ra (su D: sū T) khai ṣi nā / taste nā kr̥ ṣya dā ri drā mā nī
taṃ ta ba duḥsa haṃ /

のらくらと仕事をしないで安楽を求め、家に愛着しているあなたは、耐え難い貧乏
を手ずから引き寄せて、招いているのです。

/ bya med bde ba 'tshol byed pa // khyod ni khyim du chags pa yis /

/ bzod par dka' ba'i dbul po nyid // **khyod kyi** lag pas drangs nas blangs /

12a 'tshol] ḍ : tshol β . 12b khyod] ḍ : khyed β . 12c par dka'] T: par dga' D: pa dka'
β (also possible). 12d kyi] ḍ : kyis β .

Note 12d khyod kyi] 梵文になく藏訳者が補った語。

udyogadveṣiṇas tīvram ālasyaṃ yasya vallabham /

bahuvyayapravāhārhaṃ vivāhaṃ sa karoti kim // 79.13 //

/ saṃ bho ga dve ṣi (nastī D: ṇastī T) bra mā la syaṃ ya sya ba lu bhaṃ / ba hu bya ya pra bā
hārha bi bā haṃ pa ka ro ti kiṃ /

努力が嫌いで、とても怠惰を愛好するなら、多大な出費の連続が求められる結婚
[生活] をどうするのでしょうか。

/ gang zhig rtsom pa la sdang zhing // drag po'i snyom las dag la dga' /

/ rab mang 'god pa'i rgyud ldan pa'i // khyim na gnas pa des ci byed /

13b snyom] ḍ : snyoms β (also possible).

Note 13c 'god pa'i] この 'god pa の語は通常「安置、設置、納入」の意味であるが、ここでは「出
費」(vyaya) の意味に用いられる。(Kalpalatā 50.39a の箇所でも、梵語の nirvyayaḥ を訳した
'god bral (出費が無い) という表現が出て来るが、'gong ではなく、ここと同様に 'god と読むべ
きである。) この 'god pa の「出費」の意味は、発音が同じ語 god pa 「消耗、損失」との繋がりで
考えられるので、'gong ba の綴りにする必要はない。

yatrālasyaḍ gr̥hapatir gr̥hakoṇaṃ na muñcati /

dhanārjanāya niryāntu mugdhās tatra kim aṅganāḥ // 79.14 //

14a yatrā°] ABET, confirmed by Tib. gang du (= Skt. *yatra): yasyā° Ed. Cf. de
JONG. 14b gr̥hakoṇaṃ] AT: gr̥hakoṣaṃ BE.

/ ya tra la syādgr̥ ha pa tirgr̥ ha ko ṇaṃ na muñca ti / dharmma jā nā ya niryāntu (mubdhā D:
mugdhā T) sta tra ki maṃ ga nāḥ /

怠惰さによって、家長が家の隅 [に居ること] を捨てないなら、その [家] で
は [世の中に] 未経験な女たちがどうして財を得るために外出しないでしょうか。

/ gang du khyim bdag snyom las las // khyim gyi zur ni mi gtong ba /

/ der ni bud med rmongs pa rnams // nor sgrub slad du 'byung ngam ci /

14a snyom] δ : snyoms β . 14b mi] β : mig δ .

sotsāhaḥ puruṣo yatra vyavahāraratir bahiḥ /
gṛhavyāpārasaktā strī sarvās tatrārthasampadaḥ // 79.15 //

15d tatrārthasampadaḥ] T (ta trārtha saṃ pa daḥ), confirmed by Tib. de na don kun phun sum tshogs: tatra sampadaḥ A: tatra ca sampadaḥ BE: tatra susampadaḥ Ed.

/ (sotsā D: sotpā T) haḥ pu ru ṣo ya tra bya ba hā ra ra tirtha hiḥ / gṛ ha byā gā ra baktāstrī sarbbasta trārtha saṃ pa daḥ /

男が熱心に [家の] 外で労働を楽しみ、女が家の仕事を好む時に、そこに富の達成のすべてがあります。

/ gang na skyes pa spro ldan pas // phyi yi tha snyad la dga' zhing /
/ bud med khyim gyi bya bar chags // de na don kun phun sum tshogs /

15a gang na] δ : gang la β . 15d de na] β : de ni δ .

abhūṣaṇam anambaram malinakoṇalīnāṅganam
viśīrṇaśayanāsanam sphuṭitavāridhānīghaṭam /
adāsam anupaskaram ciranivṛttamanthasvanam
gṛham viratakarmaṇām bhavati bhagnabhogotsavam // 79.16 //

16a malinakoṇa] T: malinakauṇa ABE. 16d bhagna] AT: magna B: māna E.

/ a bhū ṣa ṇa ma namba ra ma li na ko ṇa lī nām ga ṇam bi {D177a} śīrṇa śa ya nā sa na spu ṭi ta bā ri dhā nī gha ṭam / a dā sa ma nu pa ska raṃ ci ra ni bṛtta mantha sva ṇam gṛ haṃ bi ra ta karmma ṇam bha ba ti bhagna bho gotsa baṃ /

働きが無い [男] たちの家は、装飾品も服もない女たちがこきたない隅っこに寝ていて、座臥具も破れ、水器・瓶も割れており、召使いも日用の道具もなく、久しく [乳を] 攪拌する音も絶え、享樂も喜び事も途絶えています。

Metre: Pṛthvī.

/ las dang bral ba rnam kyī khyim ni dga' ston longs spyod nyams gyur cing //
rgyan med gos med bud med dag ni zur phug dri ma can na zhen /
/ khri dang mal stan rnam par nyams shing chu snod chag pa'i sgra dang ldan //
'bangs med yo byad med cing yun ring zho srub sgra ni rdzogs par 'gyur /

16c chag] δ : chags β . 16d ring] δ : rings β .

Note 16c chu snod chag pa'i sgra dang ldan] 藏訳者は梵文 sphuṭita-vāridhānī-ghaṭam を chu snod chag pa'i sgra dang ldan 「割れた水器の音を有する」と訳している。ghaṭam (瓶) を *ghoṣam (音) と誤読して、Bahuvrīhi として「音を有する」(sgra dang ldan) と訳したのだろうか。それとも sphuṭita の一語を「割れた音を発する」という意味に取って少し意識したのだろうか。

ity uktaḥ sa tayā vipraḥ pratasthe draṇonmukhaḥ /
patanti viṣayaśvabhre hy api yoṣidvaśīkṛtāḥ // 79.17 //

17c śvabhre] AT: svabhre BE.

/ i tyuktaḥ sa ta sā bi praḥ pra te sthe dra bi ṇonmu kha / pa tanti bi ṣa {T487b} ya śva bhre
śva pi yo ṣidba śī kṛ tāḥ /

このようにその女に言われると、かの婆羅門は財を望んで、[旅に] 出発した。実に女に支配された者たちは、感覚の領域の [破滅の] 淵に落ちるものだ。

Note 17d hy api] この api の語は不審である。*ati-?

/ de yis de brjod bram ze de // nor la mngon du phyogs te song /
/ bud med kyis ni dbang byas rnams // yul gyi g.yang sa dag tu ltung /
17b mngon du] ḍ : mngon par β (also possible). 17d ltung] β : lhung ḍ .

sa sāgarāntāṃ vasudhāṃ bhrāntvā labdhapratigrahaḥ /
kālena svapurīṃ prāpa saṃpūrṇakanakāmbaraḥ // 79.18 //

18c prāpa] A: prāpya BE.

/ sa sā ga rāntaṃ ba su dhāṃ bhrāṃ tvāṃ la bha pra ti gra haḥ / kā le na sva pu rāṃ prā ya
saṃ pūrṇa ka na kamba raḥ /

彼は海を辺際とする大地を放浪しながら喜捨を得て、やがて黄金と衣服を十分持って、故郷の都城に戻ってきた。

/ de yis nor 'dzin rgya mtsho'i mthar // 'khyams nas sbyin pa thob gyur te /
/ gser dang gos ni rdzogs gyur pas // dus kyis rang gi grong khyer song /

18a de yis] ḍ : de yi β || rgya] ḍ : rgyal β . 18c pas] β : pa ḍ . 18d dus kyis] D: dus
kyi β T.

gṛhotkaṅṭhotkarākrāntaḥ purīparyantakānane /
śarīramātraśeṣo 'bhūd dasyubhir muṣito 'tha saḥ // 79.19 //

/ gṛ hotkaṅkotka rā krā ntaḥ pu ri paryanta kā na (na D: ne T) / śa rī ra mā tre śe ṣo bhūddā syu
bhirmu ṣi tau tha saḥ /

山ほど積もった家への憧憬に襲われる彼は、都城をとりまく林の中で、盗賊たちに強奪され、身ひとつを残すのみとなった。

/ de nas khyim 'dod tshogs kyis de // song ba grong mtha'i nags tshal du /
/ chom rkun pa yis bcom gyur nas // lus tsam lhag ma nyid du gyur /

anarthopārjito *hy arthaḥ sāmartyena sukhārthinā /

karoty anicchayā dhātur maruvārikaṅyitam // 79.20 //

20a *hy] ex coni (Hahn): py ABE: 'py Ed. **20b** sāmartyena] B (= Ed.): sāmartyena AET.

/ a nartho pārjī to syarthaḥ sā marthe na su kha rthi nā / ka ro tya niccha yā dhā turmma ru bā
ri ka ṇā dhi taṃ /

幸福を求める人が、手腕によって (sāmartyena) 無意味に獲得した財は、創造神の意にそぐわないため、砂漠における水のしずくのようなものとなる。

Note **20a** anarthopārjito] 蓄財のための托鉢という、無意味な事 (宗教的見地からすれば無価値な営み) によって得たる、という意味か。

/ bde ba don gnyer nus pa yis // don med nor ni nyer bsgrubs kyang /
/ mya ngam chu yi thigs pa bzhin // byed po bzhed pa min pas byed /

so 'cintayad aho yatnād api vittam mayārjitam /

abhāgyayogād yātaṃ me svapnadarśanatulyatām // 79.21 //

/ so cinta ya da ho yatnā da pi bittam ma yārjī taṃ / {D177b} a bhā gya yo gā ya taṃ me
svapna darśa na tu lya taṃ /

彼は思った。 — 「ああ、苦勞して私が得た財は、運が具わっていなかったため、私にとって、夢を見ていたのと同じになった。」

/ des bsams kye ma 'bad pa yis // bdag gis nor ni bsgrubs gyur kyang /
/ bdag ni skal dang mi ldan pas // rmi lam mthong dang mtshungs par gyur /
21b bdag gis] D: bdag gi β T.

śūnyapāṇir dhanārthinyāḥ patnyāḥ prāpyāham antikam /

na jīvāmy avamānograviṣaiḥ parūṣabhāṣitaiḥ // 79.22 //

22a śūnya] AT: śunya BE. **22c** avamāno°] A: avasāno° BET.

/ śū nya pā ṇi dha nārthi nyaḥ patnīḥ prā pyā ha manti kaṃ / naṃ jī bā sba ba sā no gra bi ṣaiḥ
pa ru ṣa bhā ṣi taiḥ /

「私が空手のまま、財を要求する妻のもとに行っても、[妻の] 侮蔑という恐ろしい毒を伴った罵りの下で、私は生きることが出来ない。」

/ nor ni don gnyer chung ma yi // gan du lag stong bdag phyin na /
/ smad pa drag po'i dug ldan pa'i // tshig rtsub brjod pas bdag mi 'tsho /

tasmād ihaiva me sadyaḥ pāśenodbandhanam hitam /

dāridryopadravakrūre strīśastram na sahe grhe // 79.23 //

23b pāśenod°] AT: pāśevod° BE. 23c dāridryo°] corr. (Ed.): dāridro° ABET || krūre] T: krūra ABE: krūraṃ Ed. 23d gṛhe] BE, confirmed by Tib. khyim du: gṛhaṃ AT (= Ed.). Cf. de JONG.

/ tasmā di hai ba me sa dyaḥ pā śe nodbandha naṃ hi taṃ / dā ri dro pa dra ba krū re strī śas-
traṃ na sa he gṛ haṃ /

「それゆえこの場ですぐさま私は縄で首をくくってしまうのがよい。貧乏という災いの中で情け容赦のない家庭で、女という刀に私は堪えられない。」

Note 23cd] 別の読み方として、写本 A と梵蔵併記版 T の gṛhaṃ の読みを尊重して、dāridryopadrava-krūra-strīśastraṃ na sahe gṛhaṃ 「貧乏という災いの中で情け容赦のない女という刀を有する家庭に、私は堪えられない」と読む可能性がある。家庭にか、それとも女に堪えられないのかで、読みの伝承に違いが生じた。

/ de slad bdag ni 'di nyid du // 'phral la zhags pas bcings pa phan /
/ dbul ba'i nyer 'tshe drag po *yi // khyim du bud med mtshon mi bzod /

23c drag po *yi] ex conī: drag po yis β δ .

Note 23c drag po *yi] 諸版の読み drag po yis を drag po *yi と修正して、その「残酷な」という修飾語を後ろの khyim du 「家に」にかかる関係にした。修正せずに drag po yis のままでも「貧乏という酷い災いによって」という意味の文に取ることが出来るが、梵語の構文との合致を優先した。

iti saṃcintya sa latāpāśaṃ kaṅṭhe nyaveśayat /
tīvrakleśaviṣaṅṅānāṃ nidhanaṃ bandhusaṃgamaḥ // 79.24 //

24c viṣaṅṅānāṃ] ABET: viṣāṅānāṃ Ed.

/ i ti saṃ cintya sa la tā pā śa kaṅṭhe nya be śa yata / tī bra kle śa bi ṣaṅṅā nāṃ ni dha naṃ
bandhu saṃ ga maḥ /

このように考えて、彼は頸に蔓草の縄を巻きつけた。激しい苦悩に落胆した者たちにとって、死は親愛なる者との邂逅である。

/ ces bsams de yis 'khri shing gi // zhags pa dag ni mgrin par bkod /
/ nyon mongs drag pos nyen rnam *kyi // gnyen dang phrad pa 'chi ba yin /

24a bsams] δ : bsam β || de yis] δ : de yi β . 24c *kyi] ex conī (HAHN): kyis δ β .

atrāntare kṛpāsindhur bhagavān bhūtabhāvanaḥ /
duḥkhaṃ jñātvāsya sarvajñaś tadarthaṃ vanam āyayau // 79.25 //

25c jñātvāsya] AT: matvāsya BE.

/ {T488a} a trānta re kṛ pā sina dhu bha ga bāna bhū ta bhā ba naḥ / duḥ khaṃ jñā tvā sya
sarbba jñasta darthaṃ ba na mā ya yau /

ちょうどその時、慈悲の海であり生類を益する方である世尊は、一切智者として彼の苦しみを知り、彼のために林にやって来た。

/ skabs der bcom ldan brtse ba yi // rgya mtsho 'byung po la dgongs pa /
/ thams cad mkhyen pas de yi ni // sdug bsngal shes nas nags su byon /
25c de yi] β : de yis δ .

dayayāśvāsitas tena tyaktvā pāśam atha dvijaḥ /
taddattaṃ nidhim ādāya taṃ praṇamya yayau gṛham // 79.26 //

/ da ya yā śvā si taste na tyaktva pa śa ma tha dvi jaḥ / taddattaṃ ni dha mā dā ya taṃ pra ṇa
mya ya yau gṛ haṃ /

憐れみにより、かの〔仏〕に慰められた婆羅門は繩を捨てて、彼から与えられた財を受け取り、彼を拝礼して、家に戻った。

/ de nas de yis gnyis skyes ni // brtse bas dbugs phyung zhags pa btang /
/ de yis byin pa'i gter blangs nas // de la phyag 'tshal khyim du song /
26a de yis] δ : de yi β . 26c de yis byin] δ : de yi sbyin β .

tasya bhāryā dhanenāpi na jagāmānukūlatām /
parasamsparsārāgiṇyas tuṣyant arthena na striyaḥ // 79.27 //

/ ta sya bhāryā dha ne nā pi na ja gā mā nu ku la taṃ / pa ra {D178a} saṃ sparśa rā gi nyastu
ṣyaṃ tyarthe na na stri yaḥ /

しかし彼の妻は財によっても従順にならなかった。他の男たちとの交わりを欲する女たちは、財によって満足するものではない。

/ de yi chung ma nor gyis kyang // rjes su mthun pa nyid ma gyur /
/ gzhan gyi reg pa la chags pa'i // bud med nor gyis tshim mi 'gyur /
27b mthun] δ : 'thun β .

sa kālena mahārambhabhoge 'py udvignamānasah /
acintayad aho nāsti saṃsāre tattvataḥ sukham // 79.28 //

/ sa kā le na ma hā raṃ bha bho ge pyudbigna ma na saḥ / a cinta ya da ho nāsti saṃ sā ra taṃ
tva taḥ su khaṃ /

彼は大変な労苦による享楽に、次第に嫌気がさして、考えた。——「ああ、輪廻に幸せは無いというのは本当だ。」

/ longs spyod rtsom pa che la yang // dus kyis yid ni chags bral des /
/ *bsams pa kye ma 'khor ba na // de nyid du na bde ba med /
28b kyis] δ : kyī β . 28c *bsams pa] corr.: bsam pa β δ .

Note 28d de nyid du na] この terminative の後の冗語の na は、むしろ *ni と読むべきか。

dāridryatulyaṃ kim ihāsti duḥkhaṃ
dhanārjanaṃ duḥkhataraṃ tato 'pi /
dhanopabhogaḥ sukhaleśadigdhaḥ
pade pede duḥkhaśātāni sūte // 79.29 //

29c sukhaleśa] AT: sukhasēśa BE.

/ dā ri drā tu lyaṃ ki mi bāsti du khaṃ dha nā jā ni duḥkha ta raṃ ta to pi / dha no pa bho gaḥ
su kha le śa digdhaḥ pa de pa de duḥkha śa ta ni sū te /

「貧乏に匹敵するいかなる苦しみがこの世にあるだろうか。しかし財の獲得はそれよりもっと苦しい。わずかばかりの快樂にまみれた財の享受は、一步一步に百の苦しみを生じさせる。」

/ dbul dang mtshungs pa'i sdug bsngal ci zhiḡ yod // de bas kyang ni nor bsgrub
rab sdug bsngal /

/ nor gyi longs spyod bde ba'i chas bsgos pa // gnas dang gnas su sdug bsngal
brgya phrag skyed /

29b bsgrub] ḡ : sgrub β . 29d skyed] ḡ : bskyed β .

viraktaś cintayitveti sa gatvā jetakānaṃ /
bhagavantaṃ bhavocchityai śāstāraṃ śaraṇaṃ yayau // 79.30 //

30c °cchityai] T: °cchityai ABE.

/ bi raktaścitta yi tve ti sa ga tvā je ta kā na ṇaṃ / bha ga ba taṃ bha bocchityai śāsta raṃ śa
ra ṇaṃ ya yau /

このように考え、欲望を離れた彼はジェータ林に行き、〔輪廻における〕生存を断ち切るために、世尊・師に帰依した。

/ de ltar chags bral rab bsams te // rgyal byed tshal du song nas des /

/ srid pa *gcaḡ slad bcom ldan 'das // ston pa la ni skyabs su song /

30c *gcaḡ slad] ex conī: bcaḡ slad β ḡ .

Note 30c *gcaḡ slad] 諸版の読み bcaḡ は gcod の過去形であるが、slad の前にはむしろ未来形 gcaḡ が期待されるので *gcaḡ slad と訂正する。Kalpalatā 蔵訳で slad の前で動詞が未来形を示す用例を、目についた範囲で幾つかあげると：50.51b me tog btu slad = Skt. puṣṭocayāya; 50.58 bslang slad = Skt. piṇḡāya; 55.33b bsrung slad = Skt. rakṣāyai; 59.12d gdon slad = Skt. uddharaṇāya; 59.36a dag par bgyi slad = Skt. viśuddhyai; 59.151c brlag slad = Skt. kṣayāya.

tasyāśayaṃ sānuśayaṃ dhātuṃ jñātvā gatiṃ tathā /

bhagavān dharmabhaiṣajyaṃ bhavarogabhiṣag dadau // 79.31 //

/ ta syā śa yaṃ sā nu śa yaṃ ca dhā tuṃ jñā tvā ga tiṃ ta thā / bha ga bāna dharmma bhai ṣa
jyaṃ bha ba ro ga bhi ṣagda dau /

生存の病の医者である世尊は、彼がもつ諸煩惱を伴った心の性向 (āsaya) と先天的
素質 (dhātu) と運命の行路 (gati) を知り、[彼に適した] 教え (法) という薬を与え
た。

/ de yi bsaṃ pa bag la nyal // khams dang de bzhin 'gro mkhyen nas /
/ chos kyi sman ni bcom ldan 'das // srid pa'i nad kyi sman pas byin /

sa dṛṣṭasatyah pravrajyāṃ samādāya prasādinīm /

sarvkleśaprahāṇārham arhattvaṃ samavāptavān // 79.32 //

32b prasādinīm] ABE: pra sā dī nām T: prasādinā Ed. Cf. de JONG. **32d** arhattvaṃ]
corr. (Ed.): arhatvaṃ ABET.

/ sa dṛṣṭa sa tyah pra bra {T488b} jyām sa mā dā ya pra sā dī nām / sarbba kle śa pra harṣārha
marha tvam (sa D: pa T) ma bāpta bān_ /

真理を観た彼は、浄信を伴う出家生活を授かり、すべての煩惱を捨断する阿羅漢の
境地を獲得した。

/ bden mthong de yis rab byung ni // rab tu dang ba yang dag blangs /
/ nyon mongs thams cad *spang ba'i slad // dgra bcom nyid ni thob par gyur /

32c *spang ba'i] ex con: spangs pa'i β δ .

Note **32c** *spang ba'i slad] 先の30c の注と同様の理由で slad の前にある過去形 spangs pa'i を未来
形 *spang ba'i と訂正する。[Sugg. HAHN] — なおここで蔵訳者が prahāṇa-arham を prahāṇa-*artham
の如くに spang ba'i slad (捨断するために) と訳したことは注意される。確かに -arham より *
artham とした方が意味はつかみやすくなるが、しかし -arham arhattvaṃ の表現は arha の音が二度
繰り返される言葉遊びが意図されていると思われるため、梵文をわざわざ *-artham に訂正する必
要はない。— なお prahāṇa (捨断) の語は仏教梵語である (BHSD, p. 389)。

tasya tām adbhutāṃ siddhiṃ dṛṣṭvā vipulavismayaḥ /

bhikṣubhir bhagavān pṛṣṭas tadvṛttāntam abhāṣata // 79.33 //

/ ta sya tā maddhū taṃ siddham dṛṣṭvā bi pu la bisma {D178b} yeḥ / bhikṣu bhirbha ga
bānpṛṣṭa stadvṛttānta ma bhā ṣa ta /

彼のその驚くべき達成を見て、ひどく驚いた比丘たちに尋ねられた世尊は、彼
の [前世の] 出来事を話された。

/ de yi grub pa rmad byung de // mthong nas ya mtshan rgyas pa yi /
/ dge slong gis dris bcom ldan gyis // de yi sngon byung rab gsungs pa /

33b pa yi] δ : pa yis β (also possible).

purā mahendraseno 'bhūd vārāṇasyāṃ nareśvaraḥ /
yasyāgryā sarvasattveṣu dayaiva dayitābhavat // 79.34 //

34a mahendraseno 'bhūd] ABET: mahendrasaṃjño 'bhūd Ed. 34d dayaiva] T (da yai ba), confirmed by Tib. brtse ba [...] nyid: dayeva ABE (= Ed.).

/ pu rā ma hendrā se no bhūdbā rā (ṇa D: ṇā T) syā na re śva ra / yasyā grā sarbba sa tve ṣu da
yai ba da yi tā bha bata /

昔、マヘンドラセーナという王がペナレスにいた。すべての生類への強い憐愍 [の
行為]こそが、[妃たちにもまして]彼の最愛の妃であった。

/ bā rā ṇa sīr mi yi dbang // dbang chen sde ni sngon byung ste /

/ sems can kun la gang *gi ni // brtse ba mchog nyid yid 'ong gyur /

34a bā rā ṇa sīr] D: ba ra nā sīr β T. 34b sde] δ : de β . 34c gang *gi] ex conī: gang
gis β δ .

yaṃ janaḥ paradeśebhyas tīvraṃ kupatitāpitaḥ /
chāyāvṛkṣam ivābhetya sanmārgastham aśīśriyat // 79.35 //

35b kupatitāpitaḥ] T (ku pa ti dā pi taḥ < kupatitāpitaḥ) and Tib. bdag po ngan pas (= kupati) rab gdungs pa: kugatitāpitaḥ ABE (= Ed.). 35c vṛkṣam ivābhetya] A (= Ed.): vṛkṣabhivāmyetya B: vṛkṣam ivābhye E.

/ ya ju naḥ pa ra de śe bhyastī braṃ ku pa ti dā pi taḥ / ccha yā brkṣa mi bā bhye tya sanmār-
gasthi ma śī śri yata /

悪い君主によってひどく熱苦を与えられた人々は、まるで [涼しい] 木蔭を与える樹
を [頼る] ように、他国から [逃れて] 正しい人の道に立つ彼のもとに来て、頼みにし
た。

/ bdag po ngan pas rab gdungs pa // yul gzhan nas 'ongs skye bo yis /

/ lam gnas gang zhig grib bsil gyi // ljon pa bzhin du mngon phyogs bsten /

35b bo yis] δ : bo yi β . 35c gang zhig] β : gang gi δ .

Note 35c lam gnas] 蔵訳者は sanmārga の san- (正しい人) の語を訳していない。

kadācit pratisāmantair niruddhanagaro 'pi saḥ /
akrodhaḥ sarvanidhane na yuddhe vidadhe dhiyam // 79.36 //

/ ka dā citpra ti pā (manterni D: mantairni T) ruddha na ga ro pi saḥ / a kro dhaḥ sarbba ni dha
ni na yuddhe bi da dhe dhi yaṃ /

ある時、敵国の諸軍に [彼の] 都城が囲まれてしまったが、その時にも彼は怒らず、あらゆる者の死を [結果として] 伴う戦争を [遂行しよう] と思わなかった。

/ nam zhig pha rol rgyal phran gyis // grong khyer dag ni bkag gyur kyang /
/ khro med de yis g.yul dag ni // thams cad gsod la blo ma bsgrubs /

36a gyis] NQ: gyi ḍ G. 36c de yis] ḍ : de yi β.

taṃ vijñāya nirutsāhaṃ viraktāḥ sarvamantriṇaḥ /
lubdhā draviṇaṃ ādāya babhūvuḥ śatrusaṃśrayāḥ // 79.37 //

/ taṃ bi jñā ya ni rudsā haṃ bi raktā sarbba (manti D: mantri T) ṇā / (lubdha D: lubddha T) tra
(pi D: bi T) na mā dā ya ba bhū baḥ śa tru saṃ śra yāḥ /

彼が [戦う] 意欲をもたないことを知って、愛想を尽かしたすべての大臣たちは、強欲に金品を受け取って、敵軍に味方した。

/ de ni spro ba med shes nas // chags bral blon po thams cad kyis /
/ sred pas nor ni blangs byas te // dgra bo dag la brten par gyur /

atha prāṇivadhodvegatyaktarājyaḥ sa bhūpatiḥ /
alakṣitaḥ kṣamākṣetram ekākī kānaṃ yayau // 79.38 //

38c alakṣitaḥ] T (= Ed.): alakṣita ABE.

/ a tha prā ṇi ba dhodbe ga tyakta rā jyaḥ sa bhu pa tiḥ / a lakṣi taḥ kṣa ma kṣe tra me kā ki kā
na ṇaṃ ya yau /

かの王は、生者の殺戮行為への嫌悪ゆえに王の領土を捨て、『忍耐』という領土である林へ、誰にも見られずに独りで行った。

/ de nas srog chags gsod pa la // yid byung rgyal srid rab btang nas /
/ sa yi bdag po bzod pa'i zhing // gcig pu ma tshor nags su song /

38b btang] ḍ : gtang β. 38d tshor] β T: chor D.

Note 38d ma tshor] これが alakṣitaḥ の訳であることは、Kalpalatā 64.235b でも alakṣitaḥ の語が ma tshor bar と訳されていることから確認出来る。Cf. STRAUBE (2006), S. 174 (Kommentar zu 235b).

prabhubhaktiṃ samutsṛjya sattvalajjāṃ ca durjanāḥ /
amātyāḥ pratisāmantāṃ lobhāndhāś cakrire nṛpaṃ // 79.39 //

39b sattvalajjāṃ] ABE: sattvaṃ lajjāṃ Ed. Cf. de JONG. 39c lobhāndhāś] A (= Ed.): lomīndhāś B: lobhīdhāś E.

/ pra bhu bhakte sa mutsṛ jya sa tvaṃ lajjaṃ ca durjja nāḥ / {D179a} a mā tyāḥ pra ti sā mān-
taṃ {T489a} loddhāndhā śca kri raṃ nṛ paṃ /

主への忠誠心も、世の人々への恥ずかしさも捨てて、悪人である大臣たちは欲に目がくらんで、敵国の王を王とした。

/ rje la gus dang sems can la // ngo tsha rab btang ngan pa yi /
/ blon po chags pas ldong rnams kyis // pha rol rgyal phran rgyal por byas /
39a rje] δ : rjes β . 39c ldong] δ : long β (also possible).

navasya nṛpateḥ pārśve navā eva jajṛmbhire /
svasvāmityāginām lagnam anaucityam tu kevalam // 79.40 //

/ na ba syā nṛ pa ti pārśvi na bā e ba jaṃ jṛmbhi re / sva bhā mi tyā gi nī lagnam ma nau ci
tya tu ke ba lam /

新しい王の脇では、新しい人たちばかりが颯れた（栄達した）。自分たちの王を捨てた者たちは専ら不遇な境遇にとどまった。

/ mi bdag gsar pa'i ngos na ni // gsar pa nyid *dag mam par 'phel /
/ rang gi rje bo btang rnams la // 'os pa min pa 'ba' zhid lan /
40b nyid *dag] ex con: nyid du β δ .

Note 40b *dag] 諸版の gsar pa nyid du では文の意味がおかしい。梵文から推測して gsar pa nyid *dag と訂正して読む。[Sugg. HAHN]

te navasya kṣitipater dvārasthair vāritās ciram /
khedād ātmānam uddīśya jagur niḥśvasya lajjitāḥ // 79.41 //

41d niḥśvasya] A(post corr.): niśvasya A(ante corr.)BE (= Ed.).

/ te na ba sya kṣi ti sa terdvā rasthirbbā ri tāści raṃ / khe dā dātma na mudbi śya ja gurni śva
sya lajji tāḥ /

新しい王の門番たちによって永らく締め出された彼らは、意気消沈から、ため息をつきつつ、[惨めな]自分たちについて、恥じつつ語った。

/ de dag sa bdag gsar pa yi // sgo srung rnams kyis yun ring bkag /
/ skyo bas bdag nyid la mtshon te // shugs *phyung ngo tshas glu blangs pa /
41b srung] δ : srungs β (also possible). 41d *phyung] ex con: byung β δ .

mahendrasenam saṃtyajya peśalam sulabham prabhum /
paradvāri vayam pāpāḥ śāpatāpaḥ sahāmahe // 79.42 //

42a saṃtyajya] ABE: santajya Ed.

/ ma hendra se na paṃ tyā jya pe śa lam su la bham pra bhūḥ / pa ra ma dvā ri ba yaṃ pā pāḥ
śā pa tā saṃ sa hā ma he /

すぐに会ってもらえた、やさしい王であったマヘンドラセーナを悪人の我々は捨てて、他の〔王の〕門の前で、呪詛の苦しみを耐え忍んでいる。

/ rje bo mnyes gshin rnyed sla ba // dbang chen sde ni rab btang nas /
/ sdig can bdag cag gzhan sgo na // dmod pa'i gdung ba bzod par byed /

tyaktaḥ śrījanakaḥ surāsuranaravyākīrṇaratnotkaraḥ

sa svacchaḥ payasāṃ nidhiḥ pṛthutaraḥ sūnyāśayena tvayā /

he nīconmukha śaṅkha mūrkhā kupater dvāre 'dhunālambase

tūṣṇīm āssva khalena phutkṛtamukhas tāraṃ kim ākrandasi // 79.43 //

43a surāsuranara] T (su rā su ra na ra), confirmed by Tib. lha dang lha min mi rnam (= Skt. *surāsuranara): surāsuravara AE (= Ed.): surāsukhara B. Cf. de JONG. 43c śaṅkha] AT (= Ed.): śaṃsva BE || 'dhunālambase] corr.: 'dhunā lambase Ed. 43d tūṣṇīm āssva] corr. (Ed.): tūṣṇīm āsva A: stūṣṇīm āttha BE || khalena phūtḥkṛta] A, confirmed by T (kha le na phutḥkṛ ta) and Tib. brlang pos phud byas: khalena phūtḥkṛta E: khalena phudakṛta B: khale namatḥkṛta Ed. Cf. de JONG.

/ tyakta śrī ja na kaḥ su rā su ra na ra byā kirṇa ratnotka ra sa svacchaḥ pa ya saṃ ni dhiḥ pṛthu ta raḥ sū (nya D: nyā T) śa ye na tva yā / he nī tvonmu kha śaṃ kha mūrkhā ku pa te dvā (ra D: re T) dhu nā lam ba pe tūṣṇī ma śva kha le na phutḥkṛ ta mu khaṣtā raṃ ki mā kranda pi /

神々やアスラたちや人々が〔その頭上に〕多量の宝石を撒く、栄光の王であるあの方は、清澄な最も広大な海であられたが、空っぽな精神をもつお前たちによって捨てられた。おい、賤しい奴を慕う者よ、法螺貝よ、愚か者よ、悪王の門前に今やお前は凭れかかる。荒々しい者たちに顔に怒鳴り声を浴びせられているお前は、どうして〔今さら〕声高に泣きわめくのか。黙るがよい。

Metre: Śārdūlavikrīḍita.

/ dpal ni skyed byed lha dang lha min mi rnam rin chen tshogs kyis rgyas par byed // chu gter dri med shin tu rgya che de ni khog pa stong pa khyod kyis btang /

/ da lta bdag ngan sgo la brten cing gyen du phyogs thob rmongs pa'i dung dag kye // kha la brlang pos phud byas cho nge drag po ci zhiḡ la sgrogṣ mi smrar 'dug /

43b de ni khog] ḍ : de ni khobs β.

Note 43c gyen du phyogs thob] 梵文の nīconmukha 「賤しい奴を慕う者よ」に相当する藏訳が gyen du phyogs thob であるが、意味が明瞭ではない。gyen du phyogs 「上方に向かって」の訳語が 梵文の unmukha 「上向いた、慕う」にあたることは間違いないが、次の thob (<'debs pa, imperative) 「〔声を〕発せよ」(cf. 'debs pa, Mvy 4951) の訳語は命令形の動詞なので、梵語の nīca (賤し

い)と意味が合わない。蔵訳者はこのパーダを「悪王の門前にすがりついて、上に向かって [声] を発せよ、愚者の法螺貝、おい」と解釈したのだろうか。チベットの梵蔵併記版の蔵字梵文転写をみると、nī tvonmu kha と記されている。すると thob は動詞 *nītvā 「導いて」、もしくはそれに字が似ている動詞 (例えば *vātvā 「吹いて」) の訳である可能性が考えられる。

navarājyātape tīvre mantriṇām iti śocatām /
mahendrasenacandrasya sprḥā samdarśane 'bhavat // 79.44 //

/ na ba rā jyā ta pi tī bra mantri nā mi (tī D: ti T) śo ca tāṃ / ma hendra se na (canda D: candra T) {D179b} sya sprḥa sandarśa (ni D: ne T) bha bata /

このように新しい王権という激しい熱苦の下で、嘆き悲しむ大臣たちは、マヘンドラセーナという [冷涼な] 月を見たいと強く願った。

/ de ltar rab gdung blon po mams // rgyal srid gsar pa'i tsha gdung la /
/ dbang chen sde yi zla ba ni // rab tu blta bar 'dod par gyur /

44b tsha] ḍ : tshad β (also possible).

asminn avasare rājñah śamārāmanasthiteḥ /
samīpaṃ kauśiko nāma brāhmaṇo 'rthī samāyayau // 79.45 //

45b °rāmavanasthiteḥ] T: °rāmavanasthite A: °rābhavanasthite BE.

/ asminna ba sa re rā jñah śa mā rā ma ba nasthi teḥ / sa mī saṃ kau śi ko nā ma brāhma ṇorthī sa mā ya yau /

その頃、寂靜の園である林に滞在する王のもとに、カウシカという名の婆羅門が、[財を] 乞い求めるためやって来た。

/ skabs der rgyal po zhi ba yi // dga' tshal nags na gnas pa dang /
/ nye bar bram ze slong ba po // ko'u shi ka zhes pa 'ongs /

45c ba po: β : ba yi ḍ : (also possible). 45d ko'u] ḍ : kau β .

Note 45d ko'u] 梵語は kau であるが、蔵訳では ko'u なら二音、kau なら一音になり、韻律上ここでは二音が必要なので、ko'u になる。

sa viśrāntaḥ kṛtātithyaḥ phalamūlair mahībhujā /
prṣṭaḥ provāca vinayāt tatrāgamanakāraṇam // 79.46 //

/ sa bi śrāntaḥ kṣa tā ti thyaḥ pha la {T489b} mū lairmma hī bhu jā / prṣṭaḥ pro ba cā bi na yātta dā ga ma na kā ra ṇam /

彼は王によって果実や根菜で歓待され、疲れを癒した後、ここに来たわけを尋ねられて、鄭重に [次のように] 語った。

/ 'bras bu rtsa bas sa bdag gis // mgron byas ngal bsos de la ni /

/ de yi 'ong ba'i rgyu mtshan dag // dul bas dris pas rab smras pa /

46b ni] δ : byin β . 46c de yi] β : de yis δ || 'ong ba'i] β : 'ongs pa'i δ . 46d dris pas] β : dris pa δ .

Note 46c de yi 'ong ba'i] 蔵訳者は梵文を tatrāgamana ではなく *tad-āgamana- と読んで de yi 'ong ba'i と訳した可能性があり、梵蔵併記版の梵文 *ta dā ga ma na はそれを支持する。

sarvārthisārthasaṃkalpakalpavṛkṣamahāphalam /

mahendrasenaṃ gacchāmi dāridryād yācituṃ nṛpaṃ // 79.47 //

/ sarbbārthi pārthā saṃ kalpa kalpa vṛkṣamma hā pha lām / ma hendra se naṃ gacchā mi da ri dryā dyā ci tuṃ nṛ paṃ /

あらゆる乞い求める人の群の望み [を叶えることが出来る] 祈願成就の樹として大果ある方であらせられる、マヘードラセーナ王に、貧窮のゆえ [財を] 乞い求めるため、私は参りました。

/ slong ba'i tshogs kyi kun rtog gi // 'bras bu che ldan dpag bsam shing /

/ mi bdag dbang chen sde la bdag // dbul ba yis ni slong du 'gro /

47a kyi kun rtog] δ : kyis kun rtogs β . 47d ba yis] δ : ba yi β .

etad ākarṇya nṛpatis tam abhāṣata duḥkhiṭaḥ /

āsāgatārthivaimukhyatāpoṣṇaṃ niḥśvasan muhuḥ // 79.48 //

48b duḥkhiṭaḥ] ET (= Ed.), confirmed by Tib. sdug bsngal dang ldan pas: duḥkhataḥ A: duḥkhita B. 48d tāpoṣṇaṃ] A: tāpoṣṭaṃ BE.

/ e ta dā karṇya nṛ pa tista ma pra bhā ṣadduḥkhi ṭaḥ / brāhmanma hendra se no haṃ dhig-māmbi ra hi ta śri yā / [Note: The pādas 48cd and 49ab in the transmitted Skt. text of the bilingual Tibetan edition differ from the Skt. text of Nepalese mss. The pādas 48cd of the Tibetan Skt. text (brahman mahendraseno [...] śriyā) correspond to 49ab of the Nepalese Skt. text. The pādas 48ab and 49cd of the Nepalese mss. are same with the Skt. text of Tibetan bilingual edition. The pādas 49ab of the Skt. text in Tibet reads as follows: viparītena vidhinā nīto 'haṃ viparītātāṃ. Its text has no correspondance with the Skt. text in Nepalese mss. To put it shortly, 48abcd, 49abcd in the Nepalese tradition = 48ab + 49ab, [?] + 49cd in the Tibetan tradition.]

それを聞いて、王は希望をもって来た請願者から顔を背けること (拒否すること) の熱苦に苦しんで、幾度もため息をつきながら、彼に語った。

/ de thos mi bdag sdug bsngal dang // ldan pas de la rab smras pa /

/ bram ze nga ni dbang chen sde // dpal dang bral bas bdag smad do /

48c ni] δ : nyid β .

Note 48cd] 蔵訳の pāda cd は梵文の次の第49詩節の pāda ab にあたる。チベットの梵蔵併記版の蔵字の梵文も、本詩節と次詩節において、その内容構成が蔵訳と一致する。

brahman mahendraseno 'haṃ dhiñ māṃ virahitaṃ śriyā /
vaimukhyād yasya saṃtāpam arthī tvam dātum āgataḥ // 79.49 //

49b dhiñ māṃ] A (= Ed.): dhig māṃ BE (also possible).

/ bi pa rī te na bi dhi nā nī to haṃ bi pa rī ta taṃ / baimu khyā dya sya saṃ tā sa marthī
tvam dā tu mā ga taḥ /

婆羅門よ、私がマヘーンドラセーナです。すでに私が [王権という] 栄光を失っていることが何とも残念です。請願者としてあなたは来られましたが、 [あなたの請願から] 顔を背けねばならない (拒否しなければならぬ) ので、来られたあなたはその [私] に (yasya) [自責の] 苦しみを与えます。

/ slong ba khyod ni phyir phyogs las // gang la gdung ba ster du 'ongs /
/ sgrub byed phyin ci log las ni // phyin ci log nyid bdag gis thob /

Note 49a-d] チベットの梵蔵併記版の梵文音写から得られる、蔵訳の元になった梵文の第49詩節は次のとおりである。viparītena vidhinā nīto 'haṃ viparītātāṃ / vaimukhyād yasya saṃtāpam arthī tvam dātum āgataḥ // 直訳すれば: 「誤った悪い (viparīta) 行為 (vidhi) によって、誤った悪い結果 (viparītata) へと私は導かれた。 [請願者に] 顔を背けることによる苦しみをその [私] に (yasya) 与えるために、あなたは請願者として来られた。」

kiṃ niṣphalena vapuṣā śuṣkavṛkṣopamasya me /
āsābhaṅgaparimlānaṃ mukhaṃ paśyati yo 'rthinah // 79.50 //

50c āsābhaṅga] A: āsāmaṅga BE. 50d paśyati yo] ABET: paśyanti ye Ed.

/ kiṃ niḥpha le na ba su ṣāṃ śuṣka vṛkṣo pa ma sya me / ā sāṃ bha ga pa ri mlā naṃ mu
khaṃ pa śya ti yorhi naḥ /

[請願者たちの] 希望を打ち砕かれて力を失った顔を見る私の、まるで萎れた [果] 樹のように実りをもたらさない [この] 肉体に、一体何の価値があるでしょう。

/ gang *gis re ba nyams pa yi // slong ba'i bzhin log mthong gyur pa /
/ shing skam lta bu bdag gi lus // 'bras bu med pa dag gis ci /

50a gang *gis] ex conī: gang gi β ḍ. 50c skam] D: skams β: bskam T. 50d dag gis] ḍ: dag gi β.

iti rājavacaḥ śrutvā dvijaś chinnamanorathaḥ /
cireṇa saṃjñām āsādyā śilāhata ivābravīt // 79.51 //

/ i ti rā ja ba caṃ śru tvā dvi (jaśchanni D: jaśchinna T) ma no {D180a} ra thaḥ / ci re ṇa saṃ
jñā mā pā dya śi lā ha ta mi bā bra bīta /

このような王の言葉を聞いて、婆羅門は希望を喪失し、まるで岩で殴られた人のようであったが、しばらく経ってから、意識を取り戻して、語った。

/ zhes pa rgyal po'i tshig thos nas // rdo bas bsnun bzhin gnyis skyes ni /
/ re thag chad pas yun ring na // 'du shes thob nas rab smras pa /
51b bas] β : ba ḍ .

Note 51c yun ring na] これを yun ring *nas と直して読まないわけは Kalpalatā 蔵訳 55.14a と 92.24b にも同じ yun ring na の表現が使われているからである。諸版に異読も無い。

abhāgyair mama bhūpāla bhavān vibhavavarjitaḥ /
sulabhas tvadvidho dātā bhuvane labhyate kutaḥ // 79.52 //

52a abhāgyair] corr.: abhāgair AE: amāgyair B.

/ a bhā gaurmma ma bhū pā la bha bānbi bha ba barji taḥ / su la bhastvadbi dho dā tā bhu ba ne
la bhya te ku taḥ /

私に運が無いために、王よ、あなたが権勢を失われたのです。あなたのような、容易に願いを聞いていただける布施者が、世界にどうして得られましょうか（世の中、そんなにうまくゆくものではありません）。

/ bdag la skal ba med pa yis // sa skyong khyod kyis 'byor pa spangs /
/ gtong ba khyod ltar myed sla ba // 'jig rten du ni ga la rnyed /
52c gtong] ḍ : btong β || sla ba] ḍ : bla ba β .

rājyād abhyadhikā śobhā saṃtoṣābharaṇasya te /
apuṇyāny arthinām eva yeṣām anyo 'sti nāśrayaḥ // 79.53 //

/ rā jyā da tyadhi ka śo bha santo ṣā bha ra ṇa sya te / a pu ṇyā nyā dtha tā me ba ye ṣā ma
nyosti na śri {T490a} yaḥ /

知足という飾りをつけたあなたは、王位にまさって、輝いて立派に見えます。他に頼るべき者が誰もいない [私のような] 請願者たちは、福德を欠いているのです。

/ chog shes rgyan ldan khyod mdzes pa // rgyal srid dag las shin tu lhag /
/ gang zhig mdza' bo gzhan med pa'i // slong rnams bsod nams med pa nyid /
53a rgyan] ḍ : rgyal β || mdzes] β : mdzad ḍ .

tyaktasya cañcalatayā sahasaiva lakṣmyā
ratnākarasya na manāg api hīnatābhūt /
lakṣmīḥ śunīva khalalubdhagrḥāvasannā

nādyāpi satpuruṣasamśrayaharṣam eti // 79.54 //

54b manāg api] AT (= Ed.): manāmapi BE. 54c lakṣmīḥ śunīva] T, confirmed by Tib.
dpal ni khyi bzhin: lakṣmīs tu nīca ABE (= Ed.)

/ tyakta sya caṃ ca la ta yā sa ha sai ba lakṣmyā ratnā ka ra sya na ma nā ga pi hī na tā bhūta /
lakṣmīḥ śu nī ba kha la lubdha gṛ hā ba sannā nā dyā pi satpu ru ṣa sam śra ya harṣa mi ti /

繁栄の女神ラクシュミーの移り気でたちまち見捨てられる宝石の鉱脈には [それ自体] 少しも劣った点はありません。女神は雌犬のように粗野な強欲者たちの家に身を沈めて、今日なお高貴な人々のもとに身を寄せる喜びを知りません。

Note 54c lakṣmīḥ śunīva] 梵蔵併記版の梵文音写から、pāda c の冒頭を lakṣmīḥ śunīva 「ラクシュミーは雌犬のように」と読む梵文伝承がチベットに伝えられていたことが知られる。蔵訳 dpal ni khyi bzhin もその読みを支持する。他方、ネパールに伝わった読みに従えば pāda c は lakṣmīs tu nīcakhālubdhagrāhāvasannā 「ラクシュミーは、下劣で粗野な強欲者たちの家に身を沈めて」となる。どちらの伝承も意味は通るが、どちらの方が表現として優れているかを考えると、チベットの伝承に軍配が上がる。

Metre: Vasantatilaka.

/ dpal mo g.yo ba nyid khyis 'phral la nges par btang gyur pa'i // rin chen 'byung
gnas dag ni bag kyang dman par gyur pa med /

/ dpal ni khyi bzhin mi bsrin brkam chags khyim na dman ldan zhing // da
dung skyes bu dam pa la brten dga' bar yongs ma gyur /

54a nges par] β: nges pa ḍ.

ity uktvā nṛpam āmantrya sa nairāśyaviṣāturaḥ /
phala*vr̥ttivicchedaviṣādān martum udyayau // 79.55 //

55c phala*vr̥ttiviccheda] ex conī (cf. Tib.): pha la br̥tta ta ruccheda T: kala-
trav̥ttiviccheda ABE (= Ed.)

/ i tyuktvā nṛ pa mā mantrya ba nai rā mya bi ṣā tu raḥ / pha la br̥tta ta ruccheda bi ṣā dān-
martya mudya yau /

このように王に語り、別れの挨拶をしてから、無希望という毒に苦しむ彼は、果実が [そのまま] 生計の資 (*vr̥tti) となる [如意] 樹が断たれ、落胆したため、死のうとした。

Note 55c] pāda c はネパールの伝承では kalatra-vr̥tti-viccheda- であるが、私はチベットの梵蔵併記版の pāda c の phala-vr̥tta-taru-ccheda- の読みを少し訂正した読み phala*vr̥tti-taru-ccheda- を採用した。ネパールの伝承では pāda cd の訳は「妻 [を養う] 生計の資が絶たれて落胆したため、死のうとした」となるが、しかし妻 (kalatra) の生計に唐突に言及するのは奇妙である。菩薩本縁経には、暴虐な一王によって婆羅門の一家が牢屋に繋がれて、身代金に金銭五十を要求されてい

るといふ特別な事情が語られるが (T3 56a11-14)、特に妻のことを述べてはいない。大莊嚴論 (T4 339c) と経律異相 (T53 142a) は婆羅門の負債について述べるだけである。もし妻に関わる特殊事情があるなら、Kṣemendra は本章のどこかで先に説明していなければならないはずであるし、他の漢訳並行文献を見ても、妻への言及は無い。また、もし妻の生計が心配なら、なぜこの場で自殺を考えるのか理解できない。むしろチベットの伝承に従った方がよい。蔵訳の pāda c の 'bras bus 'tsho ba'i shing bcad pa'i 「果実の生計 (*vṛtti) の樹が切られたる」はネパール伝承とは明確に異なる伝承であり、梵蔵併記版の pāda c の phalavṛttataruccheda- の読みがその蔵訳を裏付ける。ただし梵蔵併記版が伝承する vṛtta には「生計」の意味が無いので、もし蔵訳と合わせるなら vṛtta を *vṛtti (= 'tsho ba) と訂正して読む必要がある。私はその訂正を施した上で、「果実が[そのまま] 生計の資となる樹が切られたる」と解釈した。ここでは樹 (taru) とは神話的な如意樹 (kalpataru) を指し、そのイメージが人の望みを叶えて布施をする王と重ねられている。如意樹は、天界や北クル洲に生えていて、衣服や食物などの生活の資 (*vṛtti) を枝に果実として実らすと仏教徒に信じられている。

/ zhes brjod mi bdag la gsol nas // bsam bral dug gis gzir ba de /

/ 'bras bus 'tsho ba'i shing bcad pa'i // mya ngan las ni 'chi bar brtson /

55a zhes] δ : ces β. 55b dug gis] δ : dug gi β. 55c bus] β : bu δ || bcad pa'i β : bcad de'i δ.

tasya kaṅṭhagataṃ pāsam apanīya sa bhūpatiḥ /

tam ūce karuṇāsindhur bandhuḥ snigdhataro 'rthinām // 79.56 //

/ ta sya kaṅṭha ga taṃ pā śa ma pa nī ya sa bhū pa tiḥ / ta mū (co D: ce T) ka ru ṇām sindhurb-
bandhuḥ snigdha ta {D180b} rorthi nām /

彼が首にかけた繩をかんの王は奪い、慈悲の海であり請願者たちにとって最もやさしい友である方は、彼にこう話した。

/ de yi mgrin par song ba yi // zhags pa sa bdag de yis bsal /

/ snying rje'i rgya mtsho slong mams kyi // mdza' gcugs gnyen gyis de la smras /

56b de yis] δ : de yi β. 56d gcugs] δ : bcug β.

baddhvā māṃ pratipakṣasya naya bhūmipateḥ purīm /

madvadhaisī sa te vittam dāsyaty abhimatādhikam // 79.57 //

57a baddhvā] AT (= Ed.): badhvā BE. 57c madvadhaisī sa te] AT: madvadheṣī sa te
B: madvadhī sa hi te Ed. Cf. de JONG.

/ baddhvā māṃ pra ti pakṣa sya na ya bhu mi pa tiḥ pu rīm / madba dhai ṣī pa te bittam dā sya
tya bhi ma tā dhi kaṃ /

私を縛って、敵の王の都城に連れて行きなさい。私を殺したい彼は、希望する以上の財をあなたに与えるでしょう。

/ bdag chings sa yi bdag po ni // mi mthun phyogs kyi grong khyer khyer /
/ khyod la bdag ni gsod 'dod des // mngon 'dod las lhas lhas nor ster 'gyur /

ity uktaḥ pārthivendreṇa lajjamāna iva dvijaḥ /
tam arthibāndhavaṃ baddhvā nināya dhanatṛṣṇayā // 79.58 //

58c baddhvā] AT (= Ed.): baddho B: badhvā E.

/ i tyuktaḥ pārthi bendre ṇa lajja ma na i ba dvi jaḥ / ta marthi bandha baṃ baddhvā na nā ya
dha na tṛpta yāḥ /

王にこのように言われた婆羅門は、財への渴望のため、恥じつつある人のように請願者の友である彼を縛って、連れていった。

/ de skad sa yi bdag pos brjod // ngo *tshar gyur bzhin gnyis skyes kysis /
/ slong ba'i gnyen de bcings nas ni // nor la sred pas rab tu khyer /

58a skad] ḍ : slad β . **58b** *tshar] ex con: mtshar β ḍ .

taṃ dṛṣṭvā pratisāmantas tenānītaṃ mahīpatim /
tadvṛttāntaṃ ca vijñāya vismitaḥ praśāsaṃsa tam // 79.59 //

/ taṃ dṛṣṭvā pra ti sā manta ste nā nī taṃ ma hī pati / tadvṛttāntaṃ taṃ ca bi jñā ya bi smi ta pra
śa śaṃ pa taṃ /

敵国の王は、彼に連れられてきたかの王を見、その出来事を仔細に知り、驚愕して、かの [王] を称賛した。

/ sa bdag de yis khrid pa de // pha rol rgyal phran dag gis mthong /
/ de yi byung tshul thos gyur nas // ya mtshan gyur pas de la bsngags /

59a de yis] ḍ : de yi β . **59b** mthong] ḍ : mngon β .

sa viprāya dhanam dattvā svapade pṛthivīpatim /
caraṇālīnamukutaḥ taṃ prasādyā nyaveśayat // 79.60 //

60b svapade pṛthivīpatim] ABE (= Ed.): svastha ne bhū mi pa ti saḥ T (<*svasthāne *bhūmipatiḥ saḥ). **60d** nyaveśayat] T (nya be śa yata < *nyaveśayat): nyavedayat ABE (= Ed.). Cf. de JONG.

/ sa bi prā ya dha nam da tvā svastha ne bhū mi pa ti saḥ / {T490b} ca ra ṇā li na mu ku ṭa
staṃ pra sā dya nya be śa yata /

婆羅門に財を与えてから、[王の] 足下に跪いて王冠をそのみ足につけた [敵国の] その王は、浄信をいだきつつ、かの王を自分の地位に就けてやった。

/ bram ze la ni nor byin nas // rang gi gnas su sa bdag de /
/ zhabs la cod pan gyis gtugs te / dang bar byas nas de yis bkod /

60c gtugs] δ : btugs β . 60d de yis] δ : 'di yi β .

Note 60b] pāda b はネパール伝承の梵文 svapade prthivipatim に対し、チベットの梵蔵併記版の梵文では奇妙にも *svasthāne *bhūmipatiḥ saḥ と、その同義語的表現に置き換えられていたようだ。ネパール伝承の読みの方が正しい読みと思われ、チベットの伝承は恐らく梵文写本の余白に記された注釈的説明の語句が本文に入って、本来の読みと入れ替わったものではないかと思われる。蔵訳の pāda b はどちらの読みから訳されたものであるか不明である。

manujapatir ahaṃ mahendraseno

dhanavihitas tu ya eṣa kauśiko 'rthī /

punar api ca sa eva jīvaśarmā

caritam iti svam udāhṛtaṃ jinena // 79.61 //

61b vihitas] ABET, confirmed by Tib. bsgrubs: virahitas Ed. Cf. de JONG || tu ya] A:
tū ya BE.

/ ma nu ja pa ti ra haṃ ma hendra se no dha na bi hi tasta ya e ya kau śi korthīḥ / pu na ra pi
ba sa e ba ji ba śarmmā ca ri ta mi ti sva pa dā hṛ taṃ ji ne na /

マヘンドラセーナ王は [この] 私であった。更にまた、財を授かった請願者カウシカこそが [今世で阿羅漢になった] ジーヴァシャルマンである。——と、このように勝者 (仏) により、ご自身の行いが説かれた。

Metre: Puṣpitāgra.

/ mi yi bdag po dbang chen sde ni nga nyid de // gang *'di slong ba ko'u shi ka'i
nor dag bsgrubs /

/ slar yang de nyid kho na 'tsho ba bde ba'o // zhes pa'i spyod pa rgyal bas rang
la dper brjod do /

61b gang *'di] ex con: gang 'dis β δ || ko'u] δ : kau β || dag] δ : bdag β .

Note 61b ko'u] もし kau なら一音であるが、韻律上ここでは二音が必要なので、ko'u になる。

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyāṃ mahen-
drasenāvadānam ūnāśītitaṃ pallavaḥ //

/ i ti kṣe mendra bi ra ci tā yāṃ bo dhi satvā ba dā naṃ kalpa la tā yāṃ ma hendra se nā ba dā
na mū nā śi ti ta maḥ {D181a} palla baḥ //

以上、クシェーメンドラ作『菩薩のアヴァダーナの祈願成就の蔓草』における「マヘンドラセーナ [王] のアヴァダーナ」という第79の小枝 (章)。

/ zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa
dpag bsam gyi 'khri shing las dbang chen sde'i rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste
bdun cu rtsa dgu pa'o //

第79章の非重要な異読の報告

1. チベット訳の諸版の正字法上の異読

27b rjes su] rjesu G. **30d** skyabs su] skyabsu G. **38d** nagsu su] nagsu G.

2. チベット訳の諸版の特殊な異読 (Sonderlesungen)

2b brjod] brjid D. **6a** bsams] bsam T. **8d** stor] ster N. **10d** bdag] dag D. **11a** zhing] zhig
D. **13c** rgyud] brgyud D. **13d** des] dos D. **14c** bud] bu N. **19c** pa yis] pa yi T. **22a** ma
yi] ma yis T. **29c** longs] yongs D. **29d** bsngal] om. G. **30c** bcad] bcas G. **35d** bsten] bstan
D. **39b** ngo tsha] ngo mtshar G. **43a** tshogs kyis] tshogs kyi T. **43d** drag] drug N || smrar]
smar N. **47c** chen] tshan N. **50b** log] logs G. **51c** re] ri N. **52c** khyod] khyed Q. **53a**
khyod] om.G. **55d** 'chi] 'ching G. **56a** ba yi] ba yis T. (*Colophon:*) sde'i] bde'i G.

3. 梵文写本における特殊な異読 (Sonderlesungen)

1b vitta] vittah E || manasaḥ] manasā B. **1c** patanti] paśāṃti B. **1d** śamaṃ ye] śame ye
E. **3a** śabalaśmaśruḥ] sacalaśmaśru E. **5d** viraktā] virakta B. **6a** śācintayad] śāmcintayad
B. **6d** °panataḥ] °pavataḥ B. **8d** vīkṣamāṇa] vīkṣyamāṇa B. **10a** tv asminn] tasminn B.
11b patim] pattim B. **11d** ābhijātyā°] āmijātyā° B. **12c** dāridryam] dāridrām E. **12d** bata]
cata E. **13a** dveṣiṇas] dvepiṇas E. **13b** vallabham] vallabhām E. **13c** pravāhārhaṃ]
pravāhārhe E. **15a** sotsāhaḥ] sotsāhā B. **16b** viśīrṇa] viśīrṇa A. **17a** vipraḥ] vipra E. **18d**
saṃpūrṇakanakāmbaraḥ] sapūrṇakanakāmbara B. **19b** purīparyanta] purīmparyyanta A. **19d**
muṣiṭo 'tha] mukhito dya B : bhuṣiṭo ya E. **20d** kaṇāyitam] kaṇāyutaṃ B. **21b** vittam] cittam
E. **21c** abhāgya] asāgya E. **22c** graviṣaiḥ] graviṣai E. **23b** °bandhanaṃ] °baṃdhane B.
26d praṇamya] praṇaṃmya B. **29b** dhanārjanaṃ] dhanārjane E. **29d** pade pade] padaṃ pade
B. **30b** gatvā] matvā B. **33c** bhikṣubhir] bhikṣur E. **35a** deśebhyas] deśemyas B. **35d**
aśīśriyat] aṇīśriyat B. **36a** pratisāmantair] pratisāmaṃtai B. **38c** kṣamākṣetram] kṣayākṣetram
E. **38d** kānaṃ] kānakaṃ E. **41a** kṣitipater] kṣitipate B. **43a** śrījanakaḥ] śrījanaka B. **46b**
mahībhujā] mahībhujāḥ E. **46d** tatrāga°] tannāga° B. **48c** āśāga°] āśāga° B. **48d** niḥśvasan]
niśvasan A. **49d** tvam dātum] tvadānam B. **50b** me] bhe E. **51d** śilāhata] śilāhataṃ B. **52c**

tvadvidho] tadvidho B. 53a abhyadhikā] amyadhikā B. 53b saṃtoṣābharāṇasya] saṃtoṣā-marāgasya B. 54a tyaktasya] tyaktamśya B || sahasaiva] sahasaeva A.

APPENDIX

Avadānakalpalatā 梵文と蔵訳の語の対応関係の確認

将来の索引作りのために、最後に付録として、梵蔵を一字一句対照させておきたい。以下の表記に関する注意：梵文と蔵訳の語の対応関係を示す際に、代名詞と動詞と一部の副詞は、語尾変化が付いた活用形で示す。しかし名詞と形容詞については、語尾変化形を出さずに、基本的に語幹の形で示し、語幹の後につけた1~8の数字で梵語の八つの格を示す。例：aśva1 = aśvaḥ, aśva2 = aśva (voc.), aśva3 = aśvam, aśva4 = aśvena, aśva5 = aśvāya, aśva6 = aśvāt, aśva7 = aśvasya, aśva8 = aśve. 両数と複数の場合も、格の表現には単数と同じ数字を用いる：aśva1 = aśvaḥ or aśvau or aśvāḥ.

第78章 Śakracyavana

/ gang *gis (= ye) skabs gsum dbang phyug la (= tridaśeśvara8) yang (= api) brtse ba dang ldan pa'i (= dayāpraṇayin3) // mig ni (= dṛṣṭi3) zhi ba min pa (= aśiva-) zhi byed la dpa' (= saṃśa-mana-pragalbha3) ltung byed pa (= pātayanti) // chen po (= mahat7) de dag nmams kyi (= teṣām) mthu ni (= prabhāva-) cher 'os (= mahārha1) chen po nyid (= mahiman1) // dge mtshan *gyi ni (= kautuka7) rtse mo (= śṛṅga3) shin tu mtho ba dag tu (= uttuṅga-) 'dzegs (= adhirohati) // 78.1 //

/ brgya byin (= śakra1) mdun sar (= sabhā-) 'khod pa (= āśīna1) sngon (= purā) // mtho ris nas (= tridiva-) lhung (= cyuti-) mtshan nyid kyis (= lakṣaṇa4) // reg cing (= sprṣṭa1) seng ge'i gdan (= simhāsana) steng du (= utsaṅga8) // dga' ba rab tu thob ma gyur (= na ratim pratyapadyata) // 78.2 //

/ de yi (= tasya) mgo la (= mauli8) *mandā ra'i (= mandāra-) // phreng ba (= mālikā1) gser ldan (= suvarṇa-) mdzes pa ni (= rucira1) // bsod nams ma yin (= apuṇya-) bsgribs pa yi (= utsanna-) // lang tsho'i (= tāruṇya-) dpal bzhin (= śrīr iva) nyams par gyur (= mlānatām yayau) // 78.3 //

/ de yi (= tasya) thig le (= tilaka8) grags pa ltar // dkar la (= yaśaḥśubhra8) nyams par bya ba'i slad (= vilopa5) // rngul gyi (= sveda-) chu thigs (= udabindu1) gsar pa yis (= nava1) // ngan smras (= apavāda1) bzhin du (= iva) gnas dag byas (= padaṃ cakrire) // 78.4 //

/ *da ni (= atha) sems ni bsams pa la (= cintā-) // chags shing (= saṃsakta-) ltung la (= patana7) nye gyur pa (= āsanna7) // de yi (= tasya) brtan pa (= dhṛti1) phrag dog gis (= īrṣyā-) // khros (= ruṣṭā1) bzhin (= iva) rab tu ring bar (= dūratarāma) song (= prayayau) // 78.5 //

/ mya ngan (= śuc6) yongs 'dris (= paricita3) de (= tam) mthong nas (= dṛṣṭvā) // 'jigs pa'i (= cakita1) bde sogs kyis (= śacī1) smras pa (= ūce) // ltung ba dag la (= nipatana8) nye ba (= āsana8) 'dir (= asmin) // rten ni (= avalambana1) rab tu bsam par mdzod (= cintyatām) // 78.6 //

/ 'jig rten nmams la (= loka8) rgud pa *yi (= vipad7) // bgom bya min pa (= alaṅghya1) med (= nāsti) ces (= iti) nges (= niścaya1) // gang zhig (= yad) nyon mongs (= kleśa-) thigs pa (= vipluṣ1) 'di (= imāḥ) // 'gro ba'i bdag po (= jagatām pati7) khyod la (= tava) yang (= api) // 78.7 //

/ nges par (= khalu) rnam kun (= sarvathā) phyir phyogs pas (= vaimukhya6) // 'bad pa yis ni (= yatnatas) btsal btsal nas (= anviṣyānviṣya) // ltung ba (= āpad1) yon tan la (= guṇa-) sred (= lubdha1) *bzhin (= iva) // chen po nmams dang (= mahat4) 'grog par (= saṅga3) 'dod (= icchanti) // 78.8 //

/ khyab bdag (= vibhu2) rang nyid (= svayam) 'dzam gling du (= jambudvīpa3) // re zhig (= tāvat) bobs la (= avatīrya) khyod kyis ni (= tvayā) // rgud pa (= vyasana8) bsrung bar (rakṣaṇa-) bzod pa yi (= kṣama1) // dge sbyong (= śramaṇa1) 'ga' zhig (= kaścid) btsal bar mdzod (= mṛgyatām) // 78.9 //

/ gang dag (= yeṣām) dge bas bgrod byed cing (= kuśalagāmin1) // dge ba nyid kyis (= kuśala4) sbyor (= yuj-) byed pa (= yujyante) // dge sbyong (= śramaṇa1) mthu ni (= prabhāva-) rgya che zhing (= vipula-) // khyad par 'phags pa (= utkarṣa1) grags pa thos (= śrūyante kila) // 78.10 //

/ zhes pa (= iti) dga' ma'i (= priyā-) tshig (= vacas3) thos nas (= śrutvā) // de bzhin (= tathā) zhes (= iti) smras (= uktvā) lha yi bdag (= marutpati1) // sa la (= kṣiti3) mngon phyogs (= abhyetya) nyon mongs ni (= kleśa-) // 'jil ba (= saṃkṣaya3) dge slong nmams la (= śramaṇa3) dris (= papraccha) // 78.11 //

/ brgya byin gyis ni (= śakra-) dris (= praṇaya-) tsam gyis (= mātṛeṇa) // mthu yis (= prabhāva-) mngon khengs (= abhimānin1) de dag gis (= te) // thal mo sbyar byas (= añjalivyagra1) de nyid la (= tad-) // phyag 'tshal (= praṇāma-) bzhin ras btud par gyur (= natānana1) // 78.12 //

/ gang zhig (= ye) bdag nyid la (= mām eva) 'dud pa (= praṇamanti) // de *yis (= te) ji ltar (= katham) srung byed 'gyur (= kurvanti rakṣām) // zhes (= iti) bsams (= dhyātvā) lha yi bdag po ni (= marutām pati1) // re ba nyams pas (= bhagnāśa1) rang gnas (= svapada3) song (= yayau) // 78.13 //

/ de nas (= tatas) de *yis (= saḥ) bde gshegs ni (= sagata3) // mchog gi (= parama-) bdud rtsi (= amṛta3) thob (= saṃprāpta-) shes nas (= jñātvā) // ltung ba (= nipatana8) rab tu nye ba *na (= pratyāsanna8) // yongs su skyob pa dag tu (= paritrāṇa3) bsams (= amanyata) // 78.14 //

/ de nas (= atha) de ni (= saḥ) rjes 'brang bcas (= sahānuga4) // dbang po'i phreng ba'i (= indramāla-) phug nang na (= garbhasthita3) // de bzhin gshegs pa (= tathāgata3) me khams la (= tejodhātu-) // snyoms zhugs gnas pa (= samāpanna3) lta ru (= draṣṭum) song (= yayau) // 78.15 //

/ de nas (= atha) bde sogs bdag po (= śacīpati) **des** (= saḥ) // '**phral la** (= sahasā) phug dang
nye bar (= guhāntika3) phyin (= āsādyā) // zur phud lnga pa (= pañcaśikha3) zhes pa yi (= nāma)
// dri za'i bu la (= gandharvasuta3) gus pas (= ādara6) smras (= ūce) // 78.16 //

/ de bzhin gshegs pa (= tathāgata3) bcom ldan 'das (= bhagavat3) // me yi kham la (= tejodhā-
tu-) snyoms zhugs pa (= samāpanna3) // khyod ni (= tvam) rang gi sgyu rtsal la (= svakalā-) //
mkhas pas (= kauśala4) rtogs par bya bar 'os (= prabodhayitum arhasi) // 78.17 //

/ gang zhig (= yaḥ) dus min (= akāla4) nyer bgrod dang (= upasarpati) // ma brjod par ni (=
anivedita1) nang 'jug dang (= praviśati) // bsam pa shes pa min pa (= anāśayajñā1) de (= saḥ) //
dam pa nmams *kyi (= sat7) smad pa'i (= avamāna7) gnas (= bhājana1) // 78.18 //

/ zhes (= iti) brjod (= ukta1) lha yi rgyal po yis (= surarāja4) // blo gros ldan pa (= dhīmat1) dri
za'i bu (= gandharvadāraka1) // bai ḍūrya yi (= vaiḍūrya-) dbyug pa can (= daṇḍa3) // rgyud
mang (= vīṇā3) sgra snyan (= susvara-) len du bcug (= sāraṇām akarot) // 78.19 //

/ rang bzhin gyis (= svabhāva-) snyan (= madhu-) yid du 'ong (= udāra-) // bstod (= stuti-)
dbyangs (= gīti4) dga' ba dang bcas pas (= ramya4) // de yis (= saḥ) rgyal ba (= jina3) sad byas
te (= vibodhya) // 'phrog byed (= hari7) lta ba'i go skabs (= darśanāvasara3) *byas (= cakre) //
78.20 //

/ de nas (= tatas) lha dang bcas pa yi (= devaiḥ saha) // mchod sbyin brgya pa (= śatakratu1) rab
zhugs te (= praviśya) // rab zhi'i (= praśama-) bdud rtsi'i (= amṛta3) char 'bebs pa (= varṣat3) //
dga' ba skyed byed (= harṣajanana3) bde gshegs (= sugata3) bltas (= dadarśa) // 78.21 //

/ phyag 'tshal (= praṇāma-) rab tu btud pa (= ānata1) des (= saḥ) // mgo yi (= mauli-) *mandā ra
ba'i (= mandāra-) ros (= makaranda4) // ston pa'i (= śāstr7) zhabs kyi (= pāda7) sen mo yi (=
nakha-) // me long dag ni (= darpaṇa-) rab tu phyis (= mārjanaṃ cakāra) // 78.22 //

/ de nas (= tatas) rab zhugs (= praviṣṭa7) de la ni (= tasya) // gang gis (= yena) bden pa (= satya-)
mthong ba *las (= darśana6) // chos kyi mig ni (= dharmacakṣus1) 'byung gyur pa'i (= babhūva)
// bka' drin (= prasāda3) rgyal ba (= jina1) de yis (= saḥ) mdzad (= vidadhe) // 78.23 //

/ yongs ltung (= paricyuta1) de *yis (= saḥ) 'phral la ni (= sahasā) // rang gi (= sva3) stan nyid (=
āsana3 eva) thob par gyur (= āptavat1) // bsod nams (= puṇya-) mthu ni de dag gis (= prabhāva4)
// ltung ba'i (= cyuti-) mtshan nyid (= lakṣaṇa1) rab tu zhi (= praśānta-) // 78.24 //

/ ji srid 'tsho bar (= yāvajjīvaṃ) bde bar gshegs (= sugata3) // skyabs 'os (= śaraṇya3) **de la** (=
saḥ? v. note) skyabs su song (= śaraṇaṃ gata1) // bdag ni (= aham) rab thar (= atikrānta1) ces br-
jod nas (= ity uktvā) // de la (= tam) zhus nas (= āmantrya) mtho ris (= div3) song (= yayau) //
78.25 //

/ tum bu ru yi (= tumburu-) bu mo (= sutā3) mdzes (= lalita3) // zur phud lnga pa la (= pañ-
caśikha5) des (= saḥ) byin (= dadau) // dam pa nmams ni (= sat7) phan pa'i (= upakāra-) cha (=
kaṇa1) // bu lon bzhin du (= ṃavat) sems par byed (= kurute cintām) // 78.26 //

/ dge ba thob pas (= kuśālāvāpti⁴) brgya byin ni (= śakra⁷) // gsar du (= pratyagra-) 'khrungs pas (= udbhūta-) ya mtshan pa (= vismaya⁴) // dge slong gis (= bhikṣu⁴) dris (= pṛṣṭa¹) bcom ldan 'das (= bhagavat¹) // thams cad mkhyen pas (= sarvajña¹) der (= tān) gsungs pa (= abhāṣata) // 78.27 //

grong khyer (= pur⁸) mdzes ldan dag tu (= śobhāvātī⁸) sngon (= purā) // sa yi bdag po (= pṛthivīpati¹) **bskal bzang gis** (= *saubhāgya¹? v. note) // ston pa (= śāstr⁷) log par dang sel gyi (= krakucchanda⁷) // sku yi (= śārīra³) mchod rten (= stūpa³) rab tu byas (= akārayat) // 78.28 // / de yi (= tat-) bsod nams (= puṇya-) smon lam (= praṇidhāna-) rdzogs (= pūrṇa-) ldan pas (= yo-gāt) // rgyal po (= rājan¹) des ni (= saḥ) lha yi dbang nyid thob (= prāptaḥ tridaśeśvaratvam) / / 'byor pa (= vibhūti³) chos kyis bcings (= dharmānubaddha³) zhes (= iti) gsungs nas ni (= uktvā) // bcom ldan (= bhagavat¹) gsung ni (= vāṇī³) rab tu zhi bar gyur (= praśānti³ anayat) // 78.29 //

第79章 Mahendrasena

/ bud med (= strī⁴) **blo yi** (= *matī⁷, v. note) srin mo mams kyis (= rākṣasī⁴) blo gros (= *matī, v. note) rmongs byas shing (= vimohita-) // bde ba (= sukha-) 'dod pa nyid kyis (= vañchā⁴ eva) yid ni (= manas⁷) nor la (= vitta-) zhugs gyur pa (= pravṛtta-) // skyes bu (= puruṣa⁷) gang zhig (= ye) rab zhi (= praśama³) dang bral (= vinā) zhi bar mi bgrod pa (= na śamaṃ gacchanti) // **de de** (= *te *te, v. note) nges par (= nāma) '**phral la** (= sahasā, v. note) nyon mongs dag tu (= kleśa³?) ltung bar 'gyur (= patanti) // 79.1 //

/ gang gis na (= yaḥ) tshod (= vayas⁷) phyed dag ni (= ardha⁸) // thos pa brjod cing (= śrutādhyāyin¹) tshangs spyod (= brahmacarya³) spyad (= cacāra) // bram ze (= brāhmaṇa¹) 'tsho ba bde (= jīvaśarman¹) zhes pa (= abhidha¹) // mnyan yod du ni (= śrāvastī⁸) sngon (= pūrvam) byung gyur (= abhavat) // 79.2 //

/ mdza' bas (= sneha⁶) gnyen gyis (= bandhu⁴) gsol btab pa'i (= arthita¹) // **rgan po** (= jarā-?) sma ra (= śmaśru¹) khra bo (= śabala-) de (= saḥ) // chos kyi lam gyi (= dharmamārga-) ngo dag tu (= anurodha⁴) // bud med (= dāra-) rab tu bzung bar byas (= saṃgrahaṃ vidadhe) // 79.3 //

/ longs spyod (= sambhoga-) gsar pa la (= nava-) chags (= lubdha⁷) de'i (= tasya) // chung ma (= patnī¹) g.yo ldan ma (= taralikā¹) zhes pa (= nāma) // dar la bab cing (= taruṇa¹) mig g.yo ma (= taralekṣaṇa¹) // shin tu yid 'ong nyid du (= atidayita¹) gyur (= abhavat) // 79.4 //

/ de ni (= tasyāḥ) de la (= tasmin) *rims (= jvara-) bzhin du (= upama⁸) // shin tu (= sutarām) sred pa min par (= aruci¹) gyur (= abhūt) // bud med (= yoṣit¹) mi gus la (= abhakta-) chags shing (= rakta¹) // yang dag chags la (= saṃsakta-) chags bral (= virakta¹) nyid (= eva) // 79.5 // / des (= sā) bsams (= acintayat) **kun tu mi 'phrogs pa'i** (= *anāhārya, v. note) // rga bas (= jarā-) skra dkar ldan pa'i (= śāraśīroruha¹) khyo (= pati¹) // bdag gi (= mama) lang tsho'i (= yau-

vana-) dregs (= darpa8) 'di la (= asmin) // bsod nams min pas (= apuṅya-) nye bar gnas (= upanata1) // 79.6 //

/ rgan pos (= vṛddha7) gzhon nu ma (= taruṅī-) spyod pa (= bhoga1) // lus ni nyams pa (= śārīrakṣaya-) go byed dag (= sūcaka1) // rga bas (= jarā4) skra nas bzung byas te (= keśagraha4) // mnyes gshin gyis ni (= vātsalya4) zlog pa bzhin (= vāryate) // 79.7 //

/ rgan po (= sthavira1) dal gyis (= śanaiḥ) cung zad ni (= kiṃcit) // 'khums shing (= saṃkoca-) sgu bor (= kuṭīla1) rab gyur pa (= prayāti, v. note) // sa la (= avani8) lang tsho'i (= yauvana-) nor bu ni (= maṇi3) // stor ba (= hārita3) 'tshol bar byed pa (= vīkṣamāṇa1) bzhin (= iva) // 79.8 //

/ rgan po (= vṛddha4) blo ldan ma yin pa (= adhīmat4) // 'jig rten pha rol (= paraloka-) don (= artha3) shes pas (= *jñena, v. note) // gzhan gyi longs spyod la (= parabhoga-) sbyar (= praṇayin1) gang (= tat-?, v. note) // de nyid (= tad eva) bdag gis (= aham) rab tu bya (= karomi) // 79.9 //

/ 'di ni (= asmin) khyim nang (= antargṛha-) gnas pa'i tshe (= gata4) // rkun po'i (= caura-) 'dod ldan dang (= kāmin4) mdza' bas (= preman-) // brtse med (= nirdaya-) longs spyod (= saṃbhoga-) ma bsdams pa (= nirargala-) // bde ba (= sukha3) bdag gis (= mayā) spyod mi nus (= aśakya1) // 79.10 //

/ zhes bsams (= iti saṃcintya) rigs bzang (= ābhijātya-) rjes mthun zhing (= anukārin1) // ngo tsha ldan pa (= lajjamāna1) bzhin du (= iva) des (= sā) // dul ba yis ni (= vinayāt) mngon phyogs te (= abhyetya) // dal gyis (= śanaiḥ) bdag po la (= pati3) smras pa (= abhāṣata) // 79.11 //

/ bya med (= nirvyāpāra-) bde ba 'tshol byed pa (= sukhaiṣin4) // khyod ni (= bhavat4) khyim du chags pa yis (= gṛhasakta4) // bzod par dka' ba'i (= duḥsaha1) dbul po nyid (= dāridrya1) // khyod kyi (= ?) lag pas (= hasta4) drangs nas (= ākṛṣya) blangs (= ānīta1) // 79.12 //

/ gang zhid (= yasya) rtsom pa la (= udyoga-) sdang zhing (= dveṣin7) // drag po'i (= tīvra1) snyom las dag la (= ālasya1) dga' (= vallabha1) // rab mang (= bahu-) 'god pa'i (= vyaya-) rgyud ldan pa'i (= pravāhārha3) // khyim na gnas pa (= vivāha3) des (= saḥ) ci byed (= kiṃ karoti) // 79.13 //

/ gang du (= yatra) khyim bdag (= gṛhapatī1) snyom las las (= ālasya6) // khyim gyi zur ni (= gṛhakoṇa3) mi (= na) gtong ba (= muñcati) // der ni (= tatra) bud med (= aṅganā1) rmongs pa mams (= mugdha1) // nor sgrub slad du (= dhanārjana5) 'byung ngam ci (= niryāntu kim) // 79.14 //

/ gang na (= yatra) skyes pa (= puruṣa1) spro ldan pas (= sotsāha1) // phyi yi (= bahis) tha snyad la (= vyavahāra-) dga' zhing (= rati1) // bud med (= strī1) khyim gyi (= gṛha-) bya bar chags (= vyāpārasakta1) // de na (= tatra) don (= artha-) kun (= sarva1) phun sum tshogs (= saṃpad1) // 79.15 //

/ las dang bral ba rnam kyi (= viratakarman⁷) khyim ni (= gr̥ha¹) dga' ston (= utsava¹) longs
spyod (= bhoga-) nyams gyur cing (= bhagna-) // rgyan med (= abhūṣaṇa¹) gos med (= anam-
bara¹) bud med dag ni (= aṅgana¹) zur phug (= koṇa-) dri ma can na (= malina-) zhen (= līna-) /
/ khri dang (= śayana-) mal stan (= āsana¹) rnam par nyams shing (= viśiṛṇa-) chu snod chag pa'i
(= sphuṭitavāridhānī-) **sgra dang ldan** (= ghaṭa? v. note) // 'bangs med (= adāsa¹) yo byad med
cing (= anupaskara¹) yun ring (= cira-) zho srub (= mantha-) sgra ni (= svana¹) rdzogs par 'gyur
(= nivṛtta-) // 79.16 //

/ de yis (= tayā) de (= iti) brjod (= uktaḥ) bram ze (= vipra¹) de (= saḥ) // nor la (= draviṇa-)
mngon du phyogs te (= unmukha¹) song (= pratasthe) // bud med kyis ni (= yoṣit-) dbang byas
rnam (= vaśīkṛta¹) // yul gyi (= viṣaya-) g.yang sa dag tu (= śvabhra⁸) ltung (= patanti) // 79.17
//

/ de yis (= saḥ) nor 'dzin (= vasudhā³) rgya mtsho'i mthar (= sāgarānta³) // 'khyams nas (=
bhrāntvā) sbyin pa (= parigraha¹) thob gyur te (= labdha-) // gser dang gos ni (= kanakāmbara¹)
rdzogs gyur pas (= saṃpūrṇa-) // dus kyis (= kālena) rang gi grong khyer (= svapurī³) song (=
prāpa) // 79.18 //

/ de nas (= atha) khyim 'dod (= gr̥hotkaṅṭhā-) tshogs kyis (= utkara-) de (= saḥ) // song ba (=
ākṛānta¹) grong mtha'i (= purīparyānta-) nags tshal du (= kānana⁸) // chom rkun pa yis (=
dasyu⁴) bcom gyur nas (= muṣita¹) // lus tsam (= śarīramātra-) lhag ma nyid du (= śeṣa¹) gyur
(= abhūt) // 79.19 //

/ bde ba (= sukha-) don gnyer (= arthin⁴) nus pa yis (= sāmārthya⁴) // don med (= anartha-) nor
ni (= artha¹) nyer bsgrubs (= upārjita¹) kyang (= api) // mya ngam chu yi (= maruvāri-) thigs pa
bzhin (= kaṅāyita³) // byed po (= dhātṛ⁷) bzhed pa min pas (= anicchā⁴) byed (= karoti) // 79.20
//

/ des (= saḥ) bsams (= acintayat) kye ma (= aho) 'bad pa yis (= yatna⁴) // bdag gis (= mayā) nor
ni (= vitta¹) bsgrubs gyur (= arjita¹) kyang (= api) // bdag ni (= me) skal dang mi ldan pas (= ab-
hāgyayoga⁶) // rmi lam mthong dang (= svapnadarśana-) mtshungs par gyur (= tulyatām yāta¹)
// 79.21 //

/ nor ni (= dhana-) don gnyer (= arthin⁷) chung ma yi (= patnī⁷) // gan du (= antika³) lag stong
(= śūnyapāṇi¹) bdag (= aham) phyin na (= prāpya) // smad pa (= avamāna-) drag po'i (= ugra-)
dug ldan pa'i (= viṣa⁴) // tshig rtsub brjod pas (= paruṣabhāṣita⁴) bdag mi 'tsho (= na jīvāmi) //
79.22 //

/ de slad (= tasmāt) bdag ni (= me) 'di nyid du (= ihaiva) // 'phral la (= sadyas) zhags pas (=
pāśa⁴) bcings pa (= udbandhana¹) phan (= hita¹) // dbul ba'i (= dāridrya-) nyer 'tshe (= upadra-
va-) drag po *yi (= krūra⁸, v. note) // khyim du (= gr̥ha⁸) bud med mtshon (= strīśāstra³) mi
bzod (= na sahe) // 79.23 //

/ ces bsams (= iti saṃcintya) de yis (= saḥ) 'khri shing gi (= latā-) // zhags pa dag ni (= pāśa3) mgrin par (= kaṅṭha8) bkod (= nyaveśayat) // nyon mongs drag pos (= tīvrakleśa-) nyen mams *kyi (= viṣaṇṇa7) // gnyen dang phrad pa (= bandhusaṃgama1) 'chi ba (= nidhana1) yin // 79.24 //

/ skabs der (= atrāntare) bcom ldan (= bhagavat1) brtse ba yi (= kṛpā-) // rgya mtsho (= sindhu1) 'byung po la dgongs pa (= bhūtabhāvana1) // thams cad mkhyen pas (= sarvajña1) de yi ni (= asya) // sdug bsngal (= duḥkha1) shes nas (= jñātvā) nags su (= vana3) byon (= āyayau) // 79.25 //

/ de nas (= atha) de yis (= tena) gnyis skyes ni (= dvija1) // brtse bas (= dayā4) dbugs phyung (= āśvāsita1) zhags pa (= pāśa3) btang (= tyaktvā) // de yis (= tad-) byin pa'i (= datta3) gter (= nidhi3) blangs nas (= ādāya) // de la (= tam) phyag 'tshal (= praṇamya) khyim du (= gṛha3) song (= yayau) // 79.26 //

/ de yi (= tasya) chung ma (= bhāryā1) nor gyis (= dhana4) kyang (= api) // rjes su mthun pa nyid ma gyur (= anukūlatāṃ na jagāma) // gzhan gyi reg pa la (= parasamsparsā-) chags pa'i (= rāgin1) // bud med (= strī1) nor gyis (= artha4) tshim mi 'gyur (= na tuṣyanti) // 79.27 //

/ longs spyod (= bhoga8) rtsom pa che la (= mahārambha-) yang (= api) // dus kyis (= kālena) yid ni chags bral (= udvignamānasa1) des (= saḥ) // *bsams pa (= acintayat) kye ma (= aho) 'khor ba na (= saṃsāra8) // de nyid du na (= tattvatas) bde ba med (= nāsti sukham) // 79.28 //

/ dbul (= dāridrya-) dang mtshungs pa'i (= tulya1) sdug bsngal (= duḥkha1) ci zhig (= kim) yod (= asti) // de bas kyang ni (= tato 'pi) nor bsgrub (= dhanārjana1) rab sdug bsngal (= duḥkhatarā1) // nor gyi (= dhana-) longs spyod (= upabhoga1) bde ba'i (= sukha-) chas (= leśa-) bsgos pa (= digdha1) // gnas dang gnas su (= pade pade) sdug bsngal brgya phrag (= duḥkhaśa-ta3) skyed (= sūte) // 79.29 //

/ de ltar (= iti) chags bral (= virakta1) rab bsams te (= cintayitvā) // rgyal byed tshal du (= je-takānana3) song nas (= gatvā) des (= saḥ) // srid pa *gcad slad (= bhavocchitti5) bcom ldan 'das (= bhagavat3) // ston pa la ni (= śāstr3) skyabs su song (= śaraṇaṃ yayau) // 79.30 //

/ de yi (= tasya) bsam pa (= āśaya3) bag la nyal (= sānuśaya3) // khams dang (= dhātu3) de bzhin (= tathā) 'gro (= gati3) mkhyen nas (= jñātvā) // chos kyi sman ni (= dharmabhaiṣajya3) bcom ldan 'das (= bhagavat1) // srid pa'i nad kyi (= bhavaroga-) sman pas (= bhiṣaj1) byin (= dadau) // 79.31 //

/ bden mthong (= dr̥ṣṭasatya) de yis (= saḥ) rab byung ni (= pravrajyā3) // rab tu dang ba (= prasādinī3) yang dag blangs (= samādāya) // nyon mongs thams cad (= sarvakleśa-) *spang ba'i (= prahāṇa-) slad (= arha3, v. note) // dgra bcom nyid ni (= arhattva3) thob par gyur (= samavāptavat1) // 79.32 //

/ de yi (= tasya) grub pa (= siddhi3) rmad byung (= adbhuta3) de (= tām) // mthong nas (= dr̥ṣṭvā) ya mtshan (= vismaya4) rgyas pa yi (= vipula-) // dge slong gis (= bhikṣu4) dris (= pr̥ṣṭa1) bcom ldan gyis (= bhagavat1) // de yi (= tad-) sngon byung (= vṛttānta3) rab gsungs pa (= abhāṣata) // 79.33 //

/ bā rā ṇa sīr (= vārāṇasī8) mi yi dbang (= nareśvara1) // dbang chen (= mahendra-) sde ni (= senā1) sngon (= purā) byung ste (= abhūt) // sems can kun la (= sarvasattva8) gang *gi ni (= yasya) // brtse ba (= dayā1) mchog (= agrya1) nyid (= eva) yid 'ong (= dayita1) gyur (= abhavat) // 79.34 //

/ bdag po ngan pas (= kupati-) rab gdungs pa (= tāpita1) // yul gzhan nas (= paradeśa6) 'ongs (= ?) skye bo yis (= jana1) // lam gnas (= mārgastha3, v. note) gang zhig (= yam) grib bsil gyi (= chāyā-) // ljon pa (= vṛkṣa3) bzhin du (= iva) mngon phyogs (= abhyetya) bsten (= aśīśriyat) // 79.35 //

/ nam zhig (= kadācid) pha rol rgyal phran gyis (= pratisāmanta4) // grong khyer dag ni (= nagara1) bkag gyur (= niruddha-) kyang (= api) // khro med (= akrodha1) de yis (= saḥ) g.yul dag ni (= yuddha8) // thams cad (= sarva-) gsod la (= nidhana8) blo (= dhī3) ma bsgrubs (= na vidadhe) // 79.36 //

/ de ni (= tam) spro ba med (= nirutsāha3) shes nas (= vijñāya) // chags bral (= virakta1) blon po thams cad kyis (= sarvamantrin1) // sred pas (= lubdha1) nor ni (= draviṇa3) blangs byas te (= ādāya) // dgara bo dag la (= śatru-) brten par (= saṃśraya1) gyur (= babhūvuḥ) // 79.37 //

/ de nas (= atha) srog chags (= prāṇin-) gsod pa la (= vadha-) // yid byung (= udvega-) rgyal srid rab btang nas (= tyaktarājya1) /

/ sa yi (= saḥ) bdag po (= bhūpati1) bzod pa'i (= kṣamā-) zhing (= kṣetra3) // gcig pu (= ekākin1) ma tshor (= alakṣita1) nags su (= kānana3) song (= yayau) // 79.38 //

/ rje la gus (= prabhubhakti3) dang (= ca) sems can la (= sattva-) // ngo tsha (= lajjā3) rab btang (= samutsrjya) ngan pa yi (= durjana1) // blon po (= amātya1) chags pas (= lobha-) ldong nmams kyis (= andha1) // pha rol rgyal phran (= pratisāmanta3) rgyal por byas (= cakrire nṛpam) // 79.39 //

/ mi bdag (= nṛpati7) gsar pa'i (= nava7) ngos na ni (= pārśva8) // gsar pa nyid *dag (= nava1 eva, v. note) nmam par 'phel (= jajṛmbhire) // rang gi rje bo (= svasvāmin-) btang nmams la (= tyāgin7) // 'os pa min pa (= anacuitya1) 'ba' zhig (= kevala1) ldan (= lagna1) // 79.40 //

/ de dag (= te) sa bdag (= kṣītipati7) gsar pa yi (= nava7) // sgo srung nmams kyis (= dvārastha4) yun ring (= ciram) bkag (= vārita1) // skyo bas (= kheda6) bdag nyid la (= ātman3) mtshon te (= uddīśya) // shugs *phyung (= niḥśvasya) ngo tshas (= lajjita1) glu blangs pa (= jaguḥ) // 79.41 //

/ rje bo (= prabhu3) mnyes gshin (= peśala3) mnyed sla ba (= sulabha3) // dbang chen sde ni (= mahendrasena3) rab btang nas (= santyajya) // sdig can (= pāpa1) bdag cag (= vayam) gzhan sgo

na (= paradvār8) // dmod pa'i (= śāpa-) gdung ba (= tāpa3) bzod par byed (= sahāmahe) // 79.42
//

/ dpal ni skyed byed (= śrījanaka1) lha dang lha min mi rnam (= surāsuranara-) rin chen (= ratna-) tshogs kyis (= utkara1) rgyas par byed (= vyākīrṇa-) // chu gter (= payasām nidhi1) dri med (= svaccha1) shin tu rgya che (= pṛthutara1) de ni (= saḥ) khog pa (= āśaya4) stong pa (= śūnya-) khyod kyis (= tvayā) btang (= tyakta1) // da lta (= adhunā) bdag ngan (= kupati7) sgo la (= dvāra8) brten cing (= ālambase) gyen du phyogs (= unmukha-) **thob** (= nīca?, v. note) rmongs pa'i (= mūrka2) dung dag (= śaṅka2) kye (= he) // kha la (= mukha1) brlang pos (= khara4) phud byas (= phutkr̥ta) cho nge drag po ci zhig la sgrog (= kim ākrandasi) mi smrar 'dug (= tūṣṇīm āssva) // 79.43 //

/ de ltar (= iti) rab gdung (= śocat7) blon po rnam (= mantrin7) // rgyal srid gzar pa'i (= navarājya-) tsha gdung la (= ātāpa8) // dbang chen sde yi (= mahendrasena-) zla ba ni (= candra7) // rab tu blta bar (= saṃdarśana8) 'dod par (= sprhā1) gyur (= abhavat) // 79.44 //

/ skabs der (= asminn avasare) rgyal po (= rājan7) zhi ba yi (= śama-) // dga' tshal (= ārāma-) nags na (= vana-) gnas pa dang (= sthiti7) // nye bar (= samīpam) bram ze (= brāhmaṇa1) slong ba po (= arthin1) // ko'u shi ka (= kauśika1) zhes pa (= nāma) 'ongs (= samāyayau) // 79.45 //

/ 'bras bu rtsa bas (= phalamūla4) sa bdag gis (= mahābhuj4) // mgron byas (= kṛtātithya1) ngal bsos (= viśrānta1) de la ni (= saḥ) // **de yi** (= tad-, v. note) 'ong ba'i (= āgama-) rgyu mtshan dag (= kāraṇa3) // dul bas (= vinayāt) dris pas (= pṛṣṭa1) rab smras pa (= provāca) // 79.46 //

/ slong ba'i (= arthin-) tshogs kyi (= sārtha-) kun rtog gi (= saṃkalpa-) // 'bras bu che ldan (= mahāphala3) dpag bsam shing (= kalpavṛkṣa-) // mi bdag (= nṛpa3) dbang chen sde la (= mahendrasena3) bdag ([= gacchāmi]) // dbul ba yis ni (= dāridrya6) slong du (= yācitum) 'gro (= gacchāmi) // 79.47 //

/ de thos (= etad ākarṇya) mi bdag (= nṛpati1) sdug bsngal dang // ldan pas (= duḥkhita1) de la (= tam) rab smras pa (= abhāṣata) // **bram ze** (= brahman2) **nga ni** (= aham) **dbang chen sde** (= mahendrasena1) // **dpal dang** (= śrī4) **bral bas** (= virahita3) **bdag smad do** (= dhiṅ mām) // 79.48 //

/ slong ba (= arthin1) khyod ni (= tvam) phyir phyogs las (= vaimukhya6) // gang la (= yasya) gdung ba (= saṃtāpa3) ster du (= dātum) 'ongs (= āgata1) // **sgrub byed** (= vidhi4) **phyin ci log las ni** (= viparīta4) // **phyin ci log nyid** (= viparītatā3) **bdag gis** (= aham) **thob** (= nīta1) // 79.49 //

/ gang *gis (= yaḥ) re ba (= āśā-) nyams pa yi (= bhaṅga-) // slong ba'i (= arthin7) bzhin (= mukha) log (= parimlāna3) mthong gyur pa (= paśyati) // shing skam (= śuṣkavṛkṣa-) lta bu (= upama7) bdag gi (= me) lus (= vapus4) // 'bras bu med pa dag gis (= niṣphala4) ci (= kim) // 79.50 //

/ zhes pa (= iti) rgyal po'i tshig (= rājavacas³) thos nas (= śrutvā) // rdo bas (= śīrā-) bsnun (= āhata¹) bzhin (= iva) gnyis skyes ni (= dvija¹) // re thag chad pas (= chinmanoratha¹) yun ring na (= cireṇa) // 'du shes (= saṃjñā³) thob nas (= āsādyā) rab smras pa (= abravīt) // 79.51 //
 / bdag la (= mama) skal ba med pa yis (= abhāgya⁴) // sa skyong (= bhūpāla²) khyod kyis (= bhavat¹) 'byor pa (= vibhava-) spangs (= varjita¹) // gtong ba (= dātṛ¹) khyod ltar (= tvadvidha¹) rnyed sla ba (= sulabha¹) // 'jig rten du ni (= bhuvana⁸) ga la (= kutas) rnyed (= labhyate) // 79.52 //

/ chog shes (= saṃtoṣa-) rgyan ldan (= ābharāṇa⁷) khyod (= te) mdzes pa (= śobhā¹) // rgyal srid dag las (= rājya⁶) shin tu lhag (= abhyadhika¹) // gang zhig (= yeṣām) mdza' bo (= āśraya¹) gzhan (= anya¹) med pa'i (= asti na) // slong mams (= arthin⁷) bsod nams med pa nyid (= aṇya¹) // 79.53 //

/ dpal mo (= lakṣmī⁷) g.yo ba nyid kyis (= cañcalatā⁴) 'phral la (= sahasā) nges par (= ?) btang gyur pa'i (= tyakta⁷) // rin chen 'byung gnas dag ni (= ratnākara⁷) bag kyang (= manāg api) dman par gyur pa (= hīnatā¹) med (= abhūt) // dpal ni (= lakṣmī¹) **khyi** (= śunī¹) **bzhin** (= iva) mi bsrn (= khala-) brkam chags (= lubdha-) khyim na (= gr̥ha-) dman ldan zhing (= avasanna¹) // da dung (= adyāpi) skyes bu dam pa la (= satpuruṣa-) brten (= saṃśraya-) dga' bar yongs ma gyur (= na harṣam eti) // 79.54 //

/ zhes (= iti) brjod (= uktvā) mi bdag la (= nṛpa³) gsol nas (= āmantrya) // bsam bral (= nairāśya-) dug gis (= viṣa-) gzir ba (= ātura¹) de (= saḥ) // '**bras bus** (= phala-) '**tsho ba'i** (= vṛtti-) **shing** (= taru-) **bcad pa'i** (= cheda-) // mya ngan las ni (= viṣāda⁶) 'chi bar brtson (= martum udyayau) // 79.55 //

/ de yi (= tasya) mgrin par (= kaṇṭha-) song ba yi (= gata³) // zhags pa (= pāśa³) sa bdag (= bhūpati¹) de yis (= saḥ) bsal (= apanīya) // snying rje'i rgya mtsho (= karuṇāsindhu¹) slong mams kyis (= arthin⁷) // mdza' gcugs (= snigdhatara¹) gnyen gyis (= bandhu¹) de la (= tam) smras (= ūce) // 79.56 //

/ bdag chings (= baddhvā) sa yi bdag po ni (= bhūmipati⁷) // mi mthun phyogs kyis (= pratipakṣa⁷) grong khyer (= purī³) khyer (= naya) // khyod la (= te) bdag ni (= mad-) gsod 'dod (= vadhaiṣin¹) des (= saḥ) // mngon 'dod las (= abhimata-) lhag (= adhika³) nor (= vitta³) ster 'gyur (= dāsyati) // 79.57 //

/ de skad (= iti) sa yi bdag pos (= pārthivendra⁴) brjod (= ukta¹) // ngo *tshar gyur (= lajjamāna¹) bzhin (= iva) gnyis skyes kyis (= dvija¹) // slong ba'i gnyen (= arthibāndhava³) de (= tam) bcings nas ni (= baddhvā) // nor la (= dhana-) sred pas (= tṛṣṇā⁴) rab tu khyer (= nināya) // 79.58 //

/ sa bdag (= mahīpati3) de yis (= tena) khrid pa (= ānīta3) de (= tam) // pha rol rgyal phran dag
gis (= pratisāmanta1) mthong (= dṛṣṭvā) // de yi (= tad-) byung tshul (= vṛttānta3) thos gyur nas
(= vijñāya) // ya mtshan gyur pas (= vismita1) de la (= tam) bsngags (= praśāśaṃsa) // 79.59 //

/ bram ze la ni (= vipra5) nor (= dhana3) byin nas (= dattvā) // rang gi gnas su (= svapada8 or
*svasthāna8, v. note) sa bdag (= pṛthivīpathi3 or *bhūmipati1) de (= tam or *saḥ) // zhabs la (=
caraṇa-) cod pan gyis (= mukuta1) gtugs te (= ālīna-) / dang bar byas nas (= prasādyā) de yis (=
saḥ) bkod (= nyaveśayat) // 79.60 //

/ mi yi bdag po (= manujapati1) dbang chen sde ni (= mahendrasena1) nga (= aham) nyid de //
gang *'di (= ya eṣaḥ) slong ba (= arthin1) ko'u shi ka'i (= kauśika1) nor dag (= dhana-) bsgrubs
(= vihita1) // slar yang (= punar api) de nyid kho na (= sa eva) 'tsho ba bde ba'o (= jīvaśarman1)
// zhes pa'i (= iti) spyod pa (= carita1) rgyal bas (= jina4) rang la (= sva1) dper brjod do (=
udāhṛta1) // 79.61 //

第二部

Avadānaśataka の餓鬼女の二つの話の再話文献、 SMRAM 第30章とRAM 第15章の校定・和訳

Avadānaśataka (略号 Avś) の餓鬼品第五には、餓鬼女の話として第44章と第47章があり、その二話に対して、韻文で再話を行った梵文テキストがそれぞれ梵文説話集 Ratnāvadānamālā (略号 RAM) ならびに Subhāṣitamahāratnāvadānamālā (略号 SMRAM) の中にある。Avś 第47章『生まれつき盲目の〔餓鬼〕女』の再話テキストが SMRAM の第30章 (略号 S30) であり、Avś 第44章『糞の鉢壺』の再話テキストが RAM の第15章 (略号 R15) である。それら二つのアヴァダナ・マーラーの章を校定・和訳しつつ、原話の Avś との比較を試みたい。S30とR15のどちらも、学界で初めての梵文テキスト校定・翻訳である。

第1節 SMRAM 第30章 Jātyandhapretikāvadāna の梵文と訳

以下にまず SMRAM 第30章 Jātyandhapretikāvadāna の梵文を挙げ、続いて第30章の和訳 (vv.4-113) を挙げる。

SMRAM 30: Jātyandhapretikā

[233b3] athāśoko mahīpālo mudito [4] vihitāñjaliḥ /
upaguptaṃ yatiṃ natvā punar evam abhāṣata // 1
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam /
tad yathā guruṇādiṣṭaṃ tathādeṣṭuṃ ca me 'rhati // 2
[5] iti samprārthitaṃ rājñā śrutvā so 'rhan samāhitaḥ /
upagupto narendraṃ taṃ samālokyaivam ādiśat // 3
sādhu śṛṇu mahārāja yathā me guruṇoditam /
tathāhaṃ te [6] [pra]vakṣyāmi śrutvā cābhy anumodaya // 4
tadyathā sa mahābuddho bhagavāñ chākyapuṅgavaḥ /
sarvajñaḥ sugataḥ śāstā nātho dharmādhipo jinaḥ // 5
ekasmin samaye tatra [7] śrāvastyāṃ jetakāśrame /
vihāre dharmam ādiśya vijahāra sasāmghikaḥ // 6
tadaikasmin dine tatra yatir nandaka ātmavit /
bhikṣārthaṃ pātram ādāya śrāvastyāṃ sa[8]mupācarat // 7
tatra taṃ samupāyātaṃ drṣṭvaikaḥ sumatir grhī /

āmantryā sāñjalir natvā svagrhe samnyaveśayat // 8
 tatra gataḥ sa taddattam pādyam ādāya samcaran /
 [234a] tatprajñaptāsane śuddhe samāśrayat samāhitāḥ // 9
 dr̥ṣṭvāsanāsamāsīnam nandakam sa gr̥hī mudā /
 abhyarhya supranītena bhojanenābhyatarpayat // 10
 tatas tam tṛptitam dr̥ṣṭvā sa [2]gr̥hasthaḥ pramoditaḥ /
 sāñjaliḥ praṇatim kṛtvā purataḥ samupāśrayat // 11
 tatra sa nandako bhikṣur dr̥ṣṭvā tam śuddhitāśayam /
 sa śivam dharmam ādiśya *samutthāya vini[3]ryayau // 12
 tataḥ sa nandako bhikṣuḥ śrāvastyā nirgato vane /
 vivikte dhyānasamrakto vṛkṣamūlam upāśrayat // 13
 tadā tatra caranty ekā jātyandhā pretikā kṛśā /
 svake[4]śaromasamchannā sūcīmukhā mahodarā /
 dagdhasthūṇopamā raukṣyā durgandhā duritākṛtiḥ // 14
 kākair gr̥dhraiḥ śṛgālais ca śvabhiś cāpy abhyupadrutā /
 marmābhighātaduḥ[5]khārtā tṛṣṇāgniparītāpitā // 15
 ārtasvaravilāpena krāntāni parikheditā /
 nandakasya yates tasya samṁukhopāsarac chanaiḥ // 16
 tāni pretīm samṁukhā[6]yātām dr̥ṣṭvā sa nandako yatīḥ /
 suciram samnirīkṣyaiva paryapṛcchat purākṛtam // 17
 bhagini kiṁ tvayā pāpam tādr̥śam prakṛtam purā /
 yenaivamvidhaduḥkhāni [7] bhuktvātra bhramase 'dhunā // 18
 iti tenoditam śrutvā sā pretī tadupāśrītā /
 nandakam tam yatim natvā śanair evam abhāṣata // 19
 bhadanta kim aham vakṣye yat pāpam [8] prakṛtam mayā /
 āditye hi samudyāte kim andhām pṛcchate pathaḥ // 20
 [ya]d bhagavāñ jagacchāstā sarvajño 'dvayavāg jinaḥ /
 sarvasattvāhitārthena samutpa[234b]nna ihādhunā // 21
 tat tam eva jagannātham paripṛccha mahāmate /
 yan mayā prakṛtam pāpam sa śāstā *te tam ādiśet // 22
 yac chāstrā tat samākhyātam śrutvā 'nye pi ma[2]hājanāḥ /
 duḥkhābhitrāsītāḥ pāpād viraṁsyatīti niścayam // 23
 tayaitat kathitam śrutvā sa nandakaḥ prabodhitaḥ /
 tathety uktvā samutthāya prāgāj je[3]tāśrame drutam // 24
 tatropetya vihāre sa praviṣṭas tam munīśvaram /

dr̥ṣṭvā sabhāsthitaṃ dharmadīśantaṃ samupācarat // 25
 taṃ dr̥ṣṭvā samupāyātaṃ bhagavān sa munīśva[4]raḥ /
 smitasuprasannāsyah samālokyai[3]vam abravīt // 26
 svāgataṃ nandakaihi tvam kuta āyāsi sāmpratam /
 kimarthaṃ hetunā kena tad vadasva yad īkṣitam // 27
 ity ā[5]diṣṭe munīndreṇa nandakaḥ sa purogataḥ /
 sāmjalīś caraṇau śāstuh prañatvaivaṃ nyavedayat // 28
 bhagavan nātha sarvajña vijānīyād bhavān api /
 adya divāvi[6]hārārthaṃ gacchāmi nirjane vane // 29
 tatra dhyānasukhaṃ bhoktuṃ vṛkṣamūlam upāśritaḥ /
 ekākī svāsanāsīnaḥ samtiṣṭhe 'haṃ samāhitaḥ // 30
 tadā tatrāgatāṃ pretīm e[7]kām bībhatsarūpikām /
 dagdhasthūṇopamāṃ kālām asthyantravad *ucchritām // 31
 sūcīmukhām mahākāyām viśuṣkakaṇṭhatālukām /
 nagnām svaromasamchannām jātyandhām du[8]ritāśrayām // 32
 kṣutpipāsābhidagdhāṅgīm bhramantīm digvimohinīm /
 abhidrutāṃ śvabhiḥ kākair gṛdhraiḥ krūraiś ca jambūkaiḥ // 33
 ārtasvaravirāvantiṃ krāntīm atiduh[235a]khinīm /
 durgandhavāhinīm ghorāṃ paśyāmi mandagāminīm // 34
 kiṃ tayā prakṛtaṃ pāpaṃ sughoraṃ dāruṇaṃ purā /
 yenaivaṃ sā mahad duḥkhaṃ bhujantī bhramate vane // 35
 tad bhavañ jaga[2]tām śāstā yat tayā prakṛtaṃ purā /
 tat sarvaṃ samupādīśya prabodhayatu mām iha // 36
 iti tenoditaṃ śrutvā bhagavān sa munīśvaraḥ /
 tāṃ sabhāṃ nandakaṃ taṃ ca samālokyai[3]vam ādiśat // 37
 nandaka sā mahāghorapāpinī pretikā kudhīḥ /
 icchasi tatkr̥taṃ śrotuṃ śṛṇu vakṣyāmi sāmpratam // 38
 tadyathābhūt purā śāstā kāśyapo nāma sarvavit /
 [4] dharmarājo jagannāthas tathāgato munīśvaraḥ // 39
 vārāṇasyāṃ sa sambuddho mṛgadāve jināśrame /
 sarvasattvahitārthena vijahāra sasāṅghikaḥ // 40
 tasminn avasare [5] tatra vārāṇasyāṃ abhūt satī /
 śreṣṭhisutā subhadrāṅgī saddharmaguṇavāñchinī // 41
 sā tasya trijagacchāstuh kāśyapasya mahāmuneḥ /
 satkr̥tya śraddhayā dharmam śru[6]tvā nityam upāśrayat // 42

tatsaddharmāmṛtaṃ pītvā bhāvinī sā prabodhitā /
 saṃsāraviratotsāhā nirvāṇasukhalālasā // 43
 saṃbuddhaśāsane gatvā śraddhayā śaraṇaṃ [7] gatā /
 pravrajya saṃvaram dhṛtvā cacāra brahmacārikām // 44
 tad dṛṣtvā jñātibhis tasyā bhikṣuṇīvarṣakas tadā /
 kārito muditaiḥ sarvaiḥ sasuhṛṇmitrabāndhavaiḥ // 45
 [8] tatra sā bhikṣuṇī śaikṣāśaikṣībhīḥ saha moditā /
 samādhidhāraṇīvidyādhyayanābhiratācarat // 46
 tataḥ sā yauvanī kāntā kleśānutāpitāsāyā /
 śikṣā[235b]saṃvaram utsṛjya cacāra gṛhisamratā // 47
 tatas tasyāḥ krameṇaivam pramadāyāḥ pramādataḥ /
 carantyā madamāninyāḥ śikṣāsaithilyam āyayau // 48
 tataḥ sā [2]pramadā nārī durācārānurāginī /
 satyadharmaparibhraṣṭā śāsanadūṣakābhavat // 49
 tatas tābhiḥ suśīlābhir bhikṣuṇībhiḥ samīkṣya sā /
 duḥśīleti prati[3]kṣipya saṃghān niṣkāsitā balāt // 50
 tataḥ sā kupitā duṣṭā saddharmanindakā kudhīḥ /
 arhatām api sarveṣāṃ avarṇaṃ paryacārayat // 51
 dānapatigrhebhyo [4] 'pi pravṛttachandakāni ca /
 paribhāṣya yatīnāṃ sā nyavārayat samantataḥ // 52
 śīlavato 'rhatō bhikṣūn mahābhijñān yatīn api /
 dṛṣṭvaiva sahasā netre nimīlya [5] sā 'nyato 'carat // 53
 evaṃ sā durbhagā nārī duḥśīlā kleśabhāginī /
 triratnāni pratikṣipya cacāra śāsanād bahiḥ // 54
 tataḥ sā pāpinī duṣṭā ciraṃ rogābhipī[6]ditā /
 kāle mṛtyugatā pretaloke janmālabhat tataḥ // 55
 saiṣā hi pāpinī duṣṭā śāsanadūṣakā kudhīḥ /
 pretī jātyandhabhūtā ca carate kṣuttṛṣārditā // 56
 [7] yat tayā varṣakavitte mātsaryam bahulīkṛtam /
 etatpāpavipākena pretī bramati sādhunā // 57
 yac cāpi hi tayā śrāddhachandakam pratiṣedhitam /
 tena sā śvaśṛgālādi[8]krūrasattvair upadrutā // 58
 yat suśīlān yatīn dṛṣtvā tayā netre nimīlite /
 tena sā pāpinī duṣṭā jātyandhā bhavate 'dhunā // 59
 evaṃ nandaka saṃsāre yat karma prakṛtam [236a] svayam /

tat phalaṃ bhujyate nūnaṃ tenaiva na hi cāparaiḥ // 60
 abhuktaṃ kṣīyate naiva karma kvāpi kadācana /
 anyathāpi bhaven naiva kṛtakarmaphalaṃ kvacit // 61
 nāgnibhir dahyate karma [2] klidyate nodakair api /
 vāyubhiḥ śuśyate nāpi kṣīyate nāpi bhūmiṣu // 62
 śubhasya karmaṇaḥ pāke sukhattaiva sadā bhavet /
 kṛṣṇasya duḥkhataiva syād miśritasyāpi mi[3]śratā // 63
 evaṃ matvātra saṃsāre sarvadā sukhatēsubhiḥ /
 śubheṣv eva samādhāya caritavyaṃ samādarāt // 64
 ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvā te bhikṣavas tathā /
 satyam iti pra[4]tījñāya prābhyanandan prabodhitāḥ // 65
 tadā sa nandako bhikṣuḥ samupetya kṛtāñjaliḥ /
 bhagavantaṃ munīndraṃ taṃ natvaivaṃ prārthayat punaḥ // 66
 bhagavan sā kiyatkālaṃ pre[5]tī duḥkhāni bhokṣyate /
 kadā pretagater muktā sugatiṃ cāvrajiṣyati // 67
 etat sarvaṃ samākhyāya sarvāṃl lokān prabodhaya /
 śrutveme hi janāḥ sarve careyuḥ sarvadā śu[6]bhe // 68
 iti saṃprārthite tena nandakena sa sarvavit /
 bhagavāṃs taṃ samālokya nandakam evam abravīt // 69
 sādhu nandaka tatkarmamuktiṃ śrotuṃ yadīcchasi /
 śṛṇu cittam sa[7]mādhāya pravakṣyāmy atra sāmpratam // 70
 ṣaṣṭijanmasahasrāṇi jātyandhā sā bhramet sadā /
 kṣutpipāsābhisamṭaptā pretībhūtā durāśayā // 71
 tadante sātīduḥkhārtā smṛ[8]tiṃ labdhvānutāpitā /
 lokeśvaram anusmṛtvā vandiṣyati divānīsam // 72
 tataḥ sa bhagavān nāthas trailokādhipatīśvaraḥ /
 kṛpayā tāṃ samuddhartuṃ sahasā samupācāret // 73
 [236b] tatra tāṃ samupālokya sahasā sa kṛpānidhiḥ /
 prasrāvayen nadīṃ [ha]stād divyāmṛtapravāhinīm // 74
 tāṃ sravantiṃ samālokya sā pretī prativismitā /
 sahasā sa[2]mupāsṛtya yathecchayāmṛtaṃ pibet // 75
 tataḥ saṃparitṛptā sā paripuṣṭā śubhāśayā /
 nanditātīpraharṣantī vismitaivaṃ vicintayet // 76
 aho citram aho bha[3]draṃ jāyate yad ihādhunā /
 tad asya puruṣasyaiva prabhāvāt khalu nānyathā // 77

yad ayaṃ svayam ālokya kṛpayā samupāgataḥ /
 divyāmṛtābhisamṛptāṃ kṛtvā [4] mām avati drutam // 78
 yasyedr̥śī kṛpādr̥ṣṭiḥ sattveṣu svātmajeṣv iva /
 dhanyo 'yaṃ trijagannātho jayatu sarvadā bhava // 79
 kasya mātuḥ pitur loke svātmaje 'pīdr̥[5]śī dayā /
 tenāsya sadṛśaḥ ko 'pi lokanātho na vidyate // 80
 yenaivaṃ svayam ālokya pāliṭaṃ putravaj jagat /
 tad asya śaraṇaṃ gatvā bhajeyaṃ sarvadādarāt // 81
 iti [6] vicintya sā pretī kṛtāñjalih purogatā /
 tasya nāthasya pādābje praṇatvaiva mudāvadet // 82
 namas te bhagavan nātha bhavatāṃ śaraṇaṃ vraje /
 tad bhavān kṛpayālo[7]kya trātum arhati sarvadā // 83
 tvam eva hi jagannātho jagadbhartā jagatpatiḥ /
 jagadīśo jagacchāstā jayati tribhavālaye // 84
 nānyo me vidyate śāstā bhavā[8]n eva suhr̥d guruḥ /
 tasmān mām kṛpayālokya sanmārgē yoktum arhati // 85
 yac cāpi prakṛtaṃ pāpaṃ mayā mūdhena cetasā /
 tat sarvaṃ duṣkṛtaṃ nātha nāśaya tva[237a]m ihādhunā // 86
 adyāgreṇa jagannātha tavaiva śaraṇe sthitā /
 bhavatātra yathādiṣṭaṃ carīṣyāmi tathā sadā // 87
 iti me prārthanām śrutvā bhavāñ chāstā jagatprabhuḥ /
 kṛpayā [2] mām sadālokya bodhimārgē niyojaya // 88
 tvam eva hi jagallokaṃ svayam ālokya sarvataḥ /
 samuddhṛtya prayatnena prāpayasi sukhāvatīm // 89
 evaṃ mām bhagavān nātha kṛpayā[3]lokya sarvathā /
 samāśvāsya samuddhṛtya prāpayasva sukhāvatīm // 90
 ity evaṃ prārthite pretyā tayā śrutvā sa bodhirāt /
 pretikāṃ tāṃ samālokya punar evam upādīset // 91
 [4] sādhu bhadrāṃ sadā te 'stu cara śubhe samāhitā /
 triratnaṃ śaraṇaṃ gatvā bhajasva sarvadādarāt // 92
 tatas te maṅgalaṃ nityaṃ sarvatrāpi bhaved dhruvam /
 kramād bodhiṃ samāsādyā sa[5]mbuddhapadam āpnuyāḥ // 93
 ye buddhaśaraṇaṃ yānti na te gacchanti durgatim /
 kramān māragaṇāñ jivtvā samprayānti jinālayam // 94
 ye dharmāśaraṇaṃ yānti na te gacchanti durga[6]tim /

kramāt pāramitāḥ pūrya saṃprayānti sukhāvatīm // 95
 ye saṃghaśaraṇaṃ yānti na te gacchanti durgatim /
 kramāt bodhicariṃ dhṛtvā saṃyānti sadgatau sadā // 96
 i[7]ti matvā triratnānāṃ brahmāditribhavādhipāḥ /
 sarvalokādhipās cāpi bhajanti śaraṇaṃ gatāḥ // 97
 etatpunyānubhāvena sarvatra maṅgalaṃ sadā /
 bhūtaṃ bhavati trailokye [8] bhaviṣyati samantataḥ // 98
 dhruvaṃ vijñāya bhadratvaṃ triratnaṃ śaraṇaṃ gatā /
 satkṛtya śraddhayā nityaṃ smṛtvā bhaja samāhitā // 99
 tatas tvam pāpakaṃ deham imaṃ tyaktvāśu [237b] sadgatim /
 gatvā sadā sukhāny eva prabhokṣyasi nirantaram // 100
 tatrāpi tvam śubhe nityaṃ cariṣyasi samāhitā /
 tato bodhicariṃ dhṛtvā sukhāvatīm avāpnuyāḥ // 101
 [2] iti vijñāya bhadre tvam sukhāvatīm yadīcchasi /
 triratnasmaraṇaṃ kṛtvā bhaja nityaṃ samāhitā // 102
 ity ādiśya sa lokesas tato 'nyatra prabhāsayan /
 gato lo[3]kān samuddhṛtya sukhāvatīm punar vrajet // 103
 tataḥ sā pretikā smṛtvā triratnaṃ sarvadā tathā /
 mṛtā pretatanuṃ tyaktvā śuddhakāyā gamiṣyati // 104
 tadā sā *pāpato mu[4]ktvā lokesvaraprasādataḥ /
 parisuddhatrikāyā ca sukhāvatīm gamiṣyati // 105
 tan mātsaryaṃ mahatpāpamūlaṃ hetuṃ ca durgateḥ /
 matvā vihāya saddharṃe caritavyaṃ sukhārthibhiḥ // 106
 ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa śrutvā sarve sabhāśritāḥ /
 lokāḥ satyam iti [5] matvā prābhyanandan prabodhitāḥ // 107
 etan me guruṇādiṣṭaṃ śrutaṃ mayā tathocyate /
 evaṃ vijñāya mātsaryaṃ tyaktavyaṃ nṛpa sarvathā // 108
 yathepsitaṃ pradāta[6]vyam arthibhyo hitasādhanam /
 kiṃcid api na dātavyam ahite prārthitaṃ yadi // 109
 evaṃ rāja prajāś cāpi bodhayitvā prayatnataḥ /
 hitārthasaṃpradāne tvam ni[7]yojya pratipālaya // 110
 tena te sarvadā bhadrāṃ sarvatrāpi bhaved dhruvaṃ /
 kramād bodhiṃ ca saṃprāpya sambuddhapadam āpnuyāḥ // 111
 iti tenārhatādiṣṭaṃ śrutvāśo[8]kaḥ sa bhūpatiḥ /
 tatheti saṃpratijñāya prābhyanandat sapārṣadaḥ // 112

jātyandhakāyā avadānam etac
chṛṇvanti ye ye ca niśamayanti /
te sarva evaṃ pari[238a]śuddhakāyā
bhuktvā sukhaṃ yānti jinālaye 'nte // 113
iti jātyandhapretikāvadānaṃ samāptam // 30 //

以上のSMRAM第30章 Jātyandhapretikāvadāna の校定には前論文と同様、写本 NGMPP B101/3 を用いた。この唯一の写本を Ms. と表記する。第30章はその 233b3-238a にあたる。

Apparatus criticus

- 7c bhikṣārthaṃ] corr. : bhikṣārthāṃ Ms.
9a tatra gataḥ] metre!
12a bhikṣur] corr. : bhikṣu Ms.
12c sa] corr. : so Ms.
12d *samutthāya] ex conī : samutthā Ms.
14c saṃchannā] corr. : sachannā Ms.
14e raukṣyā] sic Ms. raukṣya = rūkṣya?
22d *te tam] ex conī : tattam Ms.
26b bhagavān] corr. : bhagavan Ms.
26c] One syllable is lacking. Read *taṃ smita-?
31d *ucchritāṃ] ex conī : vucchitrāṃ Ms. Cf. Avś, I, p. 268, l. 12, asthiyantravad **ucchritā**.
41a tasminn avasare] corr. : tasmid avasare Ms.
41b vārāṇasyām] corr. : vārāṇaśyām Ms.
43d lālasā] corr. : lālasī Ms.
45b varṣakas tadā] corr. : varṣako tadā Ms. Or read varṣako *yadā?
45d sasuhṛṇ°] corr. : sasasuhṛṇ° Ms.
48a krameṇaivaṃ] corr. : krameṇenaivaṃ Ms.
54b bhoginī] corr. : bhāginī Ms.
57b mātsaryaṃ] corr.: mātsarya Ms.
58c śvaśṛgālādi] corr. śvaśṛgārādi Ms.
59d bhavate] m.c. for bhavati.
60c bhaven] corr. : bharven Ms.
68b sarvāml] corr. : sarvāl Ms.

86c sarvaṃ] corr. : sarvaṃ me Ms. (metre!)

89d prāpayasi] metre!

91a prārthite] corr. : prārthitaṃ Ms.

92b cara śubhe] metre!

94b durgatim] corr. : durgati Ms.

96a saṃgha] corr. : saṃghe Ms.

96c bodhicaṛiṃ] corr. : bodhicaṛiṃ Ms. Cf. 101c; BHSD, p. 225.

98d samantataḥ] corr. : sarvantaḥ Ms.

104d śuddhakāyā] corr. : śuddhakāya Ms. Cf. RMA, TAKAHATA (1954), p. 385: nirmuktapātakāḥ sarve śuddhakāyā divaṃ yayuḥ // 61 //.

105a *pāpato] ex conii : pāpaṅgā Ms. Cf. RMA, TAKAHATA (1954), p. 468: pāpān muktvai (sic!) cyato (sic!) divaṃ // 24 //.

106a-d] This whole stanza is written in margin.

106b hetuṃ] corr. : hetu Ms.

107c iti] metre! (sa vipulā.)

113a-d] Metre: Indravajrā.

SMRAM 第30章『生まれつき盲目の「餓鬼」女のアヴァダーナ』和訳

vv.4-113

よろしい、大王よ、お聞きなさい。私が師から語られたとおりに、あなたに語りましょう。聞いて、喜びを得なさい。[4]

それはかくの如くです。かの偉大な仏・世尊・釈迦族の最勝者・一切智・善逝・師・庇護者・法王・勝者は、[5](#1)⁽⁶⁾ ある時、かのシュラーヴァスティーのジェータ林修行場の僧院において、法を教示し、僧団と共に住しておりました。[6]

その頃、或る日、ナンダカという名の自知者（悟りを得た者）の出家者が、乞食のために鉢を持ってシュラーヴァスティー [の街] に赴きました。[7](#2)

(6) 丸括弧の中の #1, #2, #3 ... というシャープ記号付きの数字は、Avs の paragraph 番号である。この paragraph 番号は SMRAM の内容との細かな比較がしやすくすることを意図して私がつけたものであり、ここでは #1 から始まっている。シャープ記号付きの数字で示される Avs のパラグラフが、SMRAM の角形括弧の詩節番号の箇所と内容的に相当していることを示す。もし Avs の相当箇所が SMRAM の複数の詩節にわたる場合には、その初めの詩節だけに記した。つまり一つのシャープ記号付きの数字が右横に付けられた SMRAM の詩節番号の箇所から、次のシャープ記号付きの数字が出てくる、その直前の詩節までの、その間のすべての数詩節（長い場合は数十詩節）にわたって、Avs の相当箇所が切れ目なく続いていることを示す。

そこにやって来た彼を見て、或る一人の賢い家長が挨拶し、合掌して頭を下げて、自分の家の中に導き入れました。[8] そこに行った彼は、その〔家長〕から与えられた洗足用の水を受けてから、歩いて (saṃcāraṇa)、心を散らすことなく、彼によって設けられた清らかな座席に腰を下ろしました。[9]

座席に坐ったナンダカを見て、喜んだその主人は、敬意を払って、最上等の食事で満腹させました。[10] そして満腹させられた彼を見て、その在家者は喜悦し、合掌し頭を下げて、〔彼の〕面前に進み出ました。[11] そこでかのナンダカ比丘は浄化された心をもつ彼を見て、めでたい法を説いてから、起ち上がって、〔都城の〕外に出ました。[12]

その後、かのナンダカ比丘はシュラーヴァステイー〔の都城〕から出ると、禪定を好む者として、人気のない林の中で樹の根元に腰を下ろしました。[13]

その時、その場所を徘徊するひとりの生まれつき盲目の餓鬼女が、痩せこけ、自分の髪と体毛に覆われ、針の〔穴の〕ような口と大きな腹をもち、まるで焼けた丸太のようであり、乾涸らびて細り、悪臭を発し、醜悪な姿で、[14](#3) 烏・禿鷹・ジャッカル・犬などに襲われ、体の最も痛い所を攻撃されて激痛に苦しみながら、渇きの火に焼かれ、[15] 苦悩の声をあげて泣き叫びながら、悲悩して、かの出家ナンダカの面前にゆっくり近づいて来ました。[16]

かの出家ナンダカは面前にやって来たその餓鬼女を見て、長い間見つめてから、前世の行いを尋ねました。[17](#4)

「姉よ、今これほどの苦しみを味わいながら彷徨っているとは、あなたはかつて一体どのような罪悪をなしたのですか。」[18]

このように彼が語った言葉を聞いて、彼に近づいたその餓鬼女は、かの出家ナンダカにおじぎをして、ゆっくり次のように語りました。[19](#5)

「尊師よ、私がなした罪悪をどうして私が語るでしょうか。太陽がすでに昇っているのに、あなたは どうして盲目の女に路を尋ねるのですか。[20] かの世尊・世間師・一切智・不二を説く方・勝者は、あらゆる生ける者の益のために、現在この世界にお生まれになっていますので、[21] それ故、大慧者よ、かの世界の庇護者にお尋ねしなさい。かの師は、私がなした罪悪をあなたに説いてくれるでしょう。[22] 師によって説かれたことを聞けば、他の大勢の人々も、苦を恐れ、必ず悪をやめるでしょう。」[23]

女がそのように語るのを聞いて、かのナンダカはもつとも思ひ、「そうします」と答えて、起ち上がって、急いでジェータ林修行場に行きました。[24](#6) その寺に着くと彼は中に入り、会堂に居て法を説かれているかの牟尼の王（仏）を見て、近づきました。[25]

かの牟尼の王・世尊は彼がやって来たのを見て、ほほえみ満足されたお顔で、見つめながら次のように話されました。[26](#7)

「いらっしゃい。ナンダカよ、よくおいでになられた。あなたは今来られたのはどうしてですか。何のために、何が原因なのか、見たことを話してごらんなさい。」[27]

牟尼の王にこのように命じられたかのナンダカは、前に進み出て、師の両足を頂礼し、合掌して次のように報じました。[28](#8)

「世尊、庇護者、一切智よ、あなたもすでにご存知でしょう。今日、昼間の休息のために私は人気のない林に行きました。[29] そこで禅定の安楽を味わうため、樹の根元に腰を下ろし、独り精神を集中して自分の座具に坐っておりました。[30] その時そこにひとりの餓鬼女がやって来ました。見るも恐ろしい姿をして、まるで焼けた丸太のようで、黒く、骸骨のように高く直立して、[31] 針のような口と大きな身体をもち、喉と口腔が乾ききって、裸で、自分の体毛に覆われ、生まれながらに盲目で、苦難に住して、[32] 飢えと渇きによって焼かれた体をもち、方角もわからずに彷徨いながら、獐猛な犬や烏や禿鷹やジャッカルに襲いかかられ、[33] 苦悩の声を叫びながら、泣き喚きながら、大変に苦しみ、悪臭を放ちながら、ぞっとする姿で、ゆっくり歩いて来るのを私は見たのです。[34] かつて、いかなる戦慄すべき恐ろしい罪惡を彼女が行ったために、このような大きな苦しみを味わいながら林を彷徨っているのでしょうか。[35](#9) それ故世尊・世間師は、彼女がかつてなしたことのすべてをここでお説きになり、私を覚知させてください。」[36]

彼がこのように語ったのを聞き、世尊、かの牟尼の王は、その集会の衆とかのナンダカを見ながら、次のようにお説きになりました。— [37](#10)

ナンダカよ、かの愚かな餓鬼女は大きな恐ろしい罪惡を犯しました。その行為を聞くことを欲するなら、今語りましょう。聞きなさい。[38]

それはかくの如くです。昔、カーシャパという師・一切智・法王・世界の庇護者・如来・牟尼の王がいました。[39](#11) かの覚者はあらゆる生ける者を益するために、ペナレスの鹿野苑という勝者の修行場に、教団と共に住されていました。[40]

その頃そのペナレスに、正法の徳を求める、美しい容姿の、善良な資産家の娘がいました。[41](#12) 彼女はかの三界の師・大牟尼（仏）カーシャパを敬い、信心をもって法を聴聞しながら常に〔仏に〕仕えていました。[42] かの美しい娘は、彼の正法の甘露を飲んで覚知を得て、輪廻における努力をやめ、涅槃の安楽を欲しました。[43] 仏の教えに赴いて、信心をもって帰依し、出家し、禁戒を持して、梵行（清らかな修行生活）を行いました。[44]

親友・親類を含む彼女のあらゆる親しい者たちは、それを見て喜び、比丘尼たちの『雨期の住まい』（varṣaka）を建ててあげました。[45](#13) 有学・無学たちと共に喜悅し、その〔住居〕で彼女は、比丘尼として三昧・陀羅尼・明呪（vidyā）を学ぶことに満足して、修行しました。[46]

その後、うら若く美しい彼女は、煩惱に心を苦しめられました。修学・禁戒をうち捨てて、一人の在家者との姪事を楽しむ者として振舞いました。[47](#14) そして、その美しい女はそのように次第に放逸によって、欲情に驕った女として振舞い、修学を怠けるに至りました。[48] そして、悪しき行為に愛著するその美しい女は、真実の法から墮ちて、教えを汚す者になったのです。[49]

そこでよく戒律を保つかの比丘尼たちは、彼女を観察し、「[あなたは] 破戒者である」と咎めて、強制的に教団から追い出しました。[50]

すると彼女は激怒して、罪深く愚かな、正法を誹謗する者として、あらゆる阿羅漢たちの不名誉を宣伝流布させました。[51](#15) 彼女は誹謗することで、出家たちのため施主の家から催される[定期的な] 寄付集め(chandakāni)を、至る処で中断させました。[52] 阿羅漢である持戒の比丘たち、大神通をもつ出家たちを見ても、ただちに両目を閉ざして、他所に去りました。[53] このようにその不幸な女は、煩惱をもちつつ、破戒者として、三宝を誹謗して、教えの外に去りました。[54]

その後、その悪く罪深い女は、久しく病に苦しんで、時が来て命終しましたが、それから餓鬼界に生まれました。[55]

その悪く罪深い、教えを汚した愚かな女こそが、この餓鬼女です。生まれながらに盲目で、飢えと渇きに苦しみながら、彷徨っているのです。[56](#16) [教団の]『雨期の住まい』の財産(vitta)への慳貪を彼女は増大させたので、その罪惡の異熟によって、彼女は今世で、餓鬼女として彷徨っているのです。[57](#17) 信者たちの[定期的な] 寄付集め(chandaka)を彼女は中断させたので、その[異熟]によって、彼女は犬やジャッカルなどの恐ろしい生き物に襲われているのです。[58]

よく戒律を保つ出家たちを見て、彼女は両目を閉ざしたので、その[異熟]によって、悪く罪深い彼女は今世で生まれながら盲目の身になったのです。[59]

このようにナンダカよ、輪廻において自ら業を作るなら、その果を他人ではなく、その[本人]こそが味わうのです。[60](#18) 業が味わわれずに、いつかどこかで消滅してしまうことはありません。また作られた業の報いが別様に變化することも決してありません。[61] 業は火に焼かれることもなく、水に濡れることもなく、風に乾涸らびることもなく、地面に失せることもありません。[62]

白浄の行為(白業)が熟すれば、つねに楽があるでしょう。黒い[行為]には苦が、[白黒]混じった行為には混じった[楽と苦]があるでしょう。[63]

このように思念し、この輪廻において常に安樂を求める者たちは、専心して熱心に白浄の[行為]をなすべきです。[64](#19)

—以上の、牟尼の王の教えを聞いて、その比丘たちは覺知を得て、「かくのごとくが真実である」と認知して、[教えを]喜んで受け入れました。[65](#20)

その時かのナンダカ比丘は合掌して近づき、かの牟尼の王・世尊を拜んで、次のように再び問い尋ねました。[66]

「世尊よ、かの餓鬼女はどれほどの期間、苦を味わうことになるのでしょうか。何時、餓鬼界から解放されて、善趣に〔生まれ〕至るのでしょうか。[67] この事をすべてお説きになって、あらゆる人々に覚知を得させてください。これらすべての人々は、必ず善行をなすことでしょう。」[68]

このようにかのナンダカが問い尋ねると、かの一切智・世尊はかのナンダカを見つめて、次のように説かれました。[69]

「よろしい、ナンダカよ。その業からの解放をあなたが聞きたいと欲するなら、心を集中させて聞きなさい。今ここで〔それを〕語りましょう。[70]

六万回の生の間、彼女は生まれながら盲目の身で、飢えと渇きに苦しめられ、悪い棲処をもつ餓鬼女となって、たえず彷徨うでしょう。[71]

その〔期間の〕最後に、激しい苦しみに悩む彼女は、後悔し、憶念 (smṛti) を得て、世界主 (仏) を思い出して、昼夜礼拝するでしょう。[72] すると、かの世尊・庇護者・三界の王は、憐憫により彼女を救済しようとただちにやってくるでしょう。[73] その時かの憐れみの蔵である方は、彼女を見られて、ただちに手ずから〔彼女の上に〕天の不死の甘露を運ぶ水流を注がれるでしょう。[74] それが流れくるのを見て、驚いたその餓鬼女はただちに近づき、思う存分、不死の甘露を飲むでしょう。[75] 飽満するまで味わい、十分に栄養を得た彼女は、清らかな心で、喜び、歓喜し、かつ驚きながら、次のように考えるでしょう。[76] 『ああ、不思議ですばらしいことが今ここで生じた。これはかのお方の威神力によるものに違いない。[77] あの方は憐れみをもって自らご覧になられて、やって来られて、天の不死の甘露をもって飽満を得させて、私をただちに助けてくださった。[78] これほどの、自分の子供たちに注ぐような憐れみの視線をすべての生き物に注がれる、幸いなる三界の庇護者よ、勝利せよ (万歳) ! 常なる栄光あれ!』。[79] 世界におけるいかなる父母が、自分の子にすらこれほどの憐憫をもてるのでしょうか。それ故に、彼に匹敵するどんな世界の庇護者がいるのでしょうか。[80] このように自ら観察されては世の生き物たちを息子のようにお守りになる、その方に帰依し、〔今後〕いつも熱意をもって私は敬意を捧げます。』[81]

その餓鬼女はこのように思念し、合掌して前に進み出て、その庇護者の両足の蓮華を頂礼して、歓喜して語りかけるでしょう。[82]

『南無、世尊・庇護者よ、あなた様に帰依いたします。どうかあなた様は慈悲心をもって〔私を〕ご覧になられ、常にお救いくださいますように。[83] あなた様だけが世界の庇護者・世界の扶養者・世界の主・世界の王・世界師であり、三界に勝利します。[84] 私には他に師はおりません。あなた様だけが親友であり師長です。それ故、

私を憐れみをもってご覧くださり、正しい路にお導き下さい。[85] 愚かな心で私は罪悪をなしましたが、その罪行 (duṣkṛta) のすべてを、庇護者よ、今ここで消滅させてください。[86] 世界の庇護者よ、今日より以降、あなた様だけに帰依し、あなた様がお命じになる通りに常に行います。[87] 師、世界の主よ、あなた様は以上の私の懇願をお聞き下さり、憐れみをもって、私を常にご覧になって、菩提への路にお導きください。[88] あなた様は隅々まで世界の人々を自らご覧になり、懸命に〔苦処より〕引き上げて、スカーヴァティー（極楽）に到達させます。[89] 庇護者よ、あなた様は私をも同様に憐れみをもってご覧くださり、力づけ、引き上げて、スカーヴァティーに到達させてください。』[90]

このように餓鬼女が懇願する時、その菩提の王（仏）は聞いて、かの餓鬼女を見て、次のようにお教えになるでしょう。[91]

『善い哉、あなたに常に幸せがありますように。専心して、白浄〔の行為〕を行じなさい。三法に帰依し、常に熱心に奉じなさい。[92] そうすればあなたに常に吉祥（繁栄）が至るところに必ずあるでしょう。漸次にやがて菩提に到達して、仏陀の位を得ることでしょう。[93] 仏陀に帰依する者たちは、悪趣に赴くことはありません。漸次にやがて魔の群に勝利して、勝者（仏）の住まいに到達します。[94] 法に帰依する者たちは、悪趣に赴くことはありません。漸次にやがて波羅蜜を円満させて、スカーヴァティーに到達します。[95] 僧に帰依する者たちは、悪趣に赴くことはありません。漸次にやがて菩提行を持しながら、常に善趣に赴きます。[96] このように考えて、梵天を始めとする三界の君主たち、あらゆる世界の王たちは三宝に帰依し、奉じています。[97] その福德の力で、吉祥（繁栄）が常に至る処、三界のあらゆる処で、過去にあったのであり、現在もあり、未来にもあるでしょう。[98] 必定に幸福があると知って、三宝に帰依し、恭敬し、信心をもって常に憶念し、専心して信奉しなさい。[99] そうすれば、あなたはこの罪深い肉体を捨てて、速やかに善趣に行き、常に絶え間なく楽を味わうでしょう。[100] 其処でも、あなたはいつも白浄の〔行い〕を専心してなすでしょう。その後菩提行を堅持して、スカーヴァティーに達することでしょう。[101] このように認識して、善き女よ、あなたがスカーヴァティーを欲するなら、三宝を憶念し、専心して絶えず奉じなさい。』[102]

このようにかの世界主（仏）は教示して、他処を照らしつつ、人々を救済しながら去り、スカーヴァティーに戻ってゆくでしょう。[103]

それからかの餓鬼女は三宝を常に憶念して、死んで餓鬼の肉体を捨て、清浄な身体を有して、〔次生に〕赴くでしょう。[104] その時彼女は世界主の恩寵 (prasāda) によって罪悪から解放され、清浄な三身を有する者として (pariśuddhatrikāyā)、スカーヴァティーに赴くでしょう。[105]

それ故、慳貪は大きな罪惡の根であり惡趣の原因であると考えて、[それを]捨てて、安樂を求める者たちは、正法を行じなさい。」[106]

— 以上の牟尼の王（仏）の教令を聞いて、集会場に居たすべての人々は「真実である」と思い、覺知を得て、喜悅しました。[107]

— これが私に師が教えられたことであり、私が聞いたとおりに申し上げました。このように認識して、王よ、是非とも慳貪をお捨てください。[108] [他者の] 益の成就を求める者には欲しいだけ与えるべきです。[他者に] 害になることが求められる場合には、少しも与えてはなりません。[109] 王よ、努力して民衆をも同じ様に覺知を得させて、あなたは益するための布施に導き、[彼らを] 守護して下さい。[110] そのことによって、必定にあなたには常に幸せが至るところであるでしょう。やがて次第に菩提に到達して、仏陀の位を得るでしょう。[111]

— 以上のように、かの聖者が教示されたのを聞いて、アショーカ王は「そういたします」と信受し、集会の聴衆と共に喜悅しました。[112]

この『生まれながら盲目の身の[餓鬼女] アヴァダーナ』を聴聞し、人に聞かせるすべての者たちは、清浄なる身体を享受しつつ、死後に仏の住まい（極樂）において、幸せになる。[113]

以上、『生まれながら盲目の餓鬼女の アヴァダーナ』（Jātyandhapretikāvadāna）終わる。第30章。

第2節 Avadānaśataka 第47章 Jātyandhā と SMRAM 第30章の比較

上の節で梵文テキストと和訳を示した SMRAM 第30章 Jātyandhapretikāvadāna の原話である Avś 第47章 Jātyandhā の全訳を示し、その後、それら二つのテキストを対照させて、内容の比較を行いたい。

アヴァダーナ・シャタカ第47章『生盲餓鬼女』（Jātyandhā）和訳

SPEYER, vol. I, pp. 267-270

#1 仏・世尊は、王や大臣や財産家や市民や長者（富商）や隊商長や神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められた仏・世尊は高名で、大福德に恵まれた者であり、衣服・施食・臥具坐具・病氣治療のための薬といった日用品を得ており、弟子たちを有する僧伽とともに、シュラーヴァステイーにあるジェータ林のアナータピンダダの園林に滞在しておりました。

#2 具壽ナンダカは午前にも身支度をして、鉢と法衣を持って、シュラーヴァスティーで托鉢行をし、食事をすまし、午後に托鉢から戻った彼は、鉢と法衣を片付けて、餓鬼界を巡遊しました。

#3 具壽ナンダカは餓鬼女 (preti) を見ました。焼けた丸太のような姿で、生まれつき眼が見えず、自分の髪と体毛に覆われ、針の穴のような [小さな] 口をもち、腹は山のように大きく、悪臭を放って、まるで墓場のようなものでした。カラス・禿鷲・犬・ジャッカルが襲いかかり、彼女の [体の] いたるところを引き裂いて肉を食べていました。彼女は急所の激痛 (断末魔) の感受に襲われ、苦悩の叫び声をあげていました。鋭く荒々しく激烈で意に適わぬ、苦痛の感受を受けていました。

#4 具壽ナンダカは戦慄し、尋ねました。「姉よ、あなたは一体いかなる罪惡をなして、これほどの苦を味わうことになったのですか。」

#5 餓鬼女は答えました。「太陽が昇った時、灯明の必要があるでしょうか。この事を世尊にお尋ね下さい。かの方があなたに私どもの『業の連繋』 (karmaploti) を説明するでしょう。それを聞けば、他の有情たちも、この世で悪をやめるでしょう。」

#6 具壽ナンダカは世尊のもとに赴きました。

#7 その時、世尊は独坐 [の状態] から出立され、四衆に対して純粋な蜜蜂のように甘美な甘美な教を説かれました。数百人の会衆は諸感官の動きを抑えて (気を散らすことなく)、世尊から甘美な甘美な教を拝聴しました。その後、先に挨拶をされる方 [人を和ませるように語る方] である諸仏・世尊たちは、「さあいらっしゃい、よくおいでになられた」と [歓迎の言葉を] 述べ、先に微笑まれます。其処で世尊は具壽ナンダカに次のように語りました。「ナンダカよ、いらっしゃい。あなたはよくおいでになった。ナンダカよ、あなたが今来られたのはなぜですか。」

#8 ナンダカは答えました。「尊師よ、私は餓鬼界を巡遊して、こちらに参りました。そこで私は餓鬼女を見たのです。焼けた丸太のような姿で、生まれつき眼が見えず、自分の髪と体毛に覆われ、針の穴のような [小さな] 口をもち、腹は山のように大きく、悪臭を放って、まるで墓場のようなものでした。カラス・禿鷲・犬・ジャッカルが襲いかかり、彼女の [体の] いたるところを引き裂いて肉を食べていました。彼女は急所の激痛 (断末魔) の感受に襲われ、苦悩の叫び声をあげていました。鋭く荒々しく激烈で意に適わぬ、苦痛の感受を受けていました。

彼は語りました。 [韻文:]

「渴した喉と唇をもち、非常に苦しみ、大きな岩のような身体はよろめき、自分の髪の毛で覆われた顔をもつ、裸の、とても小さい針に似た口をもつ、痩せた [餓鬼女] は、

裸で、自分の毛で [体を] 覆い、骸骨のように高く直立し、頭蓋骨を手に持ち、恐ろしい [姿で]、泣き喚きながら、走り回っています。

飢えと渇きによって憔悴し、困窮に苦しみ、苦悩の声を叫びながら、苦の感受を得ています。

#9 これほど恐ろしい苦しみを受けるとは、彼女は [かつて] 人世で一体どのような恐ろしい罪惡をなしたのでしょうか。」

#10 世尊は説かれました。「ナンダカよ、かの餓鬼女は罪惡をなしたのです。あなたは彼女の『業の連繫』を聞きたいですか。」「尊師よ、その通りです。」「それではナンダカよ、聞きなさい、しっかりと [話に] 思念を向けなさい。話しましょう。—

#11 ナンダカよ、昔、過去の時代、この賢劫において人寿が二万歳の時に、カーシャパという名の正等覺・明知と行いとを具えた方・幸せな方 (善逝)・世間を知る方・人間を調練する無上の方・神々と人間の師・仏・世尊が世に現われました。かの [仏] は都城ベナレスの近く、リシパタナ (仙人墮処) の鹿野苑に住まわれました。

#12 ベナレスに或る一人の長者の娘がいました。彼女は法を希求しました。やがてその女は法を聞くうちに、輪廻に欠点を見て、涅槃に長所を見るようになりましたので、彼女は父母の許しを得て、世尊の教えにおいて出家しました。

#13 彼女のために親族たちは比丘尼たちの雨期用の住まい (varṣaka) を造ってあげました。彼女はそこで無学・有学の比丘尼たちと一緒に住みました。

#14 そのうち、彼女は放逸により、学を怠りました。それゆえ比丘尼たちは破戒者 (duḥśīlā) として、[教団から彼女を] 追い出しました。

#15 すると、催された施主の家からの [定期的な] 寄付集め (chandakāni 志としての施) を彼女は中断させて⁽⁷⁾、無学・有学の [尼僧たちの] 不名誉の言葉を語りました。持戒の比丘たちを見ても、彼女は彼らに両目を閉ざしました。

#16 ナンダカよ、どう思いますか。その長者の娘こそが、かの餓鬼女なのです。雨安居の住まいに慳貪をもったので、餓鬼界に生まれたのです。

#17 彼女が [檀家から] 定期的になされる施食 (naityaka) を中断させたため、カラス・禿鷲・犬 [やジャッカル] たちに⁽⁸⁾襲われるのです。学・不学の比丘尼たちの不名誉を語ったために、悪臭を得たのです。持戒の比丘たちを見て眼をつむったため、生まれながらに盲目なのです。

(7) SPEYER が指摘するように (p. 269, fn. 4)、梵文写本ではこの文に述語となる動詞の欠損がある。蔵訳は、その動詞を *gcod du bcug* (断ち切らせた) と訳す。それに従い、私は「中断させて」と補って訳した。念のため、SPEYER が利用した Cambridge の B 写本 (45a, l. 4) のほか、彼が見ていない東大写本 (Matsunami No. 28; 136a, ll. 2-3) でもやはりその述語が欠損していることを私は確認した。

(8) SPEYER は蔵訳に従い、*kurkurai<ḥ srgālai>ś cā* 「犬 [やジャッカル] たちに襲われるのです」と読むことを注で提案する (p. 269, fn. 6)。

#18 このように、ナンダカよ、完全に黒い行為（業）には完全に黒い果報が熟し、完全に白い〔行為〕には完全に白い果報が熟し、〔白黒〕混じり合った〔行為〕には〔白黒〕混じり合った〔果報〕が〔熟するのです〕。それ故に、ナンダカよ、完全に黒い行為と〔白黒〕混じり合った〔行為〕を避けて、完全に白い行為だけをなすように努力しなさい。ナンダカよ、このようにあなたは学びなさい。—

#19 この法門が説かれた時、十万の生ける者たちが真実を見るに到りました。その時、世尊は比丘たちに語られました。「これらとその他の、慳貪と口の悪行における過患を知って、慳貪と口の悪行を捨離するために努力しなさい。比丘たちよ、このようにあなた方は学びなさい。」

#20 このように世尊は説かれました。感激したそれらの比丘たちと他の神・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガ等は世尊のお説きになった〔教え〕を喜んで受け入れました。

以上が Avś 第47章『生まれつき盲目の〔餓鬼〕女』（Jātyandhā）の全訳である。訳にある # 番号は、Avś のテキストを私が切り分けて付けた paragraph number である。それは段落というより対照の便宜のために恣意的にテキストを細分割した、出来事としての文のまとまりを示す。

その # 番号を使って、以下に Avś 第47章と SMRAM 第30章（略号 S30）の対応を示すための対照表を挙げたい。Avś の # 番号の後に、その箇所 SPEYER 本の巻・頁・行と冒頭の語を（例えば i.267.2-6 buddho のように）示す。その次に = を挟んで、内容的に対応し関係する S30 の該当箇所を verse number で挙げる（例えば = S30 vv.5-6 のように）。

前回の論文と同様に、記号の○は Avś の内容がアヴァダーナ・マーラーの再話において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

#1 i.267.2-6 buddho = S30 vv.5-6

#2 i.267.6-8 athāyusmān = S30 vv.7-13○

#3 i.267.8-11 adrākṣīd āyusmān = S30 vv.14-16

#4 i.267.11-12 āyusmān = S30 vv.17-18

#5 i.267.12-14 pretī āha = S30 vv.19-23

#6 i.267.14-15 athāyusmān = S30 vv.24-25

#7 i.268.1-5 tena khalu = S30 vv.26-27

#8 i.268.5-15 nandaka āha = S30 vv.28-34

#9 i.268.16-17 kiṃ tayā prakṛtaṃ = S30 vv.35-36

#10 i.268.18-19 bhagavān āha = S30 vv.37-38

- #11 i.269.1-4 bhūtapūrvam = S30 vv.39-40
 #12 i.269.4-6 vārāṇasyām = S30 vv.41-44
 #13 i.269.6-7 tasyā arthaṃ = S30 vv.45-46
 #14 i.269.7-8 yāvat tayā = S30 vv.47-50○
 #15 i.269.8-10 tatas tayā = S30 vv.51-55
 #16 i.269.11-12 kiṃ manyase = S30 v.56
 #17 i.269.12-14 yat tayā naityaka- = S30 vv.57-59
 #18 i.269.14-17 iti hi nandaka = S30 vv.60-63
 #19 i.270.1-3 asmin khalu = S30 v.64
 #20 i.270.4-5 idam avocad = S30 vv.65-107◎

以上のように二つのテキストの対照を行ってみると、SMRAM 第30章の韻文テキストは、その章の最初と末尾にあるウパグプタ長老とアショーカ王の対話という、Avśには無い話の枠の部分（S30 vv.1-4, 108-113）を除けば、全体的に Avś 第47章のみを種本にしており、その種本の順序を乱すことなくほぼ忠実に、語りを行っていることが確認される。

上記の表をみるとSMRAM 第30章には○（膨張）の印が二箇所あり、また話の最後になって◎（大膨張）の印がある。以下、これらの膨張・大膨張の箇所は、なぜ膨張しているのかを説明する。

Avś の#2の相当箇所、そのAvśの内容がS30において（vv.7-13）、やや膨張している理由は、Avśが「托鉢行をし、食事をして」とごく短く表現しているナンダカの托鉢行の様子を、もっと具体的に、一つの出来事として表現しているからである。

Avś の#14の相当箇所、その内容がS30において（vv.47-50）、やや膨張している理由は、女が教団を追放された経緯をもう少し詳しく記述するためである。特に Avś が「そのうち、彼女は放逸により、学を怠りました」と一文で簡潔に表現している追放の理由を、S30は Avś より具体的に、尼僧である彼女が或る在家者と性的な関係を結ぶに至り、学を怠るようになったからであるとしているのは、興味深い。このような記述は一種の註釈的説明として Avś への理解を深めるものである。

Avś の#20の相当箇所、S30では（vv.65-107）異常に膨張している理由は、Avśには説かれなかった、ナンダカと釈尊の間で交わされた別の問答が追加されているからである。その問答とは、未来における女の餓鬼界からの救済についてである。女は今後六万回、餓鬼として生まれ変わり続けるが、その果てに女は仏への信心によって救済され、遂にスカーヴァティーに達する。仏を憶念し、仏への信仰心を抱けば、それこそが餓鬼界から逃れるための唯一の手だてとなることを説く、重要な付加であるといえよう。

第3節 Ratnāvadānamālā 第15章 Pretikāvadāna の梵文と訳

RAM 第15章 Pretikāvadāna は Avadānaśataka 第44章 Varcaghaṭaḥ からの再話（韻文改稿）テキストである。この章はRAMに含まれるが、SMRAMには含まれない。高島寛我の *Ratnamālāvadāna* 出版本（1954）にはRAM第1章から第12章までしかなく、この章は欠ける。以下に私が6写本（C, P, T1, T2, T3, W）を用いて初めて校定したRAM第15章の梵文テキストを以下に挙げ、続いてその第15章の大部分（vv.14-110）を和訳する。

Ratnāvadānamālā 15: Pretikāvadāna

athāsoko mahīpāla upaguptaṃ yatiṃ gurum /
kṛtāñjalipuṭo natvā punar evam abhāṣata // 1
bhadanta śrotum icchāmi punar anyat subhāṣitam /
tad yathā guruṅkhyātaṃ tathādeṣṭuṃ ca me 'rhasi // 2
iti tena narendraṇa prārthite 'sau yatiḥ sudhīḥ /
upagupto nareṣaṃ taṃ samālokyaiṃvā ādiśat // 3
śṛṇu rājan mahābhāga yathā me guruṅoditam /
tathāhaṃ te pravakṣyāmi śrutvā caivaṃ śubhe cara // 4
purāsau bhagavān buddhaḥ śākyasiṃho dayodadhiḥ /
sarvadharmādhipo nāthaḥ śāstā lokavināyakaḥ // 5
bhikṣubhiḥ śrāvakaiḥ sārddham upāsakaiś ca cailakaiḥ /
bhikṣuṅbhis tathā sārddham upāsikāgaṇair api // 6
bodhisattvagaṇaiś cāpi tathānyair buddhasevakaiḥ /
sārddham rājagṛhopānte veṇuvane nagottame // 7
kalaṅḍakanivāpākhye vijahāra jināśrame /
tadā dharmāmṛtaṃ pātuṃ samāyātāḥ samantataḥ // 8
brahmādyā lokapālās ca śakrādyās ca sureśvarāḥ /
catvāro lokapālās ca sasainyabalavāhanāḥ // 9
siddhā vidyādharendrās ca yakṣagandharvakinnarāḥ /
rākṣasā garuḍā nāgās tathānye buddhasevakāḥ // 10
yogino yatayaś cāpi tāpasā brahmacāriṇaḥ /
ṛṣayo brāhmaṇās cāpi rājānaḥ kṣatriyā api // 11
vaiśyā rājakumārās ca mahāmātyās ca mantriṇaḥ /
śreṣṭhinaḥ sārthavāhās ca dhaninaś ca mahājanāḥ // 12

paurā jānapadās cāpi grāmyāḥ *kārvaṭikā api /
 evam anye 'pi lokās ca taddharmam śrotum āgatāḥ // 13
 tatra sarve 'py upāgamyā veṇuvane jināśrame /
 sabbhāmadhye samāsīnam prādrākṣus taṃ munīśvaram // 14
 tato natvā ca saṃpūjya prakṛtvā tripradakṣiṇām /
 parivṛtya puraskṛtya kramaśaḥ samupāśritāḥ // 15
 tat saddharmāmṛtam pātum kṛtāñjalipuṭā mudā /
 saṃbuddhavadanāmbhojaṃ drṣṭvā tasthuḥ samāhitāḥ // 16
 athāsau bhagavān buddho drṣṭvā tān samupāsthitān /
 ādimadhyāntakalyāṇam āryadharmam samādiśat // 17
 tat saddharmāmṛtam pītvā te sarve saṃpramoditāḥ /
 tadanumodanām kṛtvā babhūvur bodhicāriṇaḥ // 18
 tasmimś ca samaye bhikṣur maudgalyāyana ātmavit /
 khikkhirīpātram ādāya rājagrham upāviśat // 19
 tatra rājagrhe piṇḍam yācitvā ca bahirgataḥ /
 sarastīrasthitāḥ piṇḍam bhuktvā cāsau tato 'vrajat // 20
 tato divāvihārāya gṛdhraḥkūṭe nagottame /
 vṛkṣamūle samāśritya niṣaṇṇo 'bhūt samāhitāḥ // 21
 tatraikā pretikā kācid dagdhasthūṇopamākṛtiḥ /
 sūcīrandhramukhacchidrā parvatasamṇibhodarā // 22
 pradīptāgninibhā dīptakeśasamchannakāyikā /
 kaṅkālayantraśeṣāṅgī kṛśāṅgī bhīṣaṇākṛtiḥ // 23
 viṇmūtrapariliptāṅgī durgandhāmedhyahāriṇī /
 tīvrātivedanākrāntā duḥkhinī durbhagākṛtiḥ // 24
 ārtasvaravirāvantī krandantī kṣutpipāsītā /
 taṃ maudgalāyanam drṣṭvā paryadhāvat tadāmukham // 25
 athāyusmān mahātmāsau drṣṭvā tāṃ pretim āgatām /
 sahasā purato gatvā papracchaivam purākṛtām // 26
 pretike kiṃ tvayā pāpam prakṛtam dāruṇam purā /
 yenaivam carase pretī tad vadasva mamāgrataḥ // 27
 evam āyusmatā tena pṛṣṭāsau pretikā tadā /
 taṃ maudgalyāyanam natvā rudanty evam abhāṣata // 28
 bhadantāham mahāduṣṭā pāpiṣṭhā duḥkhabhāginī /
 kiṃ mayā kathyate pāpam pṛcchatām te gurum jinam // 29
 sarvajño 'sau jino 'smākaṃ karma te vyākariṣyati /

yac chrutvānye 'pi sattvās ca viramṣyanti hi pāpataḥ // 30
 tatheti pratisamśrutya sa maudgalyāyano yatih /
 tataḥ satvara āgatvā veṇuvanam upāviśat // 31
 tadāsau bhagavān dr̥ṣṭvā taṃ maudgalyam upāgatam /
 svāgataṃ te kṛpātas tvam ehi bhadreti cābravīt // 32
 ity ādiṣṭaṃ munīndreṇa sa maudgalyāyano yatih /
 sahasā taṃ gurum natvā kṛtāñjalis tathāvadat // 33
 bhagavann adya vihārārthaṃ ḡḍhrakūṭe nagottame /
 vṛkṣamūle samāśritya tiṣṭhāmy ahaṃ samāhitaḥ // 34
 tatraikā pretikā kācit purato me pradhāvati /
 kiṃ tvayā prakṛtaṃ pāpam ity asau pṛcchate mayā // 35
 tato 'sau pretikā cāpi vadaty evaṃ puro mama /
 bhadantāhaṃ mahāduṣṭā pāpiṣṭhā duḥkhabhāginī // 36
 kiṃ mayā kathyate pāpaṃ pṛcchatāṃ sugataṃ gurum /
 sarvajño 'sau jino 'smākaṃ karma te vyākariṣyati // 37
 tathety ahaṃ pratiśrutya tato 'tra samupāgataḥ /
 tatkarmaplotikāṃ praṣṭum draṣṭum ca te samāvraje // 38
 bhagavan kiṃ purā karma tayā pretyā kṛtaṃ khalu /
 yenāsau pretikā bhūtvā bhramanty amedhyakhādini // 39
 yasyā darśanamātreṇa sarve 'pi ca jalāśrayāḥ /
 tatkaṣaṇād eva śuśyante pañkaśeṣāḥ samantataḥ // 40
 yadā varṣati *devo ca tasyā dehopari drutam /
 visphuliṅgitam aṅgāraṅgaṃ patati sarvadā // 41
 yat tayā prakṛtaṃ pāpaṃ tat samādeṣṭum arhasi /
 tac chrutvānye 'pi sattvās ca *viramṣyanti kaleḥ sadā // 42
 iti tenārthitaṃ śrutvā saṃbuddho 'sau munīśvaraḥ /
 taṃ maudgalyaṃ sabhāṃ cāpi saṃdr̥ṣṭvā caivam ādiśat // 43
 śṛṇu maudgalya vaksye 'haṃ tayā yat prakṛtaṃ purā /
 śrutvāpy etat tathā loke saṃśrāvaya prabodhane // 44
 purā kāśīpure khyāte pratyekabuddha ātmavit /
 āsīd āraṇyako dhīro hīnadīnānukampakaḥ // 45
 sa kadācit svadaivena kṣayarogasamanvitaḥ /
 kṣīṇendriyo vihīnāmśo durbalāṅgo 'bhavat kṛśaḥ // 46
 tathāsau vyādhitāś cāpi lokānāṃ hitakāmyayā /
 bhikṣāhetoḥ śanair gatvā vārāṇasīm upāviśat // 47

tatra kaścit sudhīr vaidyo mārge taṃ mandagāminam /
 dr̥ṣṭvā kṣayarujākrāntaṃ matvā caivam abhāṣata // 48
 bho bhikṣo kva prayāto 'si kasyārthe 'tra samāgataḥ /
 rogaṃ te vardhate kāye tan mā vraja kuhāpi hi // 49
 ity ukte tena vaidyena pratyekamunir abravīt /
 bho vaidya dehi me pathyam auśadhaṃ rogaśāntaye // 50
 ity evaṃ prārthite tena pratyekasugatena saḥ /
 tatheti yataye tasmai pathyauśadham upādiśat // 51
 yate śr̥ṇu hitaṃ vakṣye tava rogapraśāntaye /
 sām̐preyabhojanaṃ bhukṣva tataḥ svāस्थ्यam avāpnuyāḥ // 52
 iti tena samādiṣṭaṃ śrutvāsau yatir āhitaḥ /
 tatheti pratisam̐śrutya tad yācituṃ samācarat // 53
 tatra pratyekabuddho 'sau pathyaṃ sām̐preyabhojanaṃ /
 sādhor gr̥hapater gehe yācituṃ samupāviśat // 54
 tatraivaṃ taṃ samāyātaṃ dr̥ṣṭvaivāsau gr̥hī mudā /
 sahasā samupāmantrya praṇatvaivam abhāṣata // 55
 bho yate 'ha samāyāhi kim atra te prayojanam /
 yenārthena samāyāsi tat samādeṣṭum arhasi // 56
 iti tenārthite 'sau ca pratyekasugato yatih /
 taṃ gr̥hasthaṃ samālokyā śanair mandasvaro 'vadat // 57
 ārogyam astu te sādho maṅgalaṃ ca samantataḥ /
 bhūyāc ca vāñchitārthe 'pi siddhiḥ sambodhisādhane // 58
 yad ahaṃ kṣayarogārtas tan me rogasuśāntaye /
 sām̐preyabhojanaṃ pathyam iti vaidyena diśyate // 59
 tad anukampayā sādho mamaitadrogaśāntaye /
 sām̐preyabhojanaṃ mahyaṃ śraddhayā dātum arhasi // 60
 ity etat prārthite tena gr̥hastho 'sau krpārditaḥ /
 tatheti sam̐pratijñāya vadhūm evam abhāṣata // 61
 vadho 'smai yataye pathyaṃ sām̐preyabhojanaṃ tvayā /
 dātavyaṃ dīyatām asya kṣayarogasuśāntaye // 62
 evaṃ vadhūm samādiśya gr̥hastho 'sau bahirgataḥ /
 kāryārthe vyagritas tasthau suhr̥nmitrajanaiḥ saha // 63
 atha tasya gr̥hasthasya sā vadhūḥ kuṭilāśayā /
 īr̥ṣyāgniparidīptāṅgī mānamātsaryagarbhitā // 64
 sā dr̥ṣṭvā taṃ yatim̐ bhikṣuṃ mātsaryakṣobhitāśayā /

kuladharmam anādr̥tya manasaivaṃ vyacintayat // 65
 yady adyāsmāi pradāsyāmi pathyaṃ sām̐preyabhojanam /
 bhūyaś cāpi pralubdhō 'yam āgacchen nityaśo 'pi ca // 66
 tad yathāyaṃ pralubdhātmā kadāpy atra na cāvrajet /
 tathopāyavidhānena prerayeyam imaṃ vane // 67
 iti niścitya sā vāmā pāpiṣṭhā duṣṭamānasī /
 sahasā pātram ādāya gr̥hāntaram upāviśat // 68
 tatrāsau sahasā pātram pūrayitvā svavarcasā /
 bhaktair upari saṃsthāpya tasmai dātum upāsarat // 69
 tathāsau sahasopetya dhṛtvā pātram svayaṃ mudā /
 tasmai pratyekabuddhāya dattvaivāpāsarad bahiḥ // 70
 atha pratyekabuddho 'sau svārjavo nirvikalpikaḥ /
 durgandhitam imaṃ pātram matveti samalakṣata // 71
 eṣā hi pramadā bhaktair gūhayitvā svavarcasam /
 pātre tan me pradattvaiva bahir apasṛtā khalu // 72
 iti matvā sa tat pātram choritvā nirgato bahiḥ /
 snānaśaucādikaṃ kṛtvā tato 'nyasya gr̥he yayau // 73
 tatra taṃ yatim āyātaṃ dṛṣṭvānyo gr̥hapatir mudā /
 sām̐preyabhojanaṃ tasmai dadau tasya yathepsitam // 74
 tato pratyekabuddho 'sau labdhvā sām̐preyabhojanam /
 nirgatya sahasā tasmāt svāśramam samupācarat // 75
 tatra sara upāsīno bhuktvā sām̐preyabhojanam /
 sahasā roganirmukto nirvyādhiḥ svasthyam āyayau // 76
 tato 'sau pāpinī vāmā dṛṣṭvā taṃ nirgataṃ yatim /
 sahasā svagr̥ham gatvā dvāram baddhvābhyatiṣṭhata // 77
 tasmīn sa samaye tasyā bhartā svagr̥ham āgataḥ /
 kim evaṃ tiṣṭhase bhadrā iti bhāryām abhāṣata // 78
 evaṃ bhartur vacaḥ śrutvā sā vāmā pramadā kudhīḥ /
 bhartāraṃ taṃ samālokyā hasanty evaṃ abhāṣata // 79
 svāminn adya mayā dattaṃ pātram amedhyapūritam /
 bhaktasaṃchāditaṃ jñātvā saṃtyaktvaiko yatir gataḥ // 80
 evam etat tayā proktaṃ śrutvaivāsau prakopitaḥ /
 ākruśya tādayitvā tāṃ svabhāryām paryabhāṣata // 81
 are pāpini dhig dhik tvām īdr̥g api tvayā kṛtam /
 kim anyat pātakaṃ karma na kariṣyasi pāpini // 82

dhig mamāpy atra saṃsāre janmāpi jīvitam tathā /
 yasyedṛśyā hi pāpinyā bhāryayā saha saṃgatiḥ // 83
 kuladharmayaśohantrī svaparātmavighātini /
 ihāmutra vinaṣṭāsi kāntāpi tyajyase mayā // 84
 kim idṛkpāpasādhinyā kāntayā bhāryayāpi me /
 sarvathā parityaktāsi tad gacchāsu svake gṛhe // 85
 gaccheś ced āsu gaccha tvam no cen mayā haniṣyase /
 tat tvam sneham mayi tyaktvā gacchātra te haṭhena kim // 86
 ity ākruśya gṛhastho 'sau tām vāmam pāpinim balāt /
 galākṣepam pradattvaivam nyakāśayad gṛhād bahiḥ // 87
 tathā niṣkāśitā bhartrā sā nārī kuṭilāśayā /
 nirāśrayā vibhagnāśā tasthau gehāṅgaṅāśritā // 88
 tatrāsau pramadā nārī kṣutpipāsāhatātūrā /
 tīkṣṇadamṣṭraih śvabhir nityam bhaṣyamānā vighātītā // 89
 tathāivedanākrāntā muktakeśī kucaulikā /
 bhūtinīva vidagdhāṅgī bhartsyamānā samantataḥ // 90
 niḥśaraṇā *vibhagnāśā kṣudhāgniparitāpitā /
 yaṣṭim ālambya bhikṣārtham vibabhrāma gṛhe gṛhe // 91
 tathā sarvatra geheṣu vibhramantī vikheditā /
 kṛcchreṇāhāram āsādyā bhuñjamānā vyatiṣṭhata // 92
 tataḥ kacchuparītāṅgī kuṣṭhitā pūtivāhinī /
 ciram rogaparikrāntā mṛtā yayau yamālayam // 93
 tatrāpi dharmarājāsau matvaivam tām supāpinim /
 sahasā preṣayat tatra pretālaye praśāsane // 94
 tato 'dyāpi hi sā nārī pretībhūtā suduḥkhinī /
 kṛcchreṇāmedhyam āsādyā bhuñjanty evam bhramanty api // 95
 eṣāsā pāpinī nārī manyatām mānyathā khalu /
 evam duḥkhābhisamṭaptā ciram eṣā bhramiṣyati // 96
 evam karmavipākāni bhuktvā bhramanti jantavaḥ /
 pāpena durgatiḥ yānti puṇyena yānti sadgatim // 97
 iti vijñāya pāpāni karmāni miśritāni ca /
 pravahāya sadā nityam caritavyam śubhe sadā // 98
 śubhasya karmaṇaḥ pāke sukhataiva sadā khalu /
 pāpasya duḥkhataivam hi miśritasya ca miśratā // 99
 yenaiva yat kṛtam karma bhukte sa eva tat phalam /

abhuktaṃ kṣīyate naiva karma kvāpi kathaṃcana // 100
 nāgnibhir dahyate karma klidyate nodakair api /
 vāyubhiḥ śuśyate naiva kṣīyate na kṣitāv api // 101
 na naśyanti hi karmāṇi kalpakotīśatair api /
 sāmagrīm prāpya kālaṃ ca phalanti khalu dehinām // 102
 evaṃ matvātra saṃsāre sadā saukhyaṃ yadīcchatha /
 tathā nityaṃ śubhe dharme prācaradhvaṃ samāhitāḥ // 103
 iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutvā sarve 'pi bhikṣavaḥ /
 saha taiś ca sabhālokaḥ satyam eva pramenire // 104
 evaṃ me guruṇākhyātaṃ tathā te vakṣyate mayā /
 śrutvaivaṃ ca mahārāja śrāvaya tvaṃ prajā api // 105
 svayaṃ dharme pratiṣṭhitvā bodhayitvā prajā api /
 śubhe dharme pratiṣṭhāpya pālanīyāḥ prayatnataḥ // 106
 tatas te maṅgalaṃ nityam ihāmutrāpi saṃbhavet /
 kramād bodhicariṃ pūrya saṃbodhim api cāpnuyāḥ // 107
 iti matvā mahārāja triratnaśaraṇaṃ gataḥ /
 saṃbodhipraṇidhānena dharmāṃ loke pracārayeḥ // 108
 iti tena samādiṣṭaṃ upagupteṇa bhikṣuṇā /
 satyam evaṃ pratijñāya nananda sajana nṛpaḥ // 109
 idaṃ pretyavadānaṃ ye śṛṇvanti śrāvayanti ca /
 te pāpaviratā dharmāṃ kṛtvā yānti sukhāvāṭim // 110

 iti pretikāvadānaṃ samāptam // 15

以下にこのRAM第15章 Pretikāvadāna の校定に用いた6写本の異読を挙げる。私が本章の校定に用いた6写本は次の通り：

- C 写本：Cambridge University Library 所蔵、Bendall Add. 1592 (Ratnāvanamālā), 117b5-121a9.
 P 写本：Bibliothèque Nationale (Paris) 所蔵、Filliozat 104 (Ratnāvanamālā), 148b2-153b1.
 T1 写本：東京大学所蔵、Matsunami No. 27 (Avadānaratnamālā), 118a1-122a7.
 T2 写本：東京大学所蔵、Matsunami No. 316 (Ratnamālāvadānakathā), 142a1-146b2.
 T3 写本：東京大学所蔵、Matsunami No. 317 (Ratnamālāvadānakathā), 138a3-143a2.
 W 写本：IASWR, *Buddhist Sanskrit Manuscripts* [microfiches], MBB-II-30, 179b1-184b6.

これら6写本のいずれも誤りを有し、どれも archetype の位置に置かれるものではないが、その中でP写本は正しい読みを提供することが比較的多く、最も頼りになる写本

である。しかし過度に信頼すべきではなく、P写本以外のC, T1, T2, T3, Wの写本の中に正しい読みが見出されることもよくある。C, T1, T2, T3, Wの中ではT1WとT2T3の二つの読みの系統を区別することが出来る。特にT1とWは相互に親密な関係にある。Cは、ある場合にはT1Wの系統に近く、ある場合にはT2T3の系統に近く、ある場合にはPに近い、定まらぬ位置をもつ。恐らくCは、Pと同様に、やや古い時代に分離した一系統の写本なのであろうが、梵語をよく理解せぬ後代の写経生のずさんな筆写によって伝承が大きく損なわれてしまっている写本なので、つまらぬ誤りが非常に多い。

T2T3の系統は、章末のコロフォンに *iti śrīratnamālāvadānakathāyām* [...] と書く点でも共通性がある。題名を考察する時、*śrī-Ratnamālāvadānakathā* という題名をもつT2T3写本が、*Ratnāvadānamālā* という題名をもつP写本よりもテキストとしてはるかに粗悪な伝承に属するという事実は、*Ratnāvadānamālā* の題名の方が *Ratnamālāvadānakathā* の題名よりも古いことを示唆する。この *Ratnāvadānamālā* の題名の問題はすでに高島寛我出版本の *Ratnamālāvadāna* という奇妙な題名に関連して岩本裕が考察しており⁽⁹⁾、その結論は正しい。

Apparatus criticus

1b *yatiṃ*] PT2T3 : *yatiṃ* T1W : *om.* C.

2d *tathādeṣṭuṃ*] CPT2 : *tathāvaktuṃ* T3 : *tathākhyātaṃ* T1W.

2d *me 'rhasi*] W (*without avagraha*⁽¹⁰⁾) : *merhasiṃ* T1 : *marhasi* CPT3 : *mahasi* T2.

3b 'sau *yatiḥ*] CW : *so yatiḥ* PT1 : *sau yati* T2T3.

3c *upagupto*] CPT1W : *upaguptaṃ* T2T3.

6a *śrāvakaiḥ*] PT1W : *śrāvakais* T2T3 : *śrāvakāḥ* C.

6b *upāsakais*] PT1T2W : *upāsakais* C : *upāsikais* T3.

6d *upāsikāgaṇair*] CT2T3 : *upāsakāgaṇair* PW : *upāsakaugaṇair* T1.

7b *tathānyair*] T1T2W : *tathānyai* CP : *tathānyaiḥ* T3.

8c *dharmāmṛtaṃ*] CPW : *dharmāmṛto* T2 : *dharmāmṛtā* T3.

8d *samāyātāḥ*] CPW : *samāyāntāḥ* T2T3.

9b *sureśvaraḥ*] CPT2T3 : *sureśvaraḥ* T1W.

10c *nāgās*] CPT2T3 : *nāgāḥ* T1W.

11d *rājānaḥ*] *corr.* : *rājāno* CPT1T2T3W.

(9) 岩本裕 (1967) : 『佛教説話研究序説』、法藏館、173-179頁。

(10) Hereafter this note '*without avagraha*' is omitted throughout.

13b grāmyāḥ] T1T2W : grāmyā CPT3.

13b *kārvaṭikā] corr. : kārpaṭikā PT1T3W : kāpartiko C : kāpartikā T2. Cf. BHSD.

13d taddharmaṃ śrotum āgatāḥ] corr. : taddharmaśrotum āgatāḥ P : tat dharmaśrotum āgatāḥ C : dharmaśrotum samāgatāḥ T1 : taṃ dharmaśrotum āgatāḥ T2 : dharmām śrotum āgatāḥ T3 : dharmaśrotu<<ṃ sa>>māgatāḥ W.

16-17] C lacks stanzas 16 and 17.

16b puṭā] T2 : puṭo PT1T3W.

16d samāhitāḥ] T1W : samāditāḥ PT2T3 (< *samādr̥tāḥ?).

17b samupasthitān] T1T3W : samupasthitān T2 : samupāśritān P.

17d dharmam samādiśat] T2T3 : dharmā samādiśat P : dharmam ādiśat T1W.

18b sampramoditāḥ] PT1T3W : samprasāditāḥ T2.

18d babbhūvur bodhicāriṇaḥ] T1T2T3W : babbhūvu bodhicāriṇaḥ C : babbhūva bodhicārikaḥ P.

20c sarastīra] PT2W : sarastira T1 : sarastīre CT3.

21d samāhitāḥ] CPT1T3W : samāśritāḥ T2.

22a kācid] PT1W : kāścid CT2T3.

23a pradīptāgninibhā] corr. : pradīptāgninibho CT1T2T3W : pradīptānininbhā P.

24a viṇmūtra] P : vinmūtrā T1W : vidmūtra T2 : vinmūtra CT3.

24b °medhyahāriṇī] m.c. for °medhyāhāriṇī (= amedhya+āhāriṇī). Cf. 39d amedhyakhādinī.

24d duḥkhinī] PT2T3 : duḥkhinī CT1W.

25a virāvanti] P : virāvanti CT1T2T3W.

25b krandantī] CPT1W : krandanti T2T3.

25b kṣutpipāsītā] corr. : kṣutpipāsītāḥ CPT1T2T3W.

25d tadāmukham] PT2 : tadā sukham CT1T3W.

26d purākṛtām] PW : purākṛtaṃ CT1T3 : pupurākṛtaṃ T2. Cf. BHSD s.v. purākṛta (= puraskṛta).

27c carase] CP : parase T1T3W : pacase T2.

28c natvā] CT1T2T3W : dṛṣṭvā P.

29a bhadantāhaṃ] CT1 : bhadantohaṃ PT2T3W.

29b pāpiṣṭhā] P : pāpiṣṭha CT1T2T3W.

29d pṛcchatām] T1T2 : pṛcchayatām P : pṛcchatan T2 : pṛcchataṃ CT3 : pṛcchata W (metre!).

30d viramṣyanti] P : virasyanti T2T3 : virasyanti C : vinasyanti T1W.

31-33] P lacks 31cd, 32a-d and 33ab.

32b maudgalyam upāgataṃ] T3 : saudgalyām uyāgataṃ C : maudgalyāyaṇam upāviśat T1W : maudgalyāyaṇam upāsakaṃ T2.

34a vihārārthaṃ] T2T3 (excess of one syllable) : vihārārtha C : vihārthaṃ PW : vihārtha T1.

34d samāhitāḥ] CPT1T2W : samāśritāḥ T3.

- 35a kācit] corr. : kāścīt CPT1T2T3W.
- 35d pṛcchate] P : pṛcchate T1T3W : pṛkṣate C.
- 35-37] T2 lacks pādas 35d, 36a-d and 37a.
- 37b pṛcchatām] PT1 : pṛcchatam CT2T3W.
- 37d karma te] CPT1W : karmam te T2 : karmante T3.
- 38cd plotikām praṣṭum draṣṭum] P : plotikā praṣṭum (*omitting* draṣṭum) T1 : plotikām praṣṭum W : plotikām vakṣye draṣṭum T2 : pretikām praṣṭum draṣṭum T3.
- 39d bhramanty amedhya] P : bhramanto medhya T1W : bhramante medhya T2 : bhramante medhya T3 : bhramante madhya C.
- 40b jalāśrayāḥ] CT1W : jalāśrayā P : jalāśrayaḥ T2 : jalāśayāḥ T3.
- 41a *devo] ex conī : deve CPT1T2T3W. Cf. Avś i.254.1, yadā devo varṣati.
- 41d varṣam] PT2T3 : varṣa CT1W.
- 42b arhasi] T1T2W : arhati CPT3.
- 42d *viramṣyanti kaleḥ] ex conī (cf. 30d) : viramṣyanti kale P : viraṣyanti kale T1T3W : viraṣyanti kale CT2.
- 45a kāśīpure] CPT1W : kāśīpure T2T3.
- 45c āraṇyako] P : āraṇiko T1 : āraṇiko T2 : ārāmiko T3 : āraṇiko CW.
- 46a sa kadācit] CPT2T3 : sadā kaścīt W : sadā kaścī T1.
- 46c kṣiṇendriyo] PT2T3 : hīṇendriyo CT1T3W || vihināṃśo] CPT2T3 : vihināśo T1W.
- 47b hitakāmyayā] CPT2 : hitakāmāyā T1T3W.
- 47c hetoḥ śanair gatvā] P : hetoḥ śanīgatvā CT1W : hetoḥ śanīgatvā T2 : heto śanīgatvā T3.
- 48a sudhīr] PT1W : suhrd T2 : sudhī CT3.
- 49a bhikṣo kva] CPT3 : bhikṣo (*omitting* kva) T2 : bhikṣu (*omitting* kva) T1W.
- 49b 'tra] PT1W : ti T2T3 : ta C.
- 50b pratyekamunir] corr. : sa pratyekamunir CPT1T2T3W (excess of one syllable).
- 50cd pathyam auṣadham] PT1T2 : pathyasauṣadha W : pathyam auṣadham CT3.
- 51a prārthite] PT1W : prārthitam CT2T3.
- 51b sugatena] CPT3 : sugatona T1W.
- 51c yataye tasmai] PT2 : yagaya tasmai C : yattaye tasmai T3 : yatayasmai W : yataya<<na>>smāi T1.
- 52c sāmpreya] CPT2T3 : sāmpeya T1W || bhukṣva] CP : bhukṣva T1T3 : bhuktvā T2 : bhukṣvaṃ W.
- 52d svāस्थ्यam] T3 : svāस्थ्यam PT1T2W : svāsthom C.
- 53a samādiṣṭam] CPT2T3 : samāhiṣṭam W : samuhiṣṭa T1.
- 53b yatir āhitaḥ] P : yatīnohitaḥ T1W : yatīnāhitaḥ CT2T3.

- 54b sāmpreya] T2 : sāmpeya PT1W : sāmpaya T3 : sāpraya C.
- 54c sādhor] corr. : sādho PT3 : sādhoṃ T1 : sādhoḥ CT2 : sādho<<ḥ>> W || gr̥hapater] CPT2T3 : gr̥hapate T1W.
- 56a yate 'ha samā°] T1W : yate haṃ samā° C : yate rhan samā° P (also possible) : yate sahamā° T2T3.
- 57d śanair mandasvaro] P : śanair mandasvarā T2T3 : śanai mandasvarā T1W : śanai mandasvaram C.
- 58c bhūyāc ca] PT2 : bhūyāt tu W : bhūyāt cu T1 : bhūyābra T3 : bhūyādyā C.
- 58d siddhiḥ] CPT2 : siddhi T1T3W.
- 59b] in T2, pādas 59b-d, 60a-d and 61a come between 63a and 63b.
- 59c sāmpreya] T2 : sāmpeya PT1T3W : sāpeyaṃ C.
- 60c sāmpreya] T2 : sāmpeya PT1T3W : sāpeya C.
- 60d śraddhayā] T3 : śuddhayā CPT1T2W.
- 61b kṛpārditaḥ] PT3 : kṛpārditaḥ T1T2W : kṛpāmita C.
- 62a yataye] CPT2W : yataya T1T3.
- 62b sāmpreya] corr. : sāpeya CT1 : sāmpeya T3 : sāmpeya T2W : sāmpeya P.
- 62c dīyatām asya] CPT3 : dīyatām asya T2 : dīyam asya T1W.
- 62d suśāntaye] CPT1T2W : praśāntaye T3.
- 63c kāryārthe vyagritas] CP : kāryārthavyagritas T1W : kāryārthavyagratas T2 : kāryārthaṃ vyagratas T3.
- 63d janaiḥ] CPT3 : janai T1W : janas T2.
- 64b sā vadhūḥ] corr. : sa vadhūḥ P : vadhūḥ (*omitting sā*) T1W : vadhū (*omitting sā*) C : vadhū sā T2 : vadhū ca T3
- 64c īrṣyā] CPT2T3 : īṣyā T1W.
- 64c dīptāṅgī] corr. : dīptāṅgā CPT1T2T3W.
- 64d mānamātsarya] PT3 : mānasāmātsarya T1W : mānamātsara C : mānamāmānsaja T2.
- 65b °tāśayā] CPT1W : °tāśayāḥ T2 : °tāśayaḥ T3.
- 65d manasaivaṃ] T2T3 : masaivaṃ W : ma<<na>>saivaṃ T1 : manasaiva CP.
- 65d vyacintayat] P : vyacintayet CT2T3 : vicintayat T1W.
- 66b sāmpreya] corr. : sāmpeya PT1T2T3W : sāmpeya C.
- 66c pralubdhō 'yam] corr. : pralubdhāyam CT1T2T3W : pralubdhāyem P.
- 71d samalakṣata] P : samālakṣata CW : mālakṣata T1 : samalakṣita T2 : samālakṣataḥ T3.
- 72b gūhayitvā] CPT2T3 śūhayitvā T1W.
- 73b choritvā] CPT2 : chorayitvā T1T3W.
- 74b Hypermetre!

- 74c sāmpreya] corr. : sāmpeya PT1T2T3W : sāpeya C.
- 75b labdhvā] PW : labdhā CT1T2T3.
- 75b sāmpreya] corr. : sāmpeya CPT1T3W.
- 76a upāsīno] P : upāsīnā CT1T2T3W.
- 76b sāmpreya] corr. : sāmpeya PT2T3W : sāsyeya T1 : sāmpeya C.
- 76d nirvyādhiḥ] PT1T3 : nirvyādhi T2 : nivvyādhiḥ CW || svasthyam] PT1W : svastham CT2 : svasthyam T3.
- 77d baddhvābhyatiṣṭhata] P : baddhvātyatiṣṭhata T1W : badhvābhyatiṣṭhati T2T3 : badhvātyatiṣṭhat_ C.
- 78a tasmin sa samaye] P : tasmim samaye T2W : tasmim samaya C : tasmit samaye T1 : tasmim ca samaye T3.
- 78c bhadra] corr. : bhadre CPT1T2T3W.
- 79a bhartur] CT1W : bhartu PT2T3.
- 79b vāmā] CPT2T3 : vā T1W.
- 80a svāminn adya] CPT3 : svāmin adya T1T2W.
- 80b pātram amedhya] P : prātramṃ amedhya T1W : pātram amadhya T2T3 : pātratramadhya C.
- 80d samtyaktvaiko] PW : sa tyakaikā CT1T2 : sa tyaktvaikā T3.
- 81b śrutvaiivāsau] PT1W śrutvaiivāso T2 : śrutvaiivāsa T3 : śrutvaikaco C.
- 81b prakopitaḥ] CPT2T3 : prakopita T1W.
- 81d bhāryām] PT3 : bhāryā T1T2W : bhāryā C.
- 82a pāpini] CPT1W : pāpini T2T3.
- 82b īdr̥g api] T1W : īdr̥g ayi C : īdr̥gāpi P : ādr̥g api T2 : īdr̥sam pi T3.
- 82d pāpini] PW : pāpini T1T2T3 : yāpiniḥ C.
- 83a mamāpy atra] T2W : māmāpy atra C : bhamāpy atra T1 : mamānyatra P.
- 84a hantri] CPT1W : hanti T2T3.
- 84b vighātini] PT3W : vighātani T1 : vighātani C : vighātini T2.
- 85d tad] P : taṃ T1T2T3W : om. C.
- 86a gaccheś ced] CP : gacchec ced T2T3 : gacchasved W : gacchetvaṃd T1.
- 86b no cen] corr. : no cet T2 : no ce P : no ban T1W : no baṃ T3 : no ba C.
- 86c tat tvaṃ] P : tatvaṃ T1T2T3W : tatva C.
- 86d haṭhena] PT2 : haṭhena CT1T3W.
- 87a gr̥hastho 'sau] T3(marg.) : gr̥hestho sau C : gr̥hasmu sau T3 : gr̥hasmu so T1T2W : gr̥hastho sya P.
- 87d nyakāsāyad] P : nyakāsāya CW : nyaikāsāya T1T3 : nyekāsāya T2.

88a niṣkāśitā] T2T3 : nikāśitā P : nikāsitā C : niḥkāśitā T1W || bhartrā] P : bhatrā T1W : bhartā CT2T3.

88d tasthau gehāṅgaṅāśritā] P : tasmai gehāṅgaṅāśritā CT1T3W : tasmai gehāṅgaṅāśrayāḥ T2.

89bc °āturā / tikṣṇadamṣṭraiḥ] P : °āturāto kṣudraṣṭaita W : °āturā <<ta>>to kṣudraṣṭaita T1 : °āturāt / kṣudraṣṭaita T2 : °āturāto kṣudraṣṭaita T3 : °āturā / tām kṣudraṣṭaita C.

89d vighātītā] CPT1W : vighātītāḥ T2 : vighātītā T3.

90d bhartsyamānā] T2 : bhratsyamānā P : bhatsyamānā CT1T3W.

91a niḥśaraṇā] P : niśaraṇyā T1W : niśaraṇya C : niḥśaraṇya T2 : niśaraṇṇā T3 || *vibhagnāsā] ex conī : vibhagnāsya T2W : vibhagnasyā C : vibhagnāsyaṃ T1 : vibhaktāsya P : bhimagnāsya T3.

91d vibabhrāma] CPT2 : vibrambhrāma T1 : vibambhrāma T3W.

92b vibhramantī] P : vibhramanti CT1T2T3W.

92d vyatiṣṭhata] CT1T3W : vyatiṣṭhataḥ PT2.

93a parītāṅgī] P : paritāṅgī CT1W : patitāṅgī T2T3.

93c ciraṃ roga] P : vinīrāga T1T2W : virīrāga T3 : vinimutra C.

94b supāpinīm] PT1 : supāpiṇāṃ C : supāriṇāṃ WT2T3.

94c preṣayat] T2T3W : preṣat P : preṣayet CT1.

95b suduḥkhinī] PT2T3 : suduḥkhanī T1W : suduḥkhīnī C.

95d bhuñjanty] P : bhukṣanty W : bhukt C : śukranty T1 : śuklaty T2 : śukraty T3.

96a eṣāsā] CP : eṣāsmā T1W : eṣāsmān T2 : eṣāsmām T3.

96b mānyathā] CP : manyathā T1W : mānyatā T2 : mānyatām T3.

96d eṣā] CP : eṣām T1T2T3W.

97a vipākāni] CPT2T3 : vipāṣāni T1W.

98d caritavyaṃ] CP : calitevyāṃ T1 : calitavyāṃ T3W.

99b sadā] CT1T2T3W : mahā P.

99d miśritasya ca miśratā] P : miśritasyaivapi śrutā CT1T2T3 : miśritasyaivāpi śrutā W.

100a yenaiva] CPT2T3 : yenaivaṃ T1W.

100b bhunkte] PT3W : bhukte CT1T2.

102c sāmāgrīm] PT2T3 : sāmāgrī CT1W.

102c prāpya kālaṃ ca] CPT2T3 : prāpyate kālaṃ T1W.

103cd dharme prācaradhvaṃ] P : dharma prācaraṣṭhaṃ CT1W : dharme prācarathaṃ T2 : dharmā prācaratūṃ T3.

103d samāhitāḥ] CPT1W : samāhitaḥ T2 : samāhitā T3.

104c sabhālokaiḥ] T2T3W : sabhālokai CT1P.

104d satyam eva] T1W : satyam evaṃ CPT2T3.

105d śrāvaya tvam] CPT1T2W : śrāvayeyaṃ T3

106ab] T3 lacks pāda ab.

106a pratiṣṭhitvā] CPT1W : pratiṣṭhāpya T2.

106c dharme] P : dharma CT1T2T3W || pratiṣṭhāpya] CPT1T3W : pratiṣṭhitvā T2.

106d pālanīyāḥ prayatnataḥ] CPT2T3 : pālanīyo prajā tnutāḥ T1 : pālanīyā prajā tnatāḥ W.

107c bodhicarim] corr. : bodhicarīm] PT2T3 : bodhicarī CT1W.

107d cāpnuyāḥ] CPT1T3W : cāpnuyāt T2.

108d dharmam] T2T3 : dharma CPT1W.

108d pracārayeḥ] corr. : pracārayaḥ P : pracālayaḥ T2 : pracāraye T1 : prasāraye T3 : pracāraya W : pracārayaṃ C.

109d sajano] corr : sajanā CPT1T2T3W.

110b śṛṇvanti śrāvayanti] CPT1T3W : śrāvayanti śṛṇvanti T2.

110c dharmam] PT2T3 : dharma CT1W.

(Colophon:) iti pretikāvadānaṃ samāptaṃ //] PW : iti pretikāvadānaṃ samāptaḥ // C : iti pretika(sic!)vadānaṃ samāptaṃ //15 T1 : iti śrīratnamālāvadānakathāyāṃ pretikāvadānaṃ nāma paṃcadaśamaḥ // T2 : iti śrīratnamālāvadānakathāyāṃ pretikānāmāvadānaṃ paṃcadaśo dhyāyaḥ // T3.

RAM 第15章 Pretikāvadāna の非重要な異読の報告

明白な書き誤りとして、山のように沢山見つかる校定に無価値な異読が、校定に有用な異読(系統性のある誤り)を覆い隠してしまうことを恐れ、上記の Apparatus criticus とは別に、非重要な異読のみをここに集めた。以下に挙げるのはC以外の五本の写本(P, T1, T2, T3, W)の非重要な異読である。写本Cは誤りがあまりに多いため、非重要な異読をいちいち記録することを断念した⁽¹¹⁾。

1a athāsoko] athāsokaḥ T1. 1b upaguptam] upagupto T2. 1c kṛtāñjalipuṭo] kṛtāñjalim guruṃ T2. 2b punar anyat] punanyat T2. 4d caivam] cainaṃ T2. 4d cara] care T3. 5a bud-dhaḥ] buddho T3. 5b siṃho] siho T1. 7d nagottame] mahottame P. 8a nivāpākhye] nikāpākhye T1. 8b vijahāra] vijayāsāra T2. 9d vāhanāḥ] vāhanaḥ T2. 10a siddhā] siddha T3. 10d tathānye] tathānya T2. 11b tāpasā] tāpaso P. 11b brahmacāriṇaḥ] brahmacāribhiḥ T3. 12b mahāmātyāś] māmāmātyāś T3. 12c śreṣṭhinaḥ] śreṣṭhina T2. 14d prādrākṣus] prādrākṣas T3. 15c puraskṛtya] puraskṛtyaḥ T3. 15d samupāśritāḥ] samupāśritaḥ T2 :

(11) 写本Cのみは、他の写本と共通する誤り(系統性のある誤り)だけを拾って Apparatus criticus で報告する、という使い方をした。

samupāsritā T3. **16d** dr̥ṣṭvā] dr̥kkā T2. **17a** buddho] buddhaḥ T2 : buddhoḥ T3. **19a** tas-
 miṃś] tasmim̐ T2 || samaye] samaya T1 || bhikṣur] bhikṣu T2T3. **20b** yācitvā ca bahirgataḥ]
 yācitvā bahirgatāḥ T2. **20c** sthitaḥ] sthita T2T3. **21c** gr̥dhra] gr̥ddhakūṭe] gr̥ddhakūṭe T3. **22c**
 sūcīrandhra] sūcīrandha P || mukha] mukhā T2. **23b** saṃchanna] saṃchinna P. **23c** kaṅkāla]
 kaṅkāra T2. **23d** °ākṛtiḥ] °ākṛtī T2 : °ākṛtiḥ T3. **24b** durgandhāme°] durgandhime° T2.
24c tīvrāti] tīvrātī T3. **24d** °ākṛtiḥ] °ākṛtiḥ T2. **25a** svara] svarā T3. **25d** paryadhāvat]
 paryadhāva T2. **26a** athāyuṣmān] athāyuṣmā T1. **26b** tāṃ] tā T1. **27c** yenaivaṃ] yenaiva
 T3. **28a** āyuṣmatā tena] āyuṣmatāntena T3. **28b** pṛṣṭāsau] pṛṣṭosau P. **28c** maudga-
 lyāyanam̐] maugalyāyanam̐ T3. **29d** jinam] jina T1. **30b** karma] karmaṃ rman T1 : kamaṃ
 T3 : katham̐ T3(marg.). **30c** yac] yaṃ T3 || sattvās] satvā T3. **30d** pāpataḥ] pāpatā T3. **33a**
 ādiṣṭam̐] ādiṣṭe T3. **33b** maudgalyāyano] maudgalyāyaṇā T2 || yatiḥ] yati T3. **33d** kṛtāñjalis]
 kṛtāñjali P. **34a** bhagavann] bhagavan T2. **34b** gr̥dhra] gr̥dha T1. **34c** vṛkṣamūle] vṛkṣamūle
 pi T2. **35a** pretikā] pratikā T1. **35cd** pāpam̐ ity] pāpaṃmaty T3. **36c** bhadantāham̐] bhadan-
 toham̐ P. **36d** pāpiṣṭhā] pāpiṣṭha T1. **37c** jino 'smākam̐] jināsmākam̐ T2T3. **38a** pratiśrutya]
 pariśrutya T2. **38c** tatkarma] tatkarmaṃ T3. **38d** samāvraje] samāvrajet T2. **40d**
 paṅkaśeṣāḥ] paṅkaśeṣā P. **41a** yadā] yadvā T2. **41b** tasyā dehopari] tadehopari T1. **41c** vis-
 phuliṃgitam] visphuliṃgatam P. **41d** aṅgāra] aṅgāla T2. **42c** sattvās ca] satvā ca T2. **43b**
 muniśvaraḥ] muniśvaraḥ T1. **43c** sabhām̐] sabhā T1. **43cd** sabhām̐ cāpi saṃdr̥ṣṭvā caivam] ca
 sabhām̐ cāpi saṃdr̥ṣṭvaivam̐ ca T2. **44a** maudgalya] maudgalyāyaṇa T2 || vakṣye 'ham̐]
 vakṣyāham̐ T1. **44b** purā] purāt T2. **44d** saṃśrāvaya] saṃśrāvayat T3. **45b** pratyeka] prate-
 ka T1. **46d** 'bhavat] dbhavet T2. **47a** vyādhitāś cāpi] vyādhitacāpi P. **49c** rogam̐] rāgan T1 ||
 vardhate] vardhata T1. **50c** vaidya] vaidye T1. **51b** pratyeka] pratyaka T1. **52d** tataḥ] tato
 P. **54a** tatra] tataḥ T3. **54c** gehe] geha T1. **54d** samupāviśat] samupādiśat T3. **55a**
 tatraivaṃ taṃ] tatreyantaṃ T3. **57c** samālokya] samālokye T1. **60b** mamaitad] tamaitad
 T3. **60c** bhojanam̐] bhojana P. **61a** ity etat] ity atat T1 || prārthite] prārthitaṃ T3. **61c**
 saṃpratijñāya] saṃtiddhāya T2 : saṃpratiddhāya T3. **62a** vadho] vadhā T2 || 'smai] smim̐
 T3. **63a** vadhūṃ] vadhuṃ P. **64b** kuṭilāśayā] kuṭilāśayāḥ T3. **65b** mātsarya] māṃsaya
 T2. **65c** anādr̥tya] anāhṛdya T3. **66a** adyāsmāi] adyasmai T2. **66c** bhūyaś cāpi] bhūyaḥ
 ścāpi P : bhūyaś copi T2. **66d** nityaśo 'pi] nityaścāpi T1. **68a** vāmā] cāmā T2. **68b** duṣṭa]
 duṣṭo P. **70b** pātram̐] pātra T3. **70d** °āpāsarad] °āvāsarad P || bahiḥ] bahi T2. **71b**
 nirvikalpikaḥ] nirvikalpikāḥ T3. **71c** imaṃ] imāṃ T3. **72a** eṣā] eṣāṃ T3. **72b** svavarcasam]
 svavarvasam̐ T3. **74a** tatra] tata T3. **74b** gr̥hapatir] gr̥hapati T2. **79a** vacaḥ] vaca T3. **80c**
 chāditaṃ] chādita T1. **81c** tāṃ] taṃ T2. **82c** karma] marka T2. **83cd** pāpinyā bhāryayā]
 pāpibhāryayā P. **84c** ihāmutra] ihomutra T3 || vinaṣṭāsi] vinaṣṭosi T2. **84d** tyajyase] tyajase
 T3. **85b** kāntayā] kāntāyā W. **85d** svake] svakaṃ T2. **86a** gaccha tvam̐] gacche tvam̐ T3.

87a ity ākrūṣya] ity uktvākruṣya T2. 88c nirāśrayā] nilāśayā T3. 89b pipāsā°] pipāsā° P. 89c śvabhir] śvabhi T3. 89d bhaṣyamānā] bhakṣyamānā T2. 90b kucailikā] kucailikāḥ T2 91b paritāpitā] paripāpitāḥ T2. 93a tataḥ] tato T2. 94a dharmarājāsau] dharmarājā so P. 95a tato 'dyāpi] tāto pāpi P. 95c kṛcchreṇā°] kṛcchraṇā° T1 || °medhyam] °madhyam T3. 96d bhramiṣyati] bramiṣyati T3. 97c durgatiṃ] durgati T1. 98a pāpāni] vyāpāni T3. 98c pravīhāya] pravīhāṇiya T2. 99a pāke] pākte T3. 100d karma] karmām T3 || kathamcana] kathamcane T3. 102a naśyanti] naśānti T3 || hi] om. T2. 102d khalu] phalu P. 103b yadicchatha] yadicchatha T2. 104a śāstrā] śāstā T3. 104d pramenire] pramānire T3. 106a dharme] dharmā T1. 107b saṃbhavet] sabhavet T3. 108c praṇidhānena] pratidhānena T2. 110a idaṃ] ivam T1 || pretyavadānaṃ] pretāvadānaṃ T2. 110c pāpa] pāpaṃ T3. 110d yānti] yāti P || sukhāvatiṃ] suṣāvatiṃ T1.

RAM 第15章『餓鬼女アヴァダーナ』和訳

vv.14-110

その時すべての者たちは竹林精舎の精舎の修行場に来て、集会場の中に坐って、かの牟尼の王（仏）を見つめました。[14](#1) それから拜礼して敬意を示しつつ、三度の右邊を行い、[仏を] 囲みつつ [仏を] 前に置いて、順々に近くに寄りました。[15] その正法の甘露を飲もうと、喜びつつ合掌して、仏の蓮のような容を見ながら、注意を集中しておりました。[16]

するとかの世尊・仏は、近坐した彼らを見て、始めも中頃も終わりもすばらしい、聖なる教えをお説きになりました。[17] その正法の甘露を飲んで、彼ら全員は歡喜させられ、それに隨喜して、菩提行をなす者となりました。[18]

その頃、自知者（悟りを得た者）である比丘目連は、杖と鉢を持ち、ラージャグリハ（王舎城）に入りました。[19](#2)

そのラージャグリハで食を乞い、[都城の] 外に出て、川岸に来て乞食で得た食を食べから、そこを立ち去りました。[20](#3)

その後、昼の休息のために、無上の山である靈鷲山の一本の樹の根元に寄り、心を集中させて坐りました。[21](#4)

その時ひとりの餓鬼女が、焼けた丸太のような姿で、針の穴のような口の穴をもち、腹は山のように大きく、[22](#5) まるで燃える火そっくりで、燃える髪の毛に体は覆われ、身体は痩せて、骨ばかりになった肢体をもち、ぞっとさせる姿で、[23]

全身に糞尿が塗られ、悪臭を放つ糞を食べており、鋭い激痛に襲われ、苦しみ、醜惡な姿をして、[24] 苦悩の叫び声をあげ、泣き叫び、飢えと渇きに悩まされており、かの目連を見ると、彼の面前に走ってきました。[25]

すると偉大な方、かの具壽は、その餓鬼が寄って来たのを見て、すぐに前に行き、敬意を示し、彼女に次のように尋ねました。[26](#6)

「餓鬼女よ、このように餓鬼としてあなたが彷徨うとは、かつてあなたはどのような恐ろしい罪惡をなしたのでしょうか。私の前で、それをお話し下さい。」[27]

このようにかの具壽に尋ねられたその餓鬼女はその時、哭泣しながら、かの目連に頭を下げて、次のように言いました。[28](#7)

「尊者よ、私は大變罪深く、極惡の者として、苦しみを受けています。どうして私が〔己の〕罪惡を語りましょう。あなたの師、勝者にお尋ねください。[29] 一切智・勝者であるかのお方があなたに私たちの業を説明するでしょう。それを聞いて、他の有情たちも惡をやめるでしょう。」[30]

「そういたします」と答え、かの出家目連はそれから急いで竹林精舎に来ると、中に入りました。[31](#8)

その時、かの世尊はその目連がやって来たのを見て、「憐れみから、あなたはよくおいでになられた。善い人よ、いらっしゃい」とおっしゃいました。[32](#9)

このように牟尼の王に言われたかの出家目連は、ただちにかの師に頭を下げて、合掌しながら次のように語りました。[33](#10)

「世尊、私は今日〔昼の〕休息のため、無上の山・靈鷲山の一本の樹の根元に寄り、心を集中させて〔そこに〕居ました。[34] そこに或る一人の餓鬼女が私の前に走ってきましたので、『あなたはどんな罪惡をなしたのですか』と私はその者に尋ねたのです。[35] するとその餓鬼女は私の前で次のように語りました。

『尊者よ、私は大罪人・極惡の者であり、苦しみを受けています。[36] どうして私が〔己の〕罪惡を語りましょう。善逝（仏）・師にお尋ねください。一切智・勝者であるかのお方があなたに私どもの業を説明するでしょう』と。[37]

『そういたします』と私は答えて、それからここに来たのです。彼女の『業の連繫』（karmaplotikā）を尋ねるため、あなた様に会おうと、やって来ました。[38]

尊者よ、餓鬼女となって彷徨いながら糞便を食べるとは、いったい昔どんな業を彼女は作ったのでしょうか。[39] 彼女が見ただけで、その瞬間にあらゆる沼池がいちめん泥だけ残して干上がってしまうのです。[40] 雨が降る時にはいつも、彼女の体の上では火花を散らす〔焼けた〕炭の雨がたちまち落ちます。[41] 彼女がなした罪惡をどうかお教え下さい。それを聞いて他の有情たちも惡徳をやめることでしょう。」[42]

このように彼が願うのを聞いて、覺者・かの牟尼の王は、その目連と集会の衆を見て、次のようにお説きになりました。— [43](#11)

目連よ、聞きなさい。かつて彼女がしたことを語りましょう。それを聞いて、説示の時に世間の人々に、同じ様に聞かせなさい。[44]

昔、有名なカーシーの都城に、自知者（悟りを得た者）たる独覚（pratyekabuddha）がいました。林住者であり、心堅固な方であり、劣弱な者や惨めな者たちを憐れまれる方でした。[45](#12)

ある時その方は自らの運命により、労咳（kṣayaroga 消耗の病）に罹りました。感官は衰え、体は衰弱し、四肢の力が弱まり、痩せました。[46](#13) 病気のその方は、世の人々を益せんと欲して、乞食のために、ゆるゆると進んでベナレスに入りました。[47]

其処で或る賢い医師が、道をゆるゆる進む彼を見て、労咳にかかっていると思い、次のように言いました。[48](#14)

「もし、比丘よ！あなたはどこに行かれ、ここに何をしに来られたのですか。身体中であなたの病は増進します。それ故、どこにも行ってはなりません。」[49]

このようにその医師が話した時、独覚は言いました。「おお、医師よ、病を消すために適した薬を私に下さい。」[50]

このようにその独覚から請われると、彼は「よろしい」と言って、その出家のために適した薬を処方しました。[51]

「出家よ、お聞きなさい。あなたの病を消すため、益になる事をお教えします。[薬として、滋養のある] 体に適した食事（sāmpreya-bhojanam）を摂りなさい。それで健康を取り戻すでしょう。」[52]

このように彼が教えると、その出家は注意を払って聞いて、「わかりました」と答え、その[食事]を乞うために[街を]歩きました。[53]

その[街]でかの独覚は、正しい（pathya）体に適した食事を乞うため、一人の善良な資産家の家を訪れました。[54](#15)

その[家]では、こうしてやって来た彼を見て、その家長は喜んで、直ちに招き入れて、お辞儀して次のように言いました。[55](#16)

「さあ出家よ、こちらにいらっしゃい。ここに何かご用ですか。何のために来られたのですか。それをお教えください。」[56]

このように彼に求められると、その独覚である出家は、その家長を見ながら、弱い声でゆっくり語りました。[57]

「善良な方よ、あなたに健康がありますように。至るところ、幸せがありますように。希求された目的において、悟りの成就において、達成がありますように。[58] 私は労咳に苦しんでいます。そのため私の病をよく消除するために『正しい、体に適した食事を[摂るように]』と医師に教えてもらいました。[59] それ故、善良な方よ、憐れんで、私のこの病を消すため、体に適した食事を私に下さい、[あなたの]信心によって。」[60]

このようにその〔食事〕を彼に求められたその家長は、同情心に苦しみつつ、「わかりました」と承諾して、妻に次のように言いました。[61]

「妻よ、お前はこの出家に、正しい体に適した食事をあげなさい。この方の労咳をよく消除するために、与えなくてはなりません。」[62]

このように妻に命じてから、その家長は外に出て行きました。〔外で〕友人たちと一緒に、なすべき仕事に忙しく没頭していました。[63]

家長のその妻はねじれた心もち、妬みの火が体に燃えさかっており、傲り (māna) と慳貪 (mātsarya) を内に抱いていました。[64](#17)

彼女はその出家比丘を見て、慳貪に激しく動かされた心で、一族の慣習法 (kuladharmā) を顧慮せず、心中でこう考えました。[65]

「もし今日私がこの者に正しい、体に適した食事を与えれば、今後この者は欲しがって、しょっちゅうやって来るに違いない。[66] この欲ばりな者がもう二度とここにやって来ないように、手を打って、この者を森に追い払ってやろう。[67]

このように決意して、その極悪な、罪深い心をもつ美人は、ただちに鉢を受け取ると、家の奥に入りました。[68](#18) 其処ですぐに鉢を自分の糞便で満たすと、食べ物をその上に置いて、彼に与えるため戻ってきました。[69] そしてその女は自ら鉢を持って素早く近寄って、喜んでその独覚に与えると、外に去りました。[70]

疑うことを知らない、真っ直ぐな心のその独覚は〔受け取ってからようやく〕その鉢が悪臭を放つことに気づいて、こう思いました。[71](#19) 「あの若おかみは、鉢中の自分の糞便を食べ物で隠して、それを私に与えて、外に去った。」[72]

こう思い、彼はその鉢を捨てて、外に立ち去りました。沐浴・洗浄など行ってから、別の人の家に行きました。[73](#20)

其処ではその出家がやって来たのを見て、別の資産家は喜んで、彼が望むとおりに、彼に体に適した食事を与えました。[74] するとその独覚は体に適した食事を得るとすぐさま其処を出て、自分の修行場に赴きました。[75] その〔修行場〕で池の傍に坐り、体に適した食事を食べました。すぐに病気から解放されて無病となり、健康に戻りました。[76]

さてかの邪悪な美人は、その出家が出て行くのを見ると、すぐに自分の家に戻り、門を締めて、〔門の所に〕留まっていた。[77] その時、彼女のその夫が自分の家に戻って来て、「お前、なぜそうして立っているのだい」と妻に尋ねました。[78]

夫のその言葉を聞くと、その愚かな美人は、夫を見て笑いながら、このように言いました。[79]

「旦那さま、今日私が与えた鉢が、糞で満たされ、食べ物で隠されているのを知って、一人の出家が〔それを〕捨てて、去りました。」[80]

このように彼女が語ったのを聞くや、彼は激怒し、その己が妻を怒鳴りつけ、叩いて、非難しました。[81]

「ああ、罪深い女、お前は恥を知れ！お前がこんなことをするなんて！どんな別の墮地獄の行為をも〔お前が〕しないことがあろうか、悪女よ！[82] ああ、このように、この輪廻において、こんな邪悪な妻と一緒にになった人生を私が生きようとは！[83] お前は、一族の法（kuladharma）の名誉を壊す女、自分と他人を自ら滅ぼす女、この世でもあの世でも破滅した女だ。美しくても、私はお前を捨てる。[84] こんな罪悪をやつてのける妻は、美人でも私には要らない。お前は完全に捨てられた。だから、早く自分の家から出て行け。[85] 出て行くなら早く出て行け。さもないと私はお前を殺す。だから、お前は私への愛を捨てて、ここを立ち去れ。どうしてお前に暴力を振るう必要があるだろう。」[86]

こう、家長は悪女であるその美人を怒鳴りつけ、首筋を掴むと力づくでこのように家の外に追い出しました。[87]

このように夫に追い出されたその邪悪な心の女は、寄る辺もなく、絶望して、家の中庭に身を置いて、留まっていました。[88] 其処でその若い女は、飢えと渴きに苦しめられ、鋭い牙をもつ犬たちに絶えず吠えられ、攻撃され、[89] そのような過度の〔苦の〕感受に襲われ、髪はざんばらに解け、襤褸を着て、まるで幽鬼（bhūṭini）のように、苦しみ襲われた体で、至る処で脅かされながら、[90] 寄る辺なく、絶望し、飢餓の火に焼かれ、杖にすがって、乞食のために家を一軒一軒回りました。[91] このようにあらゆる所で家々を巡り歩き、疲労困憊し、難儀してやっと食べ物にありついては、食べながら、立っていました。[92]

その後、疥癬に全身が覆われ、重い皮膚病に罹り、膿を流して、久しく病に苦しんでから死に、閻魔の住まいに行きました。[93] 其処で法王（閻魔）は彼女を極重の悪女と見なし、懲罰において、〔彼女を〕ただちにかの餓鬼の住処（餓鬼界）へ行かせました。[94]

その後、今日においてもその女は餓鬼女となって、とても苦しみ、難儀して糞便にありついては、それを食べながら、このように彷徨い歩いています。[95](#21) この罪深い女には実にそれ以外の別な状態があるとは考えるべきではありません。そのように苦しみに焼かれながら、この者は久しく彷徨い続けるでしょう。[96]

このように業果を味わいながら、生き物たちは〔輪廻を〕彷徨っています。罪悪により悪趣に赴き、福德により善趣に赴きます。[97](#22) このように認識して、悪い行為と〔善悪が〕混在した行為を捨離して、常に絶えず善行をなしなさい。[98]

白浄の業が熟する時、常に楽があります。罪悪には苦があります。同様に〔善悪〕混じった行為には〔楽苦が〕混じった〔果〕があります。[99] 或る者が作った業は、その者のみはその果を味わいます。業が味わわれずに、どこかで消滅してしまうことは決

してありません。[100] 業は火に焼かれることもなく、水に濡れることもなく、風に乾涸らびることもなく、土の中で滅することもありません。[101] 十億劫を経ても、業が滅することはありません。[条件が] 集まり揃って、時を得れば、生きる者たちに果報をもたらします。[102] このように考えて、この輪廻で絶えざる幸せを願うなら、あなた方はいつも一心に白浄の法を行じなさい。[103]

—このように師（仏）が教示されると、それを聞いてすべての比丘たちは、その集会場の人々と共に、「実に真実である」と思いました。[104](#23)

—以上、私が師から聞いたことを、私はあなたにお話ししました。大王よ、このように聞いて、あなたも民衆に聞かせなさい。[105] 自ら法の上にしっかり立って、民衆を教化して、白浄の法の上にしっかり立たせて、努力して[民衆を] 護りなさい。[106] そうすればあなたにこの世でもあの世でもいつも幸せがあるでしょう。次第に菩提行を満たして、悟りに達することでしょう。[107] 大王よ、このように考えて、三宝に帰依し、悟りへの誓願により、法を世間に広めなさい。[108]

—このようにウパグプタ比丘が教え諭すと、[アショーカ] 王は真実をその通りに認識して、人々と一緒に喜びました。[109]

この『餓鬼のアヴァダーナ』（pretyavadāna）を聞く者たち、聞かせる者たちは、悪をやめて、教え（法）を行い、スカーヴァティー（極楽）に赴く。[110]

以上、『餓鬼女アヴァダーナ』（Pretikāvadāna）終わる。第15章。

第4節 Avadānaśataka 第44章 Varcaghaṭaḥ と RAM 第15章の比較

上の節でテキストと和訳を示した RAM 第15章 Pretikāvadāna の原話である Avś 第44章の全訳を次に示し、その後、それらの RAM と Avś の二つのテキストを対照させてみたい。

アヴァダーナ・シャタカ第44章『糞の鉢壺』（Varcaghaṭaḥ）和訳

SPEYER, vol. I, pp. 252-255

#1 仏・世尊は、王や大臣や財産家や市民や長者（富商）や隊商長や神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに敬意をもって遇され、重んじられ、尊ばれ、供養されておりました。このように神や龍や夜叉や阿修羅やガルダやキンナラやマホーラガに崇められた仏・世尊は高名で、大福德に恵まれた者であり、衣服・施食・臥具坐具・病氣治療のための薬といった日用品を得ており、弟子たちを有する僧伽とともに、ラージャグリハ（王舎城）にある竹林園、栗鼠養餌処 [精舎] に滞在しておりました。

#2 具壽大目連は午前にも身支度をして、鉢と法衣を持って、ラージャグリハに托鉢するため入りました。

#3 ラージャグリハで托鉢行をし、食事をすまし、午後に托鉢から戻った彼は、鉢と法衣を片付け、霊鷲山に赴きました。

#4 着くと、霊鷲山の奥に入り、或る一本の樹の根元に寄り、昼の休息 (divāvihāra) のために坐りました。

#5 その時具壽大目連は、餓鬼女を見ました。焼けた丸太のような姿で、裸で、自分の髪と体毛に覆われ、針の穴のような [小さな] 口をもち、腹は山のように大きく、焼かれ燃え燃焼し、一つの焰の塊となって炎上しながら、苦悩の叫び声をあげていました。渴きに悩まされ、鋭く荒々しく激烈で意に適わぬ、苦痛の感受を得ており、臭く、ひどい悪臭を発し、まるで糞便そのものの如くであり、また糞を食べており⁽¹²⁾、それ (糞) すら苦勞してやっと [食物として] ありついでいました。

#6 具壽大目連は戦慄し、餓鬼女に尋ねました。「あなたは一体いかなる罪惡をなしたため、このような果をあなたは得たのですか。」

#7 餓鬼女は答えました。「尊師大目連よ、私は罪惡をなした者です。この事を仏・世尊にお尋ね下さい。かのお方があなたに私どもの『業の連繫』 (karmaploti) を説明するでしょう。それを聞けば、他の有情たちも、この世で惡をやめるでしょう。」

#8 具壽大目連は世尊のもとに赴きました。

#9 その時、世尊は独坐 [の状態] から出立され、四衆に対して純粋な蜜蜂のように甘美な甘美な教えを説かれました。数百人の会衆は諸感官の動きを抑えて (気を散らすことなく)、世尊から甘美な甘美な教えを拝聴しました。その後、先に挨拶をされる方・人を和ませるように語る方である諸仏・世尊たちは『さあいらっしゃい、よくおいでになられた』と [歓迎の言葉を] 述べ、先に微笑まれるのです。其処で世尊は具壽大目連に次のように語りました。「大目連よ、いらっしゃい。あなたはよくおいでになった。大目連よ、あなたが今来られたのはなぜですか。」

#10 大目連は答えました。「尊師よ、私は餓鬼界を巡遊してから、こちらに参りました。そこでそこで私は餓鬼女を見ました。焼けた丸太のような姿で、裸で、自分の髪と体毛に覆われ、針の穴のような [小さな] 口をもち、腹は山のように大きく、焼かれ、燃え、燃焼し、一つの焰の塊となって炎上しながら、苦悩の叫び声をあげていました。渴きに悩まされ、鋭く荒々しく激烈で意に適わぬ、苦痛の感受を得ていました。 [彼女が] 見るや否や、河も井戸も干上がります。雨が降る時は、彼女の上では火花を発す

(12) SPEYER 本は B 写本に基づき、varcohārām と読むが (p. 253, l. 2)、EDGERTON は varcohāra の語形を認めず、varcāhāra と読むべきとする (BHSD, s.v. varcāhāra)。意味は「糞を食べ物とする者」 (varcas+āhāra, Bhvr.)。

る [焼けた] 炭となって落ちます。臭く、ひどい悪臭を発し、まるで糞便であるかのようであり、また糞便を食べており、それ (糞) すら苦勞してやっと [食物として] ありついでいました。

彼は語りました。 [韻文:]

苦惱の声を叫びながら、苦の感受を味わっています⁽¹³⁾。

苦しみつつ、糞溜めがある所へ走ってゆき、「糞を飲みたい、食べたい」と思い、それを苦勞して得ています。

これほど恐ろしい苦しみを受けるとは、彼女は [かつて] 人世で一体どのような恐ろしい罪惡をなしたのでしょうか。

#11 世尊はおっしゃいました。「目連よ、かの餓鬼女は罪惡をなしたのです。あなたは彼女の『業の連繫』を聞きたいですか。」「尊者よ、その通りです。」「それでは目連よ、聞きなさい、しっかりと [話に] 思念を向けなさい。話しましょう。—

#12 目連よ、昔ペナレスの都城に或る一人の独覺 (辟支仏) がいました。劣弱な者や惨めな者たちを憐れみながら、人里離れた辺地に臥具坐具を用いて暮らす方でした。

#13 彼は病にかかり、ペナレスに托鉢に入りました。

#14 その折、 [彼を見かけた] 医者が彼のために [滋養のある] 体に適した食事 (sāmpreyam bhojanam) を処方しました。

#15 彼は或る一人の長者の家に赴きました。

#16 その長者は [彼を] 見て尋ねました。「聖者よ、何か必要なものがございませうか。」彼は答えました。「家庭の [滋養のある] 体に適した食事が必要なのです」。そこで長者は妻に命じました。「体に適した食事を聖者に与えなさい。」

#17 その時彼の妻に慳貪の心 (mātsarya) が生じました。「もし今日この者に食事を与えたら、明日もまたやって来るだろう。」

#18 彼女は [家の] 隅に引っ込むと、鉢の中に糞便を満たし、その上を食べ物で覆って、その独覺に与えました。

(13) SPEYER は脚注で (I, p. 254, fn. 1) この詩節には前半部分が欠けていて、そこには nagnā svakeśasamchannā のような pāda で開始されていたかも知れないと推測する。しかしこれは一つの憶測であるので、SPEYER は本文においてその箇所を空白のままにしている。VAIDYA 版ではこの SPEYER の意見をさらに進めて、pāda b として asthyantravad ucchritā をも付け加えて、本文テキストに nagnā svakeśasamchannā asthyantravad ucchritā | (裸で、自分の毛で [体を] 覆い、骸骨のように高く直立して) として pāda ab を補う。しかし蔵訳を見ると、梵文写本と同様な形なので、そのため句が欠落している明白な証拠はない。もし欠落があったとしても、少なくとも VAIDYA のように安直な形で句を補うことには疑念を抱かざるを得ない。ここでは欠落した形のまま訳した。

#19 声聞・独覚たちは、精神を集中しないと〔真実を見透す〕知見が起こらないものです。その方は〔気づかずに〕受け取りました。受け取ってから、それが悪臭を放つことに気づきました。「あの女は糞便を〔鉢に〕満たしたに違いない」と思いました。

#20 そして、その偉大な心の方はそれを片隅に捨てて、立ち去りました。

#21 世尊はおっしゃいました。「目連よ、どう思いますか。まさにその時、長者の妻であったその女が、かの餓鬼女なのです。彼女はそのような罪惡をなしてから、それ以後いつも地獄・畜生・餓鬼に生まれては、糞便を食べているのです。

#22 それ故、その餓鬼女が有した、そのような罪過があることがないように、目連よ、あなたは慳貪を捨離するよう、努力しなさい。目連よ、このように学びなさい。—

#23 このように世尊は説かれました。感激した具壽大目連と他の神・アスラ・ガルダ・キンナラ・マホーラガ等は世尊のお説きになった〔教え〕を喜んで受け入れました。

以上が Avs 第44章『糞の鉢壺』(Varcagataḥ) の全訳である。

女が沙門の乞食の鉢の中に糞便を入れてその上に飯を置いたというモチーフの並行話としては、旧雑譬喻経巻下、(42)話 (T4 517b) がある。旧雑譬喻経の話では、その報いとして悪女の口中と身体から悪臭が発し、人々は彼女を見て走って逃げるようになり、死後は沸尿地獄に堕ちたという。そして数千万年の間、三惡道を展転した後、女は再び人間界に生まれるを得たが、常に大便を食べたいと思い、夜中に起きて大便を盗み食いしていたので、怪しんだ夫が覗き見し、その行為を見てしまったという。

では先と同様に、以下にこの Avs 第44章と Ratnāvadāmālā 第15章 (略号 R15) との対応を示すための対照表を挙げたい。記号の○は Avs の内容が R15 の詩形改稿において膨張している箇所を示す。◎は異常に膨張している箇所を示す。

#1 i.252.2-6 buddho = R15 vv.5-18◎

#2 i.252.6-7 athāyusmān = R15 v.19

#3 i.252.7-8 rājagrhaṃ piṇḍāya = R15 v.20

#4 i.252.8-9 upasaṃkramya = R15 v.21

#5 i.252.9-253.2 athāyusmān = R15 vv.22-25

#6 i.253.2-4 dṛṣṭvā ca = R15 vv.26-27

#7 i.253.5-7 preti āha = R15 vv.28-30

#8 i.253.7 athāyusmān = R15 v.31

#9 i.253.8-12 tena khalu samayena = R15 v.32

#10 i.253.12-254.8 mahāmaudgalyāyana = R15 vv.33-42

#11 i.254.9-10 bhagavān āha = R15 vv.43-44

- #12 i.254.11-12 bhūtapūrvam = **R15** v.45
 #13 i.254.12 sa vyādhito = **R15** vv.46-47
 #14 i.254.12-255.1 yāvad asya = **R15** vv.48-53○
 #15 i.255.1 sa yenānyatamasya = **R15** v.54
 #16 i.255.1-3 tena ca śreṣṭhinā = **R15** vv.55-63○
 #17 i.255.3-4 atha tasyā = **R15** vv.64-67
 #18 i.255.4-5 tayā ekāntam = **R15** vv.68-70
 #19 i.255.5-7 asamanvāhṛtya = **R15** vv.71-72
 #20 i.255.7-8 tato 'sau = **R15** vv.73-94◎
 #21 i.255.9-11 bhagavān āha = **R15** vv.95-96
 #22 i.255.11-12 tasmāt tarhi = **R15** vv.97-103○
 #23 i.255.13-14 idam avocad = **R15** v.104

以上の二つのテキストの対照を見ると、**R15**の韻文テキストは Avś 第44章に基づいてその再話がなされており、その原話の内容の順序どおりに語りを行っていることが確認できる。ただし章の最初と末尾にあるウパグプタ長老とアショーカ王の対話という話の外枠の部分 (**R15** vv.1-4, 105-110) は Avś には無い。

Avś の#1の相当箇所、その原話の Avś の内容が**R15**において (vv.5-18) 膨張している理由は、仏の説法に集まった聴衆を詳しく記述するためである。仏を中心にしてその周囲に様々な人の集団や神の部族が配置される一種の曼荼羅のイメージの発想から、**R15**はここで詳しく聴衆をグループに分けて描いているように思われる。

Avś の#14の相当箇所、原話の Avś の内容が**R15**において (vv.48-53) やや膨張している理由は、医者が独覚のために食事を処方する有様を、より生き生きと具体的に、両者の対話という形で表現しているからである。

Avś の#16の相当箇所、Avś の内容が**R15**において (vv.55-63) やや膨張している理由は、長老と独覚の間に交わされた会話を、挨拶を含めた、より日常的な会話に近いものにしてからである。

Avś の#20の相当箇所、Avś の内容が**R15**において (vv.73-94) 異常に膨張している理由は、Avś には無かった次の (a)～(d) の内容を新たに話に付け加えたからである：(a) 独覚は別の長老の家で体に適した食事を手に入れて健康を回復したこと (vv.73-76)、(b) 悪い妻の仕業を聞いた夫の激怒と離縁・放逐 (vv.77-87)、(c) 放逐された妻がその後味わった悲惨な生活 (vv.88-92)、(d) 妻は病死した後に閻魔に裁かれ餓鬼界に落ちたこと (vv.93-94)。

Avś の#22の相当箇所、そのAvś の内容が**R15**において (vv.97-103) 少し膨張している理由は、RAM の他の章にも見られる、業の教義を念押しするためのお定まりの表現

(これはもともと Avs に頻出する定型句に由来する) が、ここで繰り返されているからである。

R15とS30の比較

R15とS30の二つの話を比較すると、文体等の同質性 (homogeneity) が極めて高いことを感じる。恐らく同じ作者の手によるものと思われる。このことは RAM と SMRAM の諸章が本来同じ作品に属していたらしいことを示唆する。

二つの餓鬼女の話比べてみると、原話の Avs では、二話に出てくる餓鬼女の間で、その存在の苦しみには大した差が無い。しかし R15 と S30 の、アヴァダーナ・マーラーにおける再話においては、同じ二話に出てくる餓鬼女の間で、運命的な相違が非常に大きくなっている。一方には救いが示されて、他方には救いが示されない。R15 の話を読むと気づくことは、先の S30 において (vv.65-107) 説かれる餓鬼女の未来における救済が、R15 の話の餓鬼には一切語られていないことである。同じ餓鬼女という存在であっても、アヴァダーナ・マーラーの作者から見れば、R15 と S30 の二つの話に出てくる餓鬼女は犯した罪性の性質が全く異なると考えられたので、両者を同じように扱うわけにはゆかなかったのであろう。餓鬼界は慳貪によって墮ちるとされるが、このふたりの餓鬼女の場合、慳貪に駆られて行った別の悪行が問題になる。仏・法・僧の三宝のうち、S30 の女は、法と僧を誹謗した。R15 の女は仏を侮辱した。その差は大きい。

インドで Avs. が作られた時代には業が重視されたが、ネパールでアヴァダーナ・マーラーが作られた時代には、むしろ仏への信仰心の方が重視された。仏への信仰がある時には、仏の恩寵によって悪業も消滅するという大乘仏教的な信仰が、アヴァダーナ・マーラー作成の時代の仏教者には強くなっていた。その信仰心という点から見ると、アヴァダーナ・マーラーの作者は Avs の原話を尊重しつつも、二つの話に出てくる二人の女の運命には大きな違いがあると考えたのであろう。独覚 (pratyekabuddha) は尊い仏の一種である。R15 の悪女は、最高の福田である仏に侮辱的な振舞をした。

R15 を読む時、それを作ったアヴァダーナ・マーラーの作者が、Avs. の原話に出てくるこの独覚の鉢に糞を盛った悪女に対して、強い憤りを感じていたであろうことを感じざるを得ない。特に R15 の Avs #20 に相当する付加増広部分に出る、夫が妻を怒鳴りつける激しい言葉 (vv.82-86) の中に、私たちは R15 の作者が抱く仏の不信心者への激しい怒りの思いを十分に聞き取ることが出来る。その付加増広の箇所では、この悪女が原話のように死後に業報によって餓鬼女になって苦しむだけでは足りず、生前に資産家の夫から離縁され、家を追い出されホームレスとなり、死ぬまでに大変な悲惨さの中で苦しむという、やや加虐的な趣きのある記述が大きく追加されている。この膨張部分がもつ相当に加虐的な性格は、この法話を聞いて信心深い聴衆たちが感じるであろう悪女への報復の思いを、聴衆に代わってストーリー自体の中でうまく解消したいと作者が考慮

したのかも知れない。R15の作者はこの悪女が Avś の原話よりももっとひどい罰を受けるように話を膨らませ、しかもこの餓鬼女に対しては話の最後に仏からの救済の道を用意しなかった。R15の第96詩節ではこの餓鬼女を救済から永久に突き放すような言葉が出てくる：「この罪深い女には実にそれ以外の別な状態があるとは考えるべきではありません。そのように苦しみに焼かれながら、この者は久しく彷徨い続けるでしょう」。

考察の締め括りとして、今回紹介した二篇の餓鬼女のアヴァダーナについて、背後にある思想に注意してみると、強い信心の見返りとしての仏の恩寵による罪業消滅の思想が、原話の Avś よりも再話のアヴァダーナ・マーラー文献の方が、はるかに強まっていることが感じられる。Avś が強調するのは自業自得の原則による業の恐ろしさであるが、アヴァダーナ・マーラーの作者はむしろ、餓鬼が餓鬼界の恐ろしい境遇から救済されるためには、仏を憶念し仏に信心をもつことが肝要であると考えていたようである。S30の第86詩節では、餓鬼女が次のように仏に祈る：「愚かな心で私は罪悪をなしましたが、その罪行のすべてを、庇護者よ、今ここで消滅させてください」（*yaś cāpi prakṛtaṃ pāpaṃ mayā mūḍhena cetasā / tat sarvaṃ duṣkṛtaṃ nātha nāśaya tvam ihādhunā //*）。この詩節に、「仏の恩寵によって罪が消滅する」という思想が明白に出ていることは否定しがたい。アヴァダーナ・マーラーの作者は、「本人が業を味わうまで、その業は永遠に決して消滅しない」という、Avś の業の立場に忠実な主張を章末に必ず繰り返す一方で、Avś に相当箇所がない自由に書き加えた箇所においては、このような業の消滅の思想を語っているのである。どちらがアヴァダーナ・マーラーの作者の本音かといえば、後者のようにも感じられる。しかし現代人にとっては矛盾するよう感じられる、業報必至の思想と滅罪の思想とは、作者にとっては何ら矛盾のない、彼が属する時代・地域の仏教のシステムの中では整合性がとれている思想なのであろう。その整合性の具体的なあり方を今後もさらに他の説話を通して注意深く見てゆく必要がある。ネパールの Avś 系列のアヴァダーナ・マーラー文献を作成した作者の意図は、小乗上座部系の部派が強調した業果必然の思想に基づく Avś という業報文献を、大乘仏教的な信仰（特に浄土信仰）とうまく調和させながら、聴衆にわかりやすく解き明かし、聴衆を彼が信奉する大乘と小乗が矛盾なく組み合わされた修行道へ導くためにあったのではないだろうか。

※本研究は科研費（19520052）の助成を受けたものである。

<キーワード> Bodhisattvāvadānakalpalatā, Subhāṣitamahāratnāvadānamālā, Avadānanaśataka, Ratnāvadānamālā, Śakracyavanāvadāna, Mahendrasenāvadāna, Pretikāvadāna, Jātyandhapretikāvadāna

（九州大学大学院教授, Ph.D.）